

福井工業高等専門学校

自己点検・評価報告書



800-07-9682 REV A

4-2-4

平成24年2月



独立行政法人 国立高等専門学校機構
福井工業高等専門学校

まえがき

本校は、本年で創立47周年を迎え、この間、本科卒業生約6,600名、専攻科修了生約320名を社会に送り出し、わが国の産業発展に寄与するとともに地域社会に多大の貢献を果たしてきた。国立高等専門学校は、主として公費で運営されており、その運営状況を外部に公開し、内容を国民に積極的に説明するとともに、常に改善に努めることが求められている。本校は平成16年の法人化から8年経過しようとしており、平成21年度からは第2期中期計画に基づいて教育研究活動を展開している。本校の教育プログラムは、日本技術者教育認定機構（JABEE）により認定され、認定校としての社会的評価を得るとともに、本校専攻科修了生は技術士一次試験が免除され、最短26歳で技術士の資格が取れることとなっている。また、本校は平成17年に全国高専のトップを切って大学評価・学位授与機構による認証評価を受審し、「本校は高等教育の基準を満たしており、改善を要する点はない」との認定を受けた。特に、平成17年度から工学基礎コースを設置し、1年全科共通科目としての「ものづくり科学」を新設したことなど、本校の取り組みの幾つかが優れたものとして併せて認定されたことは、教職員が普段から取り組んできた努力の成果だと考えている。来年度は、次回の認証評価を受審することとなっており、現在、そのための準備を進めている。

本校では、自己点検・評価委員会を中心として「福井高専教育点検システム」を整備し、普段から本校の教育内容のレベル維持に努めている。本自己点検・評価報告書は、平成23年3月にまとめた同報告書に続くもので、本校の教育・研究活動の全貌を記載している。

上記福井高専教育点検システムでは、計画(Plan)、実施および運用(Do)、点検・検証(Check)、見直し・改善(Action)の、いわゆるPDCAサイクルが常時運用されるが、その要が毎年刊行されている本報告書であり、外部に公開して第三者のご批判、評価、ご意見を戴くことをその目的とする。本校では、学外からの意見を仰ぐため、福井工業高等専門学校外部有識者会議を設置し、本校の教育研究目標と計画、自己評価、その他本校の運営に関する重要事項について助言と勧告を得ることとしており、本書はそのための基礎資料としても利用に供される。

本書が本校内外で活用されて、本校の教育研究の一層の改善・充実につながることを期待している。

平成24年2月

福井工業高等専門学校

校長 池田大祐

目 次

ま え が き

I . 本校の現状と特色	1
I -1 現状と特色	1
I -2 学科構成	2
I -3 学習と教育の目標	3
I -4 第Ⅱ期中期計画及び平成23年度アクションプラン	7
I -5 研究活動の状況	20
I -6 地域への支援	21
I -7 特別教育研究経費などの採択状況	22
I -8 広報活動	26
I -9 将来計画	30
II . 各学科・教室の教育理念	32
II -1 一般科目教室	32
1. 教育理念・教育目標	32
2. 将来計画	32
3. 重点課題	33
II -2 機械工学科	34
1. 教育理念・教育目標	34
2. 将来計画	34
3. 重点課題	36
4. 進学・就職指導状況	36
II -3 電気電子工学科	38
1. 教育理念・教育目標	38
2. 将来計画	39
3. 重点課題	39
4. 進学・就職指導状況	40
II -4 電子情報工学科	41
1. 教育理念・教育目標	41
2. 将来計画	41
3. 重点課題	42
4. 進学・就職指導状況	42

II-5 物質工学科	43
1. 教育理念・教育目標	43
2. 将来計画	43
3. 重点課題	44
4. 進学・就職指導状況	44
II-6 環境都市工学科	45
1. 教育理念・教育目標	45
2. 将来計画	46
3. 重点課題	47
4. 進学・就職指導状況	47
III. 専攻科	49
1. 教育理念・教育目標	49
2. 将来計画	50
3. 重点課題	51
IV. 教務関係	53
1. 基本方針	53
2. 教育関連の課題と今年度の対応	53
3. 原子力人材育成教育、長岡技術科学大学との戦略的 技術者育成協働教育の開始	54
4. 入学者確保とその状況	55
5. 留学生受け入れ状況	65
6. 在校生の状況	65
7. 平成23年度入学者選抜中学校別志願者数等一覧	67
V. 進路指導関係	70
1. 基本方針	70
2. 本校卒業後・修了後の進路	70
3. 進路決定の流れ	71
4. 進学・就職先一覧	73
VI. 学生指導関係	74
1. 基本方針	74
2. 学生支援について	74
3. 学生の活動状況	76
4. 奨学金受給状況・授業料免除実施状況一覧（平成23年度）	79
VII. 学寮関係	80
1. 基本方針	80
2. 寮生の受け入れ状況	80
3. 活動状況	80
VIII. 学生相談室・保健室関係	81
(1) 学生相談室	
1. 基本方針	81
2. 学生相談室利用状況と相談分野	81

(2) 保健室	
1. 基本方針	82
2. 保健室の利用状況	82
IX. 図書館関係	84
1. 基本方針	84
2. 活動状況	84
X. 創造教育開発センター	86
1. 創造教育開発センター設立の経緯と業務	86
2. 平成22年度、平成23年度の活動	86
3. 次年度への課題など	88
X I. 総合情報処理センター	89
1. 基本方針	89
2. 活動状況	89
3. 利用状況	89
X II. 地域連携テクノセンター	93
1. 基本方針	93
2. 活動状況	95
X III. 教育研究支援センター	96
1. 基本方針	96
2. 活動状況	96
X IV. 評価体制	98
1. 本校の評価体制	98
2. 外部評価の受審	98
3. 外部有識者会議による外部評価	99
4. JABEEへの取り組み	100
X V. 資料一覧	
・科学研究費補助金採択一覧	103
・外部資金受入一覧（共同研究・受託研究・奨学寄付金）	106
・出前授業・公開講座実施一覧	117
・公開授業実施一覧	132
・教員の派遣一覧	136
X VI. 教育研究スタッフ一覧	
・一般科目教室	137
・機械工学科	181
・電気電子工学科	205
・電子情報工学科	223
・物質工学科	241
・環境都市工学科	267

I. 本校の現状と特色

I-1 現状と特色

本校は、実践的開発型の技術者の養成を目的に昭和40年4月に設置され、これまでに6,613名の本科卒業生及び322名の専攻科修了生を送り出している。現在、「機械工学科」、「電気電子工学科」、「電子情報工学科」、「物質工学科」、「環境都市工学科」の5学科において、実践性と創造性を併せ持つ高度技術者を養成すべく、5年一貫教育を行っている。また、平成10年4月には専攻科を設置し、「生産システム工学専攻」、「環境システム工学専攻」において、さらに進んだ教育を行っている。

教育の特徴としては、豊かな創造力とデザインマインドを持つ技術者を育成するため、「ものづくり教育」を進め、NHKアイデア対決ロボットコンテストでも毎年のように上位に入賞し、平成5年度と平成9年度の2度にわたって最高の賞であるロボコン大賞を獲得するとともに、平成12～22年度にかけては毎年連続して、全国大会出場を果たした。

本校を目指す中学生に対しては、アドミッションポリシーを示すと共に、平成17年度には、入学時に学科を決められない中学生のために、2年次より転科可能な「工学基礎コース」を全国で初めて設置した。

また、福井高専は地元に立脚した学校及び地元に開かれた学校を目指し、産官学共同研究を進めている。福井県における産官学共同研究ネットワークの中心の一つである「地域連携テクノセンター」では、地元に密着した共同研究を進めている。福井県の伝統産業である和紙の生産者組合、福井県和紙工業協同組合と地元町の依頼により「伝統産業支援室」を設置（平成16年10月）し、和紙に関する共同研究を行っている。

さらに、福井高専の立地する鯖江市は世界最大の眼鏡枠生産地でもあることより、福井県眼鏡工業組合とも新しい産官学共同研究事業を開始し、「地場産業支援室」を設置（平成17年4月）して眼鏡枠材料に関する共同研究を行っている。また、平成17年5月には、これら地域社会との連携をさらに深めるため、本校は近隣2市1町と包括的な連携である「地域連携協定」を結び、さらなる共同研究・出前授業・リカレント教育に取り組んでいる。

国際連携としては海外学生派遣制度の他、平成17年度からオーストラリアのBallarat大学と提携し、学生の相互互換留学制度を開始することとした。平成18年5月には、本校学生17名がBallarat大学へ1週間留学し、英会話と現地の文化歴史に関する学習を行った。平成22年3月にも2週間、本校学生9名を留学させるとともに、平成23年12月にはBallarat大学の学生9名を受け入れ、本校学生との交流を図った。今後も引き続き、同大学と本校は相互互換留学制度を続けることで合意している。

学校運営の評価として、平成14年度に校外の有識者による外部評価委員会（平成16年度から「評議員会」、平成21年度から「外部有識者会議」）を設置し、開催後に結果の開示を行っている。

本校本科の全学科の4、5年と専攻科の全専攻（生産システム工学専攻、環境シス

ム工学専攻)の1、2年の教育課程を融合複合した「環境生産システム工学」教育プログラムは、平成16年度日本技術者教育認定機構(JABEE)から、社会の要求を満たしている技術者教育プログラムであることの認定を受けた。認定期間の満了に伴い平成21年10月に継続審査を受審し、平成22年5月には、平成21年度からの認定継続が認められた。ただしこの際、専門工学の定義等がわかりにくいとの指摘を受け、今年度入学生からはこれらを改善した教育プログラムを展開している。平成24年度には中間審査の受審を予定している。

さらに、平成17年11月には(独)大学評価・学位授与機構による「高等専門学校機関別認証評価」を受審し、平成18年3月に「改善事項なし」との評価結果が同機構より発表された。平成24年度には再受審を予定しており、現在、その準備を行っているところである。

I-2 学科構成

昭和40年度に本校は「機械工学科、電気工学科、工業化学科」の3つの学科で発足した。これは、工学の基礎となる機械・電気・化学となる学科が構成されたものであるが、工業化学については福井県が繊維及び染色関係の企業が多いことにより設置されたものである。

また、昭和45年度には「土木工学科」が増設されたが、これは、福井県が大手の土木業者を多く出している土木県であると共に、当時の土木技術者不足に対応するためである。さらに、昭和63年度には情報社会の到来を受けて、ハードとソフト両面の情報処理技術者を育成する「電子情報工学科」が増設された。

その後、平成5年度に土木工学科を時代の要請に沿うべく「環境都市工学科」として改組した。また、平成7年度に工業化学科を「物質工学科」として改組し、材料工学コースと生物工学コースの二つのコース制とした。さらに、平成17年度には、電気工学科を「電気電子工学科」とした。これは電気工学科卒業者にも、近年の進展する電子技術を基礎より教育する必要があるため、学科の改組を行ったものである。

したがって、現在の学科構成は後述する本校の基本理念に掲げる環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育を行うため「機械工学科、電気電子工学科、電子情報工学科、物質工学科、環境都市工学科」の5学科による構成となっている。すなわち、本校の学科構成は福井県の主幹産業である繊維工業、化学工業、眼鏡枠工業、電子電気工業、環境土木産業に基づいたものであり、これらの産業においては繊維工業、眼鏡枠工業などに代表されるようにデザイン技術が重要なことが多い。

本校の学習・教育目標では、ものづくり・環境づくり、システムデザイン能力の育成を掲げ、5つの学科で共通にこれらのこと学ぶシステムとなっている。さらに、一般科目では専門の基礎科目、文科系科目を履修し、専門課程での学習に十分に教育効果をあげる

ことができるようになっている。

また最近10年間の各学科の求人倍率は、各学科ともに10倍を超えており、これは本校の教育システムが社会から受け入れられていることを示している。

I-3 学習と教育の目標

昭和40年4月に創立された本校は、以下の基本理念と教育方針を掲げている。

基本理念

- ・創造性豊かな人材を育成する。
- ・幅広い工学的素養、基礎能力及び応用能力の育成を目指す実践教育を行う。
- ・高度に情報化した国際社会に対応する教育を行う。
- ・環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育を行う。
- ・地域と連携した産官学共同研究の推進を図る。

教育方針

- ・技術者として必要かつ十分な基礎力と専門技術を習得させる。
- ・個性を伸長し、独創的能力の開発に努力する。
- ・教養の向上に努め、良識ある国際人としての成長を期する。
- ・健康の増進に努め、身体的精神的に強じんな耐久力を育成する。
- ・規律ある日常生活に徹し、明朗、かつ達な資性のかん養を図る。

これらの基本理念と教育方針に基づいて、本科(準学士課程)と専攻科課程における学習・教育目標を、以下のように制定している。

学習・教育目標

【本科(準学士課程)】

RA 多様な文化や価値観を認識できる能力を身に付ける。

- ① 人間社会の基本的な仕組みを理解し、様々な地域の言語や歴史・伝統などの文化を多面的に認識できる。
- ② 様々な地域における芸術とそれに根ざした価値観を、認識・理解する意識を持てる。

RB 数学とその他の自然科学、及び専門分野におけるものづくり、環境づくりに関する基礎能力を身に付ける。

- ① 数学とその他の自然科学に関する基礎知識を理解できる。
- ② 専門分野における基礎知識・技術に基づいて情報を処理し、工学的現象を正しく理解できる。

- RC 技術者に必要なデザインマインドを身に付ける。
- ① 課題に対して自主的に問題を発見し、解決方法を探求して問題解決能力の重要性を認識できる。
- RD 國際社会で活躍するためのコミュニケーション基礎能力を身に付ける。
- ① 英語による基礎的な対話や文章が理解でき、自分の意見を表現できる。
 - ② 日本語の文章や言語作品を的確に理解・鑑賞でき、自分の思いや主張を適切に日本語の談話や文章で表現できる。
 - ③ わかりやすい図表等を作成し、それを用いて日本語により効果的な説明ができる。
- RE 実践的能力と論理的思考能力を身に付ける。
- ① 実験・調査などの経験を通してデータの解析法を学び、理論との比較や考察などができる。
 - ② 課題の背景を理解し、習得した知識を生かして適切な方法を選んで実験・調査などを遂行し、データを解析・考察することにより、結果を客観的に説明できる。
 - ③ 身体・健康・スポーツに関する知識と実践力を獲得するために各自の能力に応じて目標を設定し、個人あるいはグループで課題を達成できる。

【専攻科課程】

- JA 地球的視点から多様な文化や価値観を認識できる能力を身に付ける。
- ① 異なる地域に属する人々がもつ文化や、それに根ざした価値観などを多面的に認識できる。
 - ② 持続可能な地球社会を構築するという目的意識のもと、種々の分野における人間の活動や文明が地球環境に与える影響について理解できる。
 - ③ 技術者が社会に対して負うべき責任を明確に自覚したうえで、工学に関する学術団体が規定している倫理綱領を理解し、説明できる。
- JB 数学とその他の自然科学、情報処理、及び異なる技術分野を含む問題にも対処できる、ものづくり・環境づくりに関する能力を身に付ける。
- ① 工学的諸問題に対処する際に必要な、数学とその他の自然科学に関する知識を理解できる。
 - ② 工学的諸問題に対処する際に必要な、情報処理に関する基礎知識を理解できる。
 - ③ 得意とする専門技術分野を持つことに加え、他の技術分野を積極的に吸収して、持続可能な社会の構築を意識したものづくりのプロセスに対応できる。
- JC 技術者に求められる基礎的なデザイン能力を身に付ける。
- ① 構造物または製品を設計する際に、複数の技術分野についても意識しながら、つくる目的を理解し、機能性・安全性及び経済性に加えて、環境負荷の低減・快適性などを考慮できる。
 - ② 新しく出会った課題について、自ら問題点を発見しようとする意識を持ち、既知の

事柄と未知の事柄とを識別したうえで、それらを蓄積・整理できる。

- ③ 既成概念にとらわれない創造性豊かな発想のもと、自分の専門分野以外の技術分野を含む課題について、多様な観点から検討・考察し、その結果を具体的に示せる。
- ④ 異なる分野の人を含んだグループでの協議及び共同作業を通して、解決方法について複数の候補を見いだし、その中から最も適切なものを選択できる。

JD 國際社会で活躍する技術者に必要なコミュニケーション基礎能力を身に付ける。

- ① 英語による日常的な内容の文章や対話を理解でき、英語により自分の意見を適切に表現できる。
- ② 得意とする専門技術分野に関わる英語論文等の内容を日本語で説明できる。
- ③ 自分の意見・主張などを、相手を意識した規範的な表現を用いて日本語の談話や文章で表現できる。
- ④ 日本語による口頭発表や討議において、自らの報告・聴衆への対応・他者への質疑などを行える。
- ⑤ 正確で分かりやすいグラフや図表を、必要に応じて用意できる。

JE 実践的能力及び論理的思考能力を総合的に身に付ける。

- ① 得意とする専門技術分野を含む複数の工学分野において、与えられた実験・演習課題の工学的意義を理解し、提示された方法を計画・実行することにより、定められた期限までに妥当な結果を導ける。
- ② 数学や情報処理の知識・技術を用いて、実験または数値シミュレーションの結果を統計的に処理し、その結果を評価して、対象としている工学的現象の成り立ち・仕組み等を理解し、説明できる。
- ③ 技術者が経験する実務上の工学的な諸問題を認識し、それらを具体的に示せる。
- ④ 自ら明確に設定した目標を達成するため、詳細な計画を立て、それに沿って継続して努力できる。
- ⑤ 考察対象に関する見解を論理的に構築し、それに基づいた問題解決のための仮説を立て、適切な実験・解析方法を選択できる。

上記の学習・教育目標の下、一般科目教室及び各学科の人材の育成に関する目的その他の教育上の目的(以下、目的と称する)は次のとおりである。

- (1) 一般科目教室は、高度な技術教育の基盤となる学力を身に付け、豊かな教養と知性を持つ社会人を育成する。
- (2) 機械工学科は、機械システムの開発・設計・生産の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考能力を備えた実践的で創造性豊かな技術者を育成する。
- (3) 電気電子工学科は、通信・エレクトロニクス、情報・制御、光・電子デバイス、エネルギー等の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考能力を備えた

実践的で創造性豊かな技術者を育成する。

- (4) 電子情報工学科は、情報化社会の基盤となるソフトウェア、コンピュータネットワーク及びコンピュータ制御の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考能力を備えた実践的で創造性豊かな技術者を育成する。
- (5) 物質工学科は、材料工学あるいは生物工学の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考能力を備えた実践的で創造性豊かな技術者を育成する。
- (6) 環境都市工学科は、社会資本を持続可能にする土木・建築の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考能力を備えた実践的で創造性豊かな技術者を育成する。

また、専攻科における生産システム工学専攻及び環境システム工学専攻の目的は次のとおりである。

- (1) 生産システム工学専攻は、高等専門学校等で習得した基礎学力の基盤の上に、機械・設計関連、システム制御関連、電子・物性関連及び情報・通信関連分野の知識を広く教授し、これらを有機的に統合した生産システムの設計並びに開発研究等を行うことのできる創造力を持った実践的技術者を育成する。
- (2) 環境システム工学専攻は、高等専門学校等で習得した基礎学力の基盤の上に、構造・材料関連、生物・化学関連、環境・分析関連及び防災・都市システム関連分野の知識を広く教授し、これらを有機的に統合した環境システムの設計並びに開発研究等を行うことのできる創造力を持った実践的技術者を育成する。

なお、本校専攻科では、これから多様化した社会で活躍できる実践的な技術者を養成するために、専門共通科目を多く配し、さらに他専攻の科目を修得できるなど、複数の技術分野にまたがる学習ができるようになっている。また、専攻科2専攻と本科5学科の4、5年次の教育課程からなる教育プログラムを「環境生産システム工学」と位置付けている。この教育プログラムは日本技術者教育認定機構（略称：JABEE）から社会の要求を満たしている融合・複合分野の技術者教育プログラムであるとして、平成16年度から認定されている。「環境生産システム工学」教育プログラムでは、環境を意識したものづくり能力だけにとどまらず、環境づくりができる能力の育成を目指している。さらに、「もの」「人」「環境」の連携を図り、それらを有機的に結び付けるシステムのデザイン能力の育成も図っている。このため専攻科においては、得意とする分野の習得を深化させる授業のみならず、融合複合型授業として出身学科が異なる学生同士が共同して新しい課題・分野に挑戦する能力を育成するための授業や、体験型学習が用意されている。

学校教育法第115条には「高等専門学校は、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な

能力を育成することを目的にする。」との、高等専門学校に対して一般的に求められる目的が明確に規定されている。同規定と前述した学習・教育目標、各学科・専攻における目的との関係は次表のとおりであり、本校における本科(準学士課程)と専攻科課程の学習・教育目標や、各学科・専攻の目的は学校教育法第115条の規定に適合している。

養成すべき人材像

本校の養成すべき人材像は以下のとおりである。

「優れた実践力と豊かな創造性を備え、国際社会で活躍できる技術者」

I-4 第II期中期計画及び平成23年度アクションプラン

福井工業高等専門学校第II期中期計画

(序文)

ICT技術の革新によって、社会はいま情報技術を中心に大きく転換し始めようとしている。また、教育のグローバル化、教育機会均等化が進み、高等教育のこれまでのシステムが大きく変化しようとしている。産業界からもこれまでの画一主義教育より、創造性の高い個性を伸ばす教育が求められている。地域社会からも大きな期待を寄せられている。

福井工業高等専門学校では、これら社会の要請に応え、21世紀を担う人材を育成するため、新しい教育・研究の理念とそれに伴う整備計画を策定したい。特に、学生の夢が実現する学校、学生・社会から魅力ある学校、環境・社会・人に優しい学校を目指したい。

これらの実現のために、本校の教育理念、教育方針、教育目標、養成すべき人材像による、第II期中期計画（平成21年度～平成25年度）を次のように策定した。

1. 教育充実の具体的方策

(1) 教育内容・方法などの充実

① 地域の産業界との幅広い連携の促進

- ・ 地域の産業界と連携し、カリキュラム開発、教材開発、企業への教員派遣、企業からの教員派遣、共同研究を通じた企業への学生派遣を行う。
- ・ インターンシップの一層の推進を図り、学生が企業の生産・開発現場で、研究課題と課題意識を持ち、学校で学んだ知識を活かして、現場での問題解決と解決できる能力を培う。具体的には、本科4年生のインターンシップの充実と、専攻科1年生のインターンシップのさらなる充実を図る。

さらに、国立高等専門学校機構による海外学生インターンシップに積極的に参加する。

**学校教育法第115条 高等専門学校の目的と、
本校における学習・教育目標ならびに各学科等の目的との対応関係**

「深く専門の学芸を教授」に対応	「職業に必要な能力を育成」に対応
本科の学習・教育目標において <ul style="list-style-type: none"> 専門分野におけるものづくり、環境づくりに関する基礎能力を身に付ける 	本科の学習・教育目標において <ul style="list-style-type: none"> 技術者に必要なデザインマインドを身に付ける 実践的能力、論理的思考能力を身に付ける 国際社会で活躍するためのコミュニケーション基礎能力を身に付ける
機械工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 機械技術者として必要な基礎学力の育成 	機械工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 技術革新、高度情報化社会に対応できる能力の育成 創造性、実践的能力等の育成および人間力の育成
電気電子工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 電気電子技術者に必要な専門的かつ総合的な基礎力の育成 	電気電子工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 幅広い専門分野に適応できる応用力の育成 独創力およびコミュニケーション能力の育成
電子情報工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力と能力の育成 	電子情報工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 変化する IT 社会に対応できる応用力の育成 実験実習や卒業研究を通した実践的能力や創造能力の育成
物質工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 物質工学に必要な基礎科学および幅広い専門基礎能力の育成 材料工学あるいは生物工学を得意とする専門能力の育成 	物質工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 実践的能力およびプレゼンテーション能力の育成
環境都市工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 建設技術者に必要な基礎的な学力と能力の育成 	環境都市工学科の目的において <ul style="list-style-type: none"> 幅広い専門分野の理論に関する応用力の育成 実験実習や卒業研究を通した実践的能力や創造能力の育成
専攻科における学習・教育目標において <ul style="list-style-type: none"> 異なる技術分野を含む問題にも対処できる、ものづくり・環境づくりに関する能力を身に付ける 	専攻科における学習・教育目標において <ul style="list-style-type: none"> 技術者に求められる基礎的なデザイン能力を身に付ける 国際社会で活躍する技術者に必要なコミュニケーション基礎能力を身に付ける 実践的能力及び論理的思考能力を総合的に身に付ける
生産システム工学専攻の目的において <ul style="list-style-type: none"> 高等専門学校等で習得した基礎学力の基盤の上に、機械・設計関連、システム制御関連、電子・物性関連および情報・通信関連分野の知識を広く教授 	生産システム工学専攻の目的において <ul style="list-style-type: none"> 生産システムの設計並びに開発研究等を行うことのできる創造力を持った実践的技術者を育成
環境システム工学専攻の目的において <ul style="list-style-type: none"> 高等専門学校等で習得した基礎学力の基盤の上に、構造・材料関連、生物・化学関連、環境・分析関連および防災・都市システム関連分野の知識を広く教授 	環境システム工学専攻の目的において <ul style="list-style-type: none"> 環境システムの設計並びに開発研究等を行うことのできる創造力を持った実践的技術者を育成

② 一般教育の充実

- ・ 変動する現代社会への対応が求められる技術者に必要な専門的知識の基礎をなす思考力、表現力、洞察力、創造力などを身につけるために基礎教育の充実を図る。
- ・ 国際社会で活躍できる技術者を育成するために、コミュニケーション能力の向上を目指す教育の充実を図る。その対策のひとつとして、各種検定試験などの受験の奨励や支援に務める。

以上のように、一般科目においては、本校の教育理念に相応しい効果的な教育内容・方法となるよう、知育・德育・体育のバランスを考慮しつつ、より一層の教育の充実を図る。

③ 専門教育の充実

- ・ 機械工学科

創成科目や実技系科目など学生の創造性を引き出す科目を重視しつつ、ものづくりのセンスと実践力を涵養させる。さらに、機械のエンジニアとしての基礎能力を養うために、これまでの教育内容を継続し、さらなる充実を図る。

- ・ 電気電子工学科

「通信・エレクトロニクス」、「情報・制御」、「光・電子デバイス」、「エネルギー」分野を学び、今後の社会要請に対応できる基礎力と応用力を持つ電気電子工学分野の人材育成を目指す。また、体験型のものづくり実験・演習への積極的な取り組みを行い、問題解決能力と創造性ある人材育成を目指す。低学年では電気電子工学関連の基礎知識習得と現象理解に重点的に取り組み、高学年では専門知識の深耕を行う。

- ・ 電子情報工学科

I C T 分野、電子技術分野に興味を持ち、世の中に I C T に関わる新しいサービスやシステムを創造できる人材の育成を目指す。I C T 分野のエンジニアとしての基礎能力を養うために、これまでの教育内容を継続しつつ、ソフトウェア系科目並びにネットワーク系科目の充実を図る。

- ・ 物質工学科

受け入れ側の情勢変化に応じ社会が求める人材を育成するために、必要な施策を講じる。具体的には、基礎学力および応用力を着実なものとし、多様な状況に対応するための意思疎通・表現能力のさらなる涵養と、国際化を視野に入れた英語能力の向上等を目指して、カリキュラムの改善に取り組む。また、情報リテラシーは欠くことの出来ない基礎的素養になりつつあるので、この点でも教育・実習の中での充実を図りたい。

- ・ 環境都市工学科

学生が自分の将来を見据えて学習できるように、土木・建築系技術者に関する

るキャリアパスを提示し、専門課程の学習に対して興味が湧くような工夫を図る。その1つの方法として、積極的に卒業生から意見を聞き、社会あるいは産業界からの要望を授業内容に取り入れていくことを考える。一級建築士試験受験資格を取り込んだカリキュラムしたことから、卒業生が出るまではカリキュラム自体の変更は難しい。そのため、個々の授業内容を土木・建築に関するコアの部分が抽出・精査された内容や、社会が求めているエンジニアリングデザイン能力が身につくような内容となるように充実させる。

- 専攻科

本科からの継続した研究指導体制を強化し、専門領域を深化させるのみならず、専攻の枠組みをも越えた融合複合的な工学技術教育の展開を図る。また、各種学会主催の講演会・技術交流会や長期インターンシップへの積極的参加を促すとともに、専攻科生と企業との共同研究を促進し、技術ニーズや求められる技術者像を明確に認識できる機会の増加を図る。さらに既設の海外派遣制度を充実させ、海外企業技術者や大学研究者等との交流・相互理解を通して国際化に対応できる能力を涵養する。

④ 自学自習による教育効果を考慮した教育の充実

平成17年の高等専門学校設置基準の改正により、60単位を上限として大学と同様に45時間の学修内容をもって1単位とすることができるようになった。今後とも、この制度を活用して、授業形態・指導方法の多様性や優れた技術者を育成する上で有効な自学自習による教育効果を活かした特色ある教育課程の編成を進める。

⑤ 退職技術者を含む企業人材等の活用

技術を持った意欲ある企業人材の活用を積極的に進め、講座講師などとして活用し、ものづくり技術の伝承を進める。

⑥ 他高等専門学校・大学との人材交流

他の高等専門学校教員、技術科学大学教員との人事交流により、教育研究活動の活性化と連携を深めると共に、教育の質の向上に努める。

⑦ キャリア教育の実施

高等専門学校はこれまで実験・実習など体験重視型教育を行ってきたが、産業界や社会のニーズに応えて、キャリア教育の実施や実践的な人材育成の教育課程の編成を図る。

また、平成19年度採択の現代G Pによって、3年間にわたり、アントレプレナーサポートセンターを用いた、全学的な実践的キャリア教育を進めている。この補助事業を最大限に活用して、本校のキャリア教育を具体的に進める。たとえば、定期的なセミナーの開催、アドバイザーによる学生支援、コーディネーターによるキャリア教育の取組、OJT教育の導入などを進める。

⑧ e-ラーニング教育、PBL教育、コーオプ教育の実施

- ・ インターネットなどを活用したe-ラーニングの取組を充実させる。
- ・ 本校では低学年における早期専門教育としてPBL型授業である「ものづくり科学」を導入しているが、今後も手厚い教員層によるPBL教育を展開する。
- ・ 産業界や他の高等教育機関との有機的な連携による共同教育（コーオプ教育（coop教育））の実施を検討する。

⑨ 工学基礎コースの改善

工学基礎コースは設置以来数年が経過した。今後、工学基礎コースの長所や問題点を点検しながら、コースの改善を図る。

⑩ スポーツなどの全国的な競技会やロボットコンテスト、プログラミングコンテストなどの全国的なコンテストに積極的に参加する。

（2）教育研究の実施

教職員による教育研究は、地域などへの協力のみならず、教育の質の向上にも重要である。今後とも、企業等産業界や地域社会との連携により、共同研究及び受託研究の進展を図る。また、科学研究費補助金をはじめとする外部資金の獲得に努める。教育研究を活性化するため、校長裁量経費の配分、学内競争的資金の実施、予算配分のプライオリティ付け等を行う。

（3）質の高い入学者の確保

- ① さらなる教育の充実により社会で活躍できる高度な技術者を育成し、本校の知名度をさらに高めることにより本校の教育に適正な入学志願者数の維持を図る。特に女子学生の志願者確保に向けた取り組みを推進する。
- ② 小・中学生やその保護者への広報活動、理科教育支援を行う。高等専門学校教育の質を維持・向上していくため、今後とも、意欲を持った質の高い入学者を確保する。そのために、小中学校の段階で理科・数学やものづくりの関心を高め、サイエンスに対する好奇心を持たせ、面白さ、楽しさの中に、科学的なものの見方を身につける楽しさがあることを体験させる。そのため、小中学生を対象とした理科実験教室などを出前授業・公開講座などで開催する。
- ③ オープンキャンパスを実施し、小中学生や、保護者を含めた広報活動に力を入れて取り組んでいく。
- ④ 高等学校卒業生の4年次への編入学をさらに進めていく。高等専門学校は5年間の一貫教育が特徴であるが、質の高い編入学生の確保と高等学校卒業生に多様な進路選択を提供するために制度の充実を図る。
- ⑤ 中学校、高等学校への広報活動を更に充実させるとともに、ホームページを充実させ、学生関係情報（学生生活状況・卒業時の進路等）について、積極的に情報を

公開する。

- ⑥ 社会で活躍中の本校卒業生を紹介するパンフレットを作成し、中学生・保護者・中学校関係者に本校への一層の理解を図る。

(4) 教育基盤の強化

① 教員の確保

今後とも意欲と教育に対する情熱にあふれた優れた教員の確保を行っていく。さらに、実践的な専門教育を行っていくために企業などでの実務経験のある教員も積極的に採用する。

また、男女共同参画社会の実現と女子学生確保の立場から、女性教員の採用促進が国立高専機構の人事方針として示されている。本校においても女性教員の比率向上を図るため、働きやすい職場環境の整備などに努め、更なる採用に向けて努力する。特に女子学生が多く在学する学科での採用が望まれる。

文部科学省の制度や外部資金を活用して、教員に長期短期の国内外の大学における研修の機会を設けるとともに教員の国際学会への参加を促進する。

② ファカルティディベロップメント(FD)の実施

教員の能力向上を行うため、ファカルティディベロップメント(FD)の組織的な実施を図る。

③ 教員の力量を高めるため、高等専門学校間の教員人事交流制度を活用するほか、高等学校、大学、企業などの任期を付した人事交流を図る。

(5) 産業界や地域社会との連携

① 本校が有する知的資源によって、積極的に社会の発展に貢献する。このため、地域産業界などとの共同研究や、公開講座、出前授業にさらに積極的に取り組む。

② 地域ニーズを十分踏まえた教育研究活動を展開していくため、地域連携の強化を図る。具体的には地域連携テクノセンターの機能を充実させるとともに、同センターに地域連携強化のためのスペースの確保、新たなニーズの調査とその対応などを図る。

③ 地域と連携して開催しているマグネットコンテスト、めがねワク waku コンテストなどのさらなる展開を図る。

④ 高等専門学校の設備やノウハウを利用して取り組んでいる中小企業庁「高等専門学校等を活用した中小企業人材育成事業」は平成20年度が最終年であるが、今後とも自立講座などとして支援を行う。

(6) 国際的な展開

産業・経済や技術が国際的な広がりを強め、これに伴い技術者も国境を越えて活

躍している現状から、国際的に活躍できる能力を持った人材の養成のための教育が求められている。このため、本校では平成18年にオーストラリア、バララット大学と提携して交換留学を始めたが、今後も同大学との連携を深める。また、他の外国大学との提携を図るほか、学生の国際学会などでの発表を支援する。さらに、外国大学などとのインターンシップ、コーラス教育などの実施を検討する。

また、留学生の積極的な受け入れを図る。そのための宿舎の整備、学習・生活サポートを引き続きしていく。

(7) 学生支援

- ① 学生に対してきめ細やかな対応をするため担任制度を継続するとともに、学生相談室を充実して、学生のメンタルヘルス管理を十分に行う。
- ② 学寮運営に対する寮生・教職員の協力体制の充実を図り、メンタルヘルスを含めた寮生の学習・生活の支援にあたる。
- ③ 学生の適性や希望に応じた進路選択を支援するため、企業情報、就職・進学情報などの提供体制や専門家による相談体制を充実させる。
- ④ 学生のボランティア活動などの社会奉仕体験活動や自然体験活動などの支援を行い、学生の人間的成长を図る。
- ⑤ 独立行政法人日本学生支援機構などと緊密に連携し、各学校における各種奨学金制度などの学生支援に係る情報を提供する。
- ⑥ 図書館の充実や学寮の改修などの計画的な整備を図る。さらに、学生寮の室数の増加と女子学生寮の整備を図る。

(8) 多様な学生への支援

第4学年に編入する学生や、専攻科に入学する社会人入学生、留学生などは高専生活に不慣れである場合が多い。これらの多様な学生については、学力と生活の両面でサポートを行っていく。

(9) 学校の高度化再編・整備

地域ニーズに対応した教育研究活動を強化し、教育の質の一層の向上を図っていくには、今後の社会の高等専門学校に対するニーズ、地域における15歳人口の動向や地域の産業特性などを十分に考慮する必要がある。また、今後5年間には、社会経済のあらゆる場面に情報通信技術(ICT)分野を中心とした融合・複合分野が重要となってくると考えられる。これらのこと考慮して、学校内における学科の再編を視野に入れて検討に努める。

平成18年8月に国立高等専門学校機構より出された「国立高等専門学校の再編

整備について」を踏まえて、本校では今後の本科・専攻科の学科再編について協議した。その結果、平成19年10月協議会において、今後の在るべき本校の学科構成として、現在の5つの学科は、現在の専攻科制度や現在の本校の教育理念から、「ものづくり」、「環境づくり」の二つが大きな系にまとめられ、さらに、（1）機能創成、（2）情報、（3）エネルギー、及び、（4）環境（材料、生命）、（5）安全工学の5つに細分することを今後検討することとした。今後、これらを踏まえつつ、引き続き検討を図る。

2. 事務部門の強化と効率化

学校の運営に当たっては、教員だけでなく、事務部門の強化も必要である。事務部門職員に対するSDなどによる事務職員の育成と技術スタッフの充実を図る。また、独立行政法人国立高等専門学校機構のスケールメリットを活かした事務の効率化をさらに進める。

3. 施設・設備の更新及び高度化

- (1) 実践的・創造的技術者を育成するために、施設・設備の整備を行い、基盤的設備の整備のみならず、先端的な設備の充実を図る。
- (2) 平成20年度からの校舎改修により40年以上経過した施設の改修を行っているが、他の25年以上経過した施設の改修・整備を図る。

4. 外部評価の受審

有識者などによる外部評価を毎年実施する。さらに、日本技術者教育機構(JABEE)への受審を行い、工学教育に適合した高等教育機関であることを社会に示すと同時に、受審の準備を行うことにより、学校全体の教育研究体制の点検を行い、教育研究の質の維持向上を図る。また、次期における高等専門学校機関別認証評価受審に向けて準備を行う。

平成23年度アクションプラン

1. 教育充実の具体的方策

(1) 教育内容・方法などの充実

- ① 地域の産業界との幅広い連携の促進
 - ・ 本校の常勤教員と企業技術者が共同して本科の卒業研究や専攻科の特別研究の指導を担当する機会を設けるために、『福井高専地域連携アカデミア』会員企業との実効ある研究・技術マッチングを図る。
 - ・ 専攻科創造デザイン演習において、エンジニアリング・デザイン教育の充実を図る。

- 専攻科科目における「共同教育」の実施に向けての検討を進める。
- 本科4年生と専攻科1年生におけるインターンシップの推進と充実を図る。

② 一般教育の充実

- 技術者に必要とされる専門的知識の基礎となる思考力、洞察力、創造力、表現力などを習得させるために、基礎教育の更なる充実を図る。また、国際社会で通用する技術者を育成するために、各種検定試験などの受験の奨励や支援に努めつつ、コミュニケーション能力の向上を目指す教育の充実を図る。

③ 専門教育の充実

- 機械工学科

機械工作実習（2年生）、創造工学演習、C言語応用（3年生）、知能機械演習（4年生）、アイデア設計工学（5年生）などの実技系科目や創成科目を通して、実践的なものづくりセンスと創造力を学生に身に付けさせる。また、機械のエンジニアとしての基礎能力を養うために、「機械設計技術者3級試験」の資格取得を奨励し、受験対策のための補講を行う。

- 電気電子工学科

学生の基礎力・応用力の向上を目指して教育内容の充実を図るため、3年計画でカリキュラムの見直しを行ってきた。平成23年度は電気電子工学実験の見直しを行ってカリキュラムの見直しを完成させる。さらに、実験・実習環境の改善を図るため、積極的に設備更新、新規設備の導入を進める。学生の学習意欲を持続させる手段として、関連資格試験の受験を積極的に勧めるため、専任の教員を配置するとともに、資格の概要や受験資格などをまとめた資格試験パンフレットを作成し、配布する。ものづくり・創造性育成教育のさらなる充実のために3年次に新たにアイデアコンテストを導入する。

- 電子情報工学科

ICT化が進む現代社会において、新しいサービスやシステムを創造できる人材の育成を図る。昨年度立ち上げたカリキュラム検討ワーキンググループが出した結論を基に、ソフトウェア系・ネットワーク系科目の改訂及び社会情報系科目についての具体的な科目の導入に向けて更なる検討を行う。また、同ワーキンググループにて、各学年配当の実験・実習内容を見直す。

- 物質工学科

平成21-22年度における実験・実習報告書作成技術能力の育成と向上のための実施計画内容の一環として、今年度は、特に、実験結果・解析データに対する理論的評価と客観的考察を最重要視したレポート作成能力の向上を図る。さらに、平成22年度校長裁量経費による新規導入設備（パソコン・プロジェクター・スクリーン一式）を有効活用した学生実験演習・校外実習報告会・卒業研究発表会等における効果的なプレゼンテーションのための教育指導方針について検討

し、専門科目の授業内容・方法において創意工夫を図る。

- ・ 環境都市工学科

学生が自分の将来を見据えて学習できるように、土木・建築系技術者に関するキャリアパスや技術者資格を提示し、専門課程の学習に対して興味が湧くような工夫を図る。実験実習により座学の理解を深めるように工夫し、また、実験実習報告書作成の指導と座学での演習問題を通して、問題解決に至るエンジニアリングデザイン能力を身に付けさせる。

- ・ 専攻科

技術者として活躍するために必要不可欠な素養の涵養とキャリア教育の一環として、専攻科1年生に対してインターンシップ参加前に知的財産権教育セミナーを実施する。専攻科2年生に対しては、専攻科修了をひかえた時期に技術士の資格を有する技術者との交流を図り、技術者として社会へ貢献することの意義を再確認させる。また、各学協会主催の講演会や技術交流会等への積極的参加を促し、研究内容の質のみならず、プレゼン能力を向上させる機会を積極的に設ける。JABEE受審の結果を受けて改善を行った「環境生産システム工学」プログラムを具体的に実施し、その充実を図る。

④ 自学自習による教育効果を考慮した教育の充実

- ・ 平成17年の高等専門学校設置基準の改正により、60単位を上限として大学と同様に45時間の学修内容をもって1単位とすることができるようになった。この制度を活用して、授業形態・指導方法の多様性や優れた技術者を育成する上で有効な自学自習による教育効果を活かした特色ある教育課程の編成を進める。

⑤ 退職技術者を含む企業人材等の活用

- ・ 『企業技術者等活用プログラム－ICTと地域とを融合させる共同教育の展開－』に応募し、平成23年度継続採択を目指す。

⑥ 他高等専門学校・大学との人事交流

- ・ 高専・両技科大間教員交流制度の活用により、教育研究活動の活性化と連携を深めると共に、教育の質の向上に努める。
- ・ 前年度、高専・両技科大間教員交流制度で派遣された教員の報告会を開催し、同制度への理解と派遣の促進を図る。

⑦ キャリア教育の実施

- ・ 進路指導委員会の下に幹事会を設け組織を強化することにより、進路指導の拡充を図るとともに、学内における企業説明会の実施を含め、キャリア教育の推進を図る。
- ・ 低学年からのキャリア支援を充実させる。各学年での職業教育における目標を定めることに重点を置く。今年度は、大枠づくりに取り組む。

⑧ e-ラーニング教育、PBL教育、コーラス教育の実施

- ・ e-ラーニング室を活用して、新しい設備による語学教育などにおける進んだ e-ラーニングを開始する。また、福井県内の高等教育機関との連携による e-ラーニングシステムあるいは SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)を本格的に活用し、授業時間外の学習支援体制の構築を図る。
 - ・ 専攻科創造デザイン演習において、エンジニアリングデザイン教育の充実を図る。
- ⑨ 工学基礎コースの改善
- ・ 工学基礎コースは設置以来 6 年が経過し、実績も定着しつつあることから、アンケートや成績等の分析結果を基に、受験生のニーズに応えられるような改善案をさらに検討する。

(2) 教育研究の実施

- ① 全国規模の「产学研官連携推進会議」や「全国高専テクノフォーラム」に加えて、地元で開催の「丹南産業フェア」や「北陸技術交流テクノフェア」などに積極的に参加、出展して活動の成果を広く発信する。
- ② 外部資金の申請に際しては、外部資金獲得経験者によるアドバイスや講習会を開催して、外部資金の積極的な獲得に努める。

(3) 質の高い入学者の確保

- ① 本校の体験的広報活動(オープンキャンパス)は 20 数年の歴史を持ち、その時々の状況に応じ内容を変更させてきたが、さらに中学低学年にも働きかけられるようニーズを精査して、高専へ興味を向けさせるきっかけを作る段階から、徐々に進学意思を固めてもらえるような工夫をした幾つかの企画を段階的に配置する。
- ② 公共のイベントを利用して小学生や地域住民への認知度を向上させる取り組みを行う。
- ③ 中学校の求めに応じ学校単位での説明会を積極的に行う。さらに、女子学生を確保するために、女子中学生と保護者を対象にした体験学習会を開催するのに加えて、パンフレットや広報誌などを発行し、積極的に PR を行う。
- ④ 各種広報資料は、毎年広報対象者の反応を見ながらフィードバックをかけており、今後ともより利用価値の高いものにするように努める。
- ⑤ 専攻科パンフレットの利用状況を調査し、内容の検討を行う。
- ⑥ 本校のアドミッション・ポリシーに沿った入試であることを今年度も引き続き検証し、その結果に基づいて改善策等を検討する。
- ⑦ 本科生に対して、専攻科の説明会を実施する。

(4) 優れた教員の確保

- ① 実践的な専門教育を行っていくために、企業・機関などでの豊富な実務経験や技

術士の資格を有する教員も積極的に採用する。また、男女共同参画社会の実現、女子学生確保および女性教員の比率向上を図るため、働きやすい職場環境の整備などに努め、女性教員の更なる採用に向けて努力する。

- ② 高専・両技科大間教員交流制度の活用により、教育研究活動の活性化と連携を深めると共に、教育の質の向上に努める。
- ③ 前年度、高専・両技科大間教員交流制度で派遣された教員の報告会を開催し、同制度への理解と派遣の促進を図る。
- ④ 教員の公募時において女性を積極的に採用することを広く周知するとともに、女性教員が働きやすい職場環境の整備に努める。
- ⑤ 教員の能力向上を行うため、ファカルティディベロップメント(FD)の組織的な実施を図るとともに、福井県内の大学間連携事業での共同のFD活動に参加する。
- ⑥ 公開授業週間を年間行事予定の中に組み込み、充実を図る。
- ⑦ 各大学・研究機関からの共同研究募集案内等を周知するとともに、他機関との共同研究活動の促進を図る。

(5) 産業界や地域社会との連携

- ① 一般社団法人 発明協会 福井県支部との連携により、地域の企業・団体や公的機関等のニーズと本校の教員や技術職員の有する広範、かつ、有用なシーズとの融合を図る。この施策を支援するために「地域連携テクノセンター活動紹介誌 JOINT」に掲載のシーズ集を年ごとに更新する。
- ② 地域連携テクノセンターが主催または共催するコンテストを通して地域社会へ貢献するとともに、『ジョイントフォーラム』を開催して産業界との交流を継続する。

(6) 国際的な展開

- ① 高専機構主催の国際交流活動に積極的に参加する。また、中部日本海高専国際化推進委員会にも積極的に参加し、学生交流を図る。
- ② 国際交流協定を結んでいるオーストラリア・バララット大学との学生交流活動を推進する。
- ③ 学生に海外奨学金情報を広報して、海外留学を支援する。
- ④ 高専機構による海外学生インターンシップおよび国際学会等への積極的な参加を促す。
- ⑤ 今年度より、外国人留学生編入学試験に参加するとともに女子寮を充実させ、女子留学生の積極的受け入れを行う。また、震災被災地区の留学生に対して積極的に支援を行う。キングモンクト大学等との協定による短期留学生についても、条件が整えばできうる限り受け入れていく。

(7) 学生支援

- ① 学生に対してきめ細やかな対応をするため担任制度を継続するとともに、学生相談室を充実して、学生のメンタルヘルス管理を十分に行う。
- ② 女子留学生の受け入れ体制を整備する。寮生会活動の活発化のため支援を行い、寮生活の改善を寮生会と協力して計画的に進める。また、寮生の生活面での指導や精神面での相談を適宜行ない、寮生の生活を支援していく。
- ③ 前年度までの学生寮(女子寮棟を含む)の改修をうけ、学寮生活全体の満足度や施設充実度の調査を行い、優先順位を検討して整備を図る。さらに、図書館等の充実について計画的に整備を図っていく。
- ④ 独立行政法人日本学生支援機構などと緊密に連携し、各種奨学金制度などの学生支援に係る情報を提供する。
- ⑤ 進路指導委員会の下に幹事会を設け組織を強化することにより、進路指導の拡充を図るとともに、学内における企業説明会の実施を含め、キャリア教育の推進を図る。
- ⑥ 低学年からのキャリア支援を充実させる。各学年での職業教育における目標を定めることに重点を置く。今年度は、大枠づくりに取り組む。
- ⑦ 学生のボランティア活動などの社会奉仕体験活動への支援を行う。また、出前授業等へも同行させ、学外の人たちとのコミュニケーションを通して学生の人間的成长を図る。

(8) 多様な学生への支援

- ① 高専に途中から入学する編入学生、留学生や社会人が本校の学生生活に速やかに順応できるように、学生の特性にあわせて学習と生活の両面からサポートを行っていく。
- ② 今年度入学した専攻科外国人私費留学生に対してのサポート体制を整え、支援を実施する。

(9) 学校の高度化再編・整備

本校における今後の本科・専攻科の学科再編は、(1)機能創成、(2)情報、(3)エネルギー、及び、(4)環境(材料、生命)、(5)安全工学の5つのキーワードを基本として検討している。昨年度は、将来の県内中学生人口の動向の推計調査を行うとともに、県内外の企業を対象にして今後の技術動向や必要となる工学技術分野等についてのアンケートを実施した。企業を対象としたアンケートによると、主要な各工学の基礎分野の教育と実践的能力の強化を強く求めており、このことを踏まえ、社会技術動向を展望しながら、より効果的な教育内容と方法についての検討を行う。

2. 事務部門の強化と効率化

- ① 高専内に発生する様々な事象に伴う危機に迅速に対応するために管理体制を整備する。
- ② 高専機構、国立大学法人、（社）国立大学協会等で開催される研修会等に積極的に参加させ、職員の育成・向上を図る。
- ③ 事務部門職員については、近隣の大学との交流を引き続き積極的に行う。

3. 施設・設備の更新及び高度化

- ① 実践的・創造的技術者育成のための施設・設備の整備を行い、基盤的設備の整備のみならず、先端的な設備の充実を図る。また、教育環境アンケートを実施し、学生からの要望を教育環境の整備に活かす。
- ② 築30年以上を経過した施設の機能改修・整備を図る。

4. 外部評価の受審

平成24年度に予定している日本技術者教育認定機構によるJABEE中間審査、および大学評価・学位授与機構による高等専門学校機関別認証評価の受審に向けて、担当者を研修会に参加させるなど準備体制を強化する。

I-5 研究活動の状況

本校の教育理念である「創造性豊かな人材の育成」、「幅広い工学的素養、基礎能力及び応用能力の育成を目指す実践教育」、「高度に情報化した国際社会に対応する教育」、「環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育」、「地域と連携した産官学共同研究の推進を図る」を実現するために、全校的な研究体制、研究支援体制を作り、実施している。このような教育理念を実現するため、また、教育的資質を向上させるため、教員の研究活動は欠かせないと考えられる。さらに、この教育理念の一つである地域に根ざした教育として、地域における産官学共同研究は教育的にも、地域社会にとっても重要である。

このような観点から、本校では平成3年度、校内に自助努力で「先進技術教育研究センター」を設置し、地域との産官学共同研究の窓口として、このセンターに大型設備を集中させ共同研究にあたってきた。平成17年4月には、このセンターを「地域連携テクノセンター」と改組し、さらに地域と連携を深めた共同研究施設としている。現在、下記のような教育的研究事項に取り組んでいる。

- ① 地域の産業界からの技術相談と地域産業に密着した研究テーマの設定（伝統産業支援、地場産業支援を引き続き進める。）
- ② 地域の産官学共同研究関係者を集めて行う、講演会と情報交換会であるJOIN Tフォーラムの開催

- ③ 産業界・教育界の将来を担う若者の「ものづくり」への興味喚起と理科離れ対策として実施している「マグネットコンテスト」、「さばえめがねワク waku コンテスト」や「ふくい防災マップコンテスト」の主催、ならびに「越前市中学生ロボットコンテスト」、「歯磨きロボットコンテスト」の共催
- ④ 本校の有する専門的・総合的な教育機能を利用した出前授業の実施
- ⑤ 教員および技術職員のシーズを掲載したセンター活動広報誌（JOINT）を年1回発行
- ⑥ 地元商工会議所等との情報交換・懇談会の開催
- ⑦ 共同研究の機会拡大と研究テーマの発掘
- ⑧ 高度な分析・観察設備を用いた卒業研究、特別研究支援
- ⑨ 伝統産業支援室を設置して、和紙工業などへの技術支援
- ⑩ 地場産業室を設置して、眼鏡枠工業などへの技術支援

I-6 地域への支援

本校は基本理念に「環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育を行う」を掲げ、次のような地域・国民に対する幅広い活動を行っている。

- (1) 出前授業は毎年、30件程度行っており、その実施件数は教員・学生数からすると福井県内の高等教育機関としては多い。
さらに、平成17年度より、本校が出前授業に派遣する教員・学生を「サイエンスの達人」と名づけ、地域連携協定を結んだ市町の小学校・中学校を中心に派遣している。本校の出前授業の特徴は派遣する教員のほか、ほとんどの場合、学生を帯同することにある。特に、中学校への出前授業は、出前授業を実施する中学校の出身学生を出前授業に参加させ、後輩に成長した先輩の様子を見てもらうこととしている。学生も後輩に対面し、誇らしく実験を行うようである。
- (2) 福井県生涯学習大学開放講座協議会に参加し、地域住民対象開放講座である、福井ライフ・アカデミー「人づくり・まちづくり講座」に環境関係の講師を派遣して、事後のアンケートで好評を博している。今年度も本校プログラムを県民に提示している。
- (3) 福井県は強力磁石の世界的な生産拠点となっている。この本校近隣の越前市の新しい地場産業である、強力磁石を製造する企業とともに、児童・生徒、学生の理科離れを防ぐために、マグネットを用いたアイデアコンテストを平成7年度より実施し、全国の小中学生、高校生、大学生から寄せられた今年度のアイデア数は1,548件であった。これまでに提案されたアイデアの優秀作は実際に製作されたこともあり、製作品は（独）若狭湾少年自然の家の玄関前に設置され、同自然の家を訪れる小・中学生にアイデアを紹介し、科学に対する興味を喚起している。また、平成16年度より、福井県の代表な地場産業である眼鏡工業組合と共に、全国の児童・生徒・学生対象に眼鏡に関するアイデアコンテストを開始した。今年度は1,859件の応募があつ

た。これらは単に理科離れを防ぐのみならず、地元企業の全国への情報発信、本校の知名度向上などの効果を上げている。

- (4) 平成17年5月に提携した、地域連携協定に則り、地域の青年・壮年・高齢者・女性などの団体と連携し、地域の人々に対する学習ニーズに応えるため、公開講座、高度技術者研修などを実施し、リカレント教育を実施している。この地域では高齢化が進み、生涯学習、健康を目指す生涯スポーツなどのニーズが高まっている。本校はこのようなニーズに応えると同時に、本校の体育関係の施設の地域への開放を行っていきたい。

I-7 特別教育研究経費などの採択状況

- (1) 平成22年度企業技術者等活用プログラム「ICTと地域とを融合させる共同教育の展開」

近年、インターネットを基盤とする情報ネットワーク技術の重要性は著しく高まっており、ものづくり技術にICTは欠かすことのできないものとなっている。そこで、ICTやインターネットの新しい活用、携帯電話・モバイル端末向けのソフトウェアなどのニーズ発掘から企画・立案、開発およびそのビジネス化までの一連を教育し、情報関連技術を利用した実践的な技術を理解・習得させることが重要である。さらに、地場産業である眼鏡枠工業、ものづくりを主とした伝統産業や景観を考慮した都市を提案・施工する建設業では商品の企画、開発、設計に際して3次元CADが不可欠となっており、3次元CADやバーチャルリアリティについての理解や、ものづくり技術のIT化の必要性を認識させることが重要であると考えられる。

以上のような背景を受けて、平成22年度に標記の事業を高専機構に申請したところ採択され、今年度はその継続事業として①ICT技術者の育成 ②3D VR（バーチャルリアリティ）講座、に主眼を置き、主に下記の取組みを企業技術者との共同教育を展開して実施した。

① ICT技術者の育成

- ・ 携帯端末向けソフトウェア開発技術及びスマートフォンやタブレット端末向けOSとICT技術の理解を深めることを目的に「モバイル端末向けプログラムの開発」と題する講習会を開催し、携帯端末向けアプリの開発に興味と関心を持つ学生8人が受講した。受講学生は講習を通して、WebのHTML5技術を取り入れて、地元鯖江を素材にする地域密着のゲーム・アプリを作成した。HTML5技術やAndroid OSの解説及び作品制作には特命准教授2名が担当するとともに、電子情報工学科教員2名が適宜、技術的な助言や支援を行った。受講

学生が作成したゲーム・アプリは、地元での開催が予定されているプログラミングコンテストへ応募することやWeb上で公開することを目指している。受講学生には、Webの新技術の習得やスマートフォン等の最新OSを学習する機会が得られたと、好評であった。



ICT技術者育成のための講習会での様子

② 3D VR（バーチャルリアリティ）講座

- 昨年度に引き続いて今年度も企業技術者を特命准教授として任命し、共同教育を展開している。今年度は、前年度の受講生からの「演習時間を増やして欲しい」といった要望を踏まえ 15 回の開講とし、写真の加工処理や 3D モデリング、VR に関する講義・演習を行った。現在、環境都市工学科の 3 年生（2 名）、5 年生（3 名）、専攻科環境システム工学専攻 1 年（1 名）の計 6 名が受講している。それぞれ「福井高専校内の建物」、「愛知県新城市出沢地区の土石流災害」、「西山公園の景観」を題材として、個人あるいはグループで仮想空間に 3D モデルを構築した。



3D VR（バーチャルリアリティ）講座での様子

（2）平成23年度経済産業省原子力人材育成プログラム補助事業「原子力関連技術者教育のくさび形教育制度への導入と実践」

本校では、これまでに高等専門学校における教育制度の大きな特徴であるくさび形教育カリキュラムに原子力関連の教育を一部導入して、実践してきた。本補助事業では、それをさらに充実発展させ、低学年から高学年にわたる継続的な授業や実験・実習に加えて特別講演会・施設見学会の開催や卒業研究等による組合せを導入したプログラムによって、特に放射線に関する基礎的な知識と技術の習得並びに理解の更なる促進を図り、原子力施設の集中地域である福井県はもとより、国内の原子力産業界で求められている幅広いエンジニアリングスキルを身につけた、原子力関係の専門的で実践的な技術者の育成と、データを基に風評などに左右されず正しい評価ができる人材育成を目的とした。

具体的には、本校の本科1～5年生、専攻科1、2年生の授業、卒業研究等や原子力関連施設見学会を通して、

- ① 基礎的な原子力・放射線知識の習得
- ② 放射線関係電気・電子的知識の習得
- ③ 原子力施設の基礎知識の習得

を目指すとともに、原子力工学に関する基礎的で正確な知識を有した人材を社会に輩出すること、さらに、この内1年間当り10名程度が県内をはじめとする原子力関連施設に就職することを目標としたところ、今年度末の卒業・修了予定者のうち、15名が原子力関連企業への就職内定となった。

（3）平成23年度機関横断的な人材育成事業「機関連携による防災・安全教育を重視した実践的原子力基礎技術者育成の実施」

低炭素社会への転換に向けて、太陽光、風力、水力、地熱やバイオマスなどの自然エネルギーに加え、原子力エネルギーの安全・安心・安定的な活用促進が強く求められるようになってきた。このような中で、原子力発電所が全国的に集中する福井県に位置する本校としても、原子力産業界に必要な実践的で開発能力も持った国際的な原子力分野の専門技術者の育成は重要であると考えられる。

昨年度、国立高等専門学校機構を中心に、本校を含め全国22高専が安全工学と原子力工学の両教育に抱負な実績を持つ長岡技術科学大学と、原子力・放射線に関する知識の普及や教育に人的資源と多くの経験を持つ（財）放射線利用振興協会と連携して、原子力・放射線関連の講義や実験・実習を行うと同時に、インターンシップ、見学会による実際の体験を含む研修の実施を通して、幅広い工学知識を持ち、原子力関係分野で活躍することができる実践的な人材の育成を目的に事業を実施した。

そのような中、平成23年3月には東日本大震災によって未曾有の事故が原子力発電所に起こった。したがって、これまで行ってきた実践的原子力基礎技術者の育

成に加えて、防災・安全工学の知識を有して技術的なトラブル等に対応できる技術者の育成が急務であり、今年度は本校を含めた全国33高専において昨年度行ったフィージビリティスタディの成果に基づき長岡技術科学大学との連携、(財)放射線利用振興協会と(独)日本原子力研究開発機構との協力を得ながら原子力人材教育を進めている。本校は、富山高専での原子力・放射線関連の講義・実習への学生派遣、長岡技術科学大学における放射線機器講習と実験実習への教員派遣を行い、原子力安全教育の充実を図った。さらに、平成24年3月には長岡技術科学大学での原子力安全・防災に関するインターンシップと、(財)放射線利用振興協会(東海村)での原子力安全・防災関連授業にも学生を派遣するとともに、原子力人材育成事業フォーラムに関係教員が参加する予定である。

(4) 平成23年度高専機構特別教育研究経費(継続事業)「高専連携による、アントレプレナーシップ醸成・キャリア教育の進展」

本校では、平成17年度から校内にアントレプレナーサポートセンターを立ち上げ、起業家育成のキャリア教育を行ってきてている。一方、舞鶴高専、明石高専そして呉高専においても学生によるビジネス活動の支援などを通してキャリア教育を推進している。そこで、本校を含めた前述の4高専がこれまでに培ってきたアントレプレナーシップ教育の成果を交換し合い、新しい教育的展開を図ることを目的に、昨年度に引き続き今年度も標記の事業を実施した。

本校における具体的な内容は次のとおりである。すなわち、本校アントレプレナーサポートセンターに入居した学生の任意団体に活動環境を援助し、本校から同団体にPRサイト構築とコンテンツの作成の発注を通して在校生の視点から本校の情報をリアルタイムに近い形で地域社会に発信させながら、高専生の社会での適応力や、複雑化した社会を生き抜く人間力の育成を図っている。

(5) 福井工業高等専門学校と長岡技術科学大学との戦略的技術者育成アドバンストコース事業「社会の多様化とグローバル化に対応した戦略的技術者育成－高専と協働する技術者育成アドバンスドコース－」

昨年度から長岡技術科学大学は、高等専門学校と協働して多様化しグローバル化する社会の目指すべき将来を展望し、現代の社会・産業を技術によって変革していくために『戦略的な技術展開ができる人材』を育成する教育プログラムを確立することを目的に、本校他5高専をモデル校として設定し、連携した教育プログラムを推進している。昨年度本校では教務委員会の下に、新たに長岡技科大との戦略的技術者育成アドバンスドコース協働教育推進専門部会を設け、(1)戦略的技術者育成アドバンスドコースのカリキュラム及び実施体制に関すること (2)戦略的技術者育成アドバンスドコースの協働教育に関するこ、を協議した。

今年度は先導科目と位置付けされ、工学的課題に対する解決方法を理解して問題解決に向けたアクションをとる能力等を育成することを目的として夏季休業期間に開講された“集中セミナー・集中ラボ演習”に7名の学生が参加した。また最先端工学の現状について学び、今後技術者が果たすべき役割について考え、成長するための基礎力を養う等の目的で開講された“先端技術講座”に2名の学生が参加した。そして今年度後期は、本校5年生を対象にしている“数学特講”において長岡技術科学大学の担当教員が気候学的現象を数学的にわかりやすく、かつ興味深く説明し、自然現象への数学の適用例を学生に教授している。

来年度は、今年度の“数学特講”での内容をより精査してプラスアップし、協働科目としての“技術を支える数学入門”を解りやすく実効性のあるものにする予定であり、加えて“英語プレゼン基礎”も開講する。また、平成25年度からは三つ目の科目として“技術科学フロンティア概論”を開講すべく準備を進めている。

I-8 広報活動

一般社会人や中学生・保護者などに本校の現状を紹介するために、広報委員会を設置し、さまざまな広報活動を行っている。その広報活動の一環として、平成19年度から、8月に(財)福井県産業会館が企画するイベント「おもしろフェスタ in サンドーム福井」に参加している。また、同じく平成19年度より本校の紹介を地元のコミュニティFM放送である「たんなん夢レディオ」で、平成22年度からは地元のコミュニティ誌である季刊誌「夢レディオ編集室」で開始した。これらの詳細は次のとおりである。

(1) 「おもしろフェスタ in サンドーム福井2011」

「おもしろフェスタ in サンドーム福井2011」は、「すぐれた技術を未来へ」をテーマに福井県内の科学系学校や企業等が参加し、福井のものづくり技術を紹介するとともに、子どもたちの科学やものづくりに対する関心を深めてもらうことを目的として、8月27日(土)、28日(日)に開催された。

本校は5年前の計画時から中心的に参加し、当日は多面体工作、コンピューターによる様々な展示・実演、化学実験やおもちゃづくりなどを行った。夏休みの休日を様々な実演・体験・展示イベントで楽しむため、家族連れなど延べ17,000人近くの人出で大賑わいであり、テレビ・新聞でも大きく報道された。今後もこのようなイベントには積極的に参加し、本校の紹介を行うと共に、地域の活性化に貢献したい。



おもしろフェスタ in サンドーム福井 2011(平成 23 年 8 月 27,28 日)

(2) 「たんなん夢レディオ」による本校紹介番組

平成 19 年 4 月より、地元コミュニティ FM ラジオ「たんなん夢レディオ」で毎週日曜日に福井高専紹介番組「高専ラジオ」を放送している。4 月は入学式、5 月は体育祭、6 月はオープンキャンパスの紹介、など毎月の行事紹介をしながら本校の様子や特徴ある授業、名物先生などを紹介している。FM 放送で、高専が定期的な番組を持つことは全国的に初めてと思えるが、中学生などの反響が大きいことから、今後も入試情報などを伝えて行きたい。



放送中の様子

(3) 季刊フリーペーパー「夢レディオ編集室」による本校紹介

今年度も昨年度に引き続き、前述した「たんなん夢レディオ」が発行する季刊のフリーペーパー「夢レディオ編集室」に、一般社会人や中学生・保護者を対象として高専制度の概略、本科5学科の紹介や学費、卒業後の進路などを、発行時期を考慮しながら掲載し、情報を発信している。同フリーペーパーは丹南地区を中心に県内に1万部程度発行されており、今後もこれらを通して本校の存在感を地域社会に対してアピールしながら、認識度も向上させていきたい。



季刊誌「夢レディオ編集室」での
本校紹介の掲載例(2012年vol. 24)

(4) その他

本校の教育研究の成果を広く社会に開放し、地域住民の生涯教育の一助とともに、地域社会の文化の向上に資するために、一般社会人や小中学生を対象に毎年公開講座を開催している。今年度は防災マップの作成、ものづくりや科学実験等の16の講座を開講し、154名が受講した。受講生全体の97.4%の方から講座内容に満足したとの回答が得られた。本校では公開講座の開催に加えて、小中学生の理科教育支援として出前授業も積極的に行っている。出前授業の会場は主に小中学校が中心であるが、今年度は地域住民の方々との交流も兼ねて商店街や公共施設等でも実施した。なお、今年度の出前授業の実施件数は28件であった。このような公開講座や出前授業の実施に際しては、本校在校生の協力を得ており、特に中学校への出前授業は、出前授業を実施する中学校の出身学生を参加させ、後輩や中学校関係者に成長した学生の様子を見てもらった。学生も後輩に対面し、誇らしく実験を行っていた。



本校サイエンスクラブによる鯖江市古町商店街および
市民ホールつづじでの出前授業(平成 23 年 10 月 9 日)

また、平成 23 年 9 月には女子中学生とその保護者を対象にした体験学習会を開催し、本校各学科の紹介や現役女子学生との懇談会を実施することにより、女子中学生の本校や理科系に対する親近感を育てた。今回で 3 回目となるこのイベントには県内を中心に、兵庫県や滋賀県からも参加者があり、その数は中学生 67 名(1 年生 4 名、2 年生 5 名、3 年生 58 名)、保護者 28 名の 95 名であった。開催を重ねるたびに、特に中学 3 年生の参加者数は増加する傾向が認められ、女子中学生や保護者の立場からするとこのイベント開催を期待しているように思われる。実際、事後アンケートによると参加女子中学生のほとんどが体験学習の実施内容や懇談会に満足すると同時に、“本校への理解が図られた”と回答していることに加えて、保護者からも“高専入学してほしい”、“今日説明してくれた女子学生のようになってほしい”などの意見が多数寄せられた。体験学習後に行った本校女子学生主導での懇談会は盛況であり、理系への進路選択を考える格好の機会を提供できたと考えている。



体験学習の様子



懇談会の様子

女子中学生とその保護者のための体験学習会(平成 23 年 9 月 24 日)

また地域社会においては、高専は理科系のみの堅い学校であるというイメージがあるよ

うで、このようなイメージを払拭すること、地域社会に対する文化的な貢献に加えて本校学生の情操教育の一環として、世界的に活躍している県内出身のヴァイオリニスト 戸田弥生氏とピアニスト 宮城さや子氏によるクラシックコンサートを平成23年10月に鯖江市嚮陽会館にて開催した。当日は本校学生約190名、一般者約240名が、演奏者が奏でる情緒豊かな洗練された音色に酔いしれていた。コンサート終了後のアンケート調査では、9割以上の方から「満足」以上の評価をいただくとともに、一般者からは「高専は、情操教育にも力を入れている学校であることが分かった」との意見も寄せられた。



ポスター



演奏の様子

福井高専音楽のタベークラシックコンサート（平成23年10月19日）

I-9 将来計画

21世紀を迎え、すべての分野でグローバル化が進展している。長い経済の調整期が終焉し、格差社会の解消などが新しい問題となり、社会・産業界では新産業の創出及び高付加価値型企業への転換が迫られている。このため、教育界でもグローバルな視野と高度な情報技術と高い倫理性を持った、創造的、開発型の技術者の育成が求められるようになった。また、高等教育機関として、地域への支援も重要な要素となっている。

高等専門学校は来年度発足50年を迎える。高等教育機関として一般社会・産業界から一定して高い評価を得ている。一方、総務省の発表によれば、平成17年度の15歳未満人口は平成12年と比べると、107万人(5.8%)減となっている。また、わが国の財政事情などにより、高等専門学校の再編統合、あるいは一高専内の学科再編は避けられない状況となっている。

平成18年11月30日には高専機構理事長名により、「魅力ある高専の構築に向けて」と題して、学校自体の再編成、及び、学科減を含む各高専の検討状況を問う文書が機構より提出された。また、これらの再編統合に関する各校の相談の受け付けも示されている。

事態は極めて緊急的な課題となってきた。

本校でも平成18年9月の高専機構による「国立高専の整備について～新しい飛躍をめざして」が発表されてから、今後あるべき学校制度の議論を企画室、企画室ワーキンググループにおいて行ってきた。これらについて以下に詳述する。

（1）学校の再編成

本校としては、第3期中期計画への反映は考えないが、学校再編を長期的な課題として今後必要に応じて検討したい。

（2）学科の再編成

平成21年度4月に高専機構第2次中期計画が発表され、その中で、「教育課程の編成」として、産業界における人材需要や学生のニーズの変化等に対応した学科の大括り化やコース制の導入などについて検討を行うとなっている。この方針に則り、本校としては、今後、社会の要請を考慮して学科再編を長期的な課題として検討して行きたい。

平成18年9月から12月にかけて、企画室、企画室ワーキンググループなどにおいて、学科の再編成につき議論を行った結果、平成18年12月、平成19年1月の協議会（現在の学校運営会議）に次の報告を行った。

- ① 今後とも、さらに魅力的で個性ある高専を維持するため、学科再編は有効と考えられる。
- ② 中学生、社会にとって魅力的な内容であり、社会のニーズに適合した学科構成・編成を考える。
- ③ 3年次は工学発展課程と位置付けられ、専門に特化した必修科目（基幹科目）を中心に学習する。
- ④ 4年・5年次は創造工学課程と位置付けられる。3年次までの基礎に立脚し、融合・複合領域の先進的工学に関する問題点を指摘し、解答の無い問題に解決法を提示することが出来る技術者としての素養を身に付けることを目指す。さらに、深い学習を希望する学生は、先進工学研究課程と位置付けられる専攻科に進学する。
- ⑤ その他
 - ・ 低学年においては専門への橋渡しになる極め細かい工学基礎教育を行う。
 - ・ 3年次以降も学科横断的科目（発展科目、融合・複合領域科目）を設け、幅広く知識を習得させる。
 - ・ 融合複合教育の理念に基づいて、学科内容や学習内容を検討する。
 - ・ 適正な学生定員を考える。

II. 各学科・教室の教育理念

II-1 一般科目教室

1. 教育理念・教育目標

現在、教育方針として公表しているものおよび中期計画に関する目標は以下の通りである。

(1) 要覧その他の紹介

本校の教育は一般科目教育と専門科目教育とから成り立っているが、技術者が一市民としてよりよく生きるために、専門的な知識や技能だけでなく広く豊かな教養も必要であり、一般科目教室では、教養を身につけさせることを通じて、立派な技術者の育成を目指している。一般科目教育においては、高等学校の教育課程をふまえ、大学の教養課程に匹敵するレベルの教育内容となるようなカリキュラムが組まれている。国語・歴史・地理・倫理社会・物理・化学・生物・数学・保健体育・英語などの基礎的な科目や情操を育むための美術・音楽、さらに哲学・政治経済学・法学などの多彩な科目を開講している。また、国際化時代に即応するため、外国語教育に特に重点を置き、英語のほか、ドイツ語・中国語といった科目も開講しており、設備の整った語学教室で、外国人講師を含めたスタッフが指導している。なお、専門科目の応用数学・工学基礎物理も一般科目教室で担当している。

(2) 中期計画目標

人文・社会系科目（国語・社会・外国語）では、実践的な技術者に必要な言語感覚や総合的な表現力を身につけさせるとともに、社会的な知識の習得を始めとする自立した洞察力・判断力の養成を目指している。また、国際文化の理解を深めながら、外国語によるコミュニケーション能力を高め、各種検定試験の受験を視野に入れた教育をも目指す。

理数系科目（理科・数学）では、各教科の特性を踏まえ、自然現象の基本的法則や概念を理解させ、思考力・表現力・創造力の育成を図るとともに、問題解決能力の向上を目指し、専門教育への展開を考慮した自然科学系の基礎学力の習得を志向する。体育では、調和のとれた全人的発達を遂げた社会人として豊かで活力あふれる生活が営めるよう、身体・健康に関する知識の習得や身体運動実践能力の獲得を目指した教育をする。

2. 将来計画

一般科目教室としては、新入生の受け入れから専門学科への移行がスムーズに行われるよう、低学年教育における学習面や学校生活上の問題点などを明らかにしつつ、

学生とともに解決策を探っていくことを目指しており、現在に至るまで、各教科担当者、担任、クラブ活動顧問など様々な立場から、教員研究室・セミナー室等を利用して、学習や学校生活の支援及び相談を行ってきてている（これらの活動はオフィスアワーでの活動として報告）。こうした点を視野に入れて、3年前、「オフィスアワーを中心とした学生支援体制の構築（仮称）」として、

- ① 現状の把握（実態調査：支援時間・支援環境・内容）
- ② 現状の改善策の検討（学生の問題→関係教員[担任・教科担当・部活顧問等]への連絡体制などの組織作り＝学内組織での位置づけ）、支援環境整備などを将来計画として設定したが、現在の状況は以下の通りである。

（1）現状の把握

成績不振者に対しては各教科で必要な対策（小テスト・追試・補習・課題学習等）を実施し、学習意欲の高い学生へは学外コンテスト（英語スピーチコンテスト、数学選手権）への参加やコミュニケーション能力向上のための各種の語学検定試験受験を呼びかけている。

（2）現状改善策の検討

学生の問題点についての情報交換会「スタッフミーティング（仮称）」の開催を適宜実施する。その目的としては、学習到達度の低い学生の把握と教科指導の方向付けや、授業への取り組み状況（生活面も含む）の把握と改善策の検討により、学習意欲の低下・留年・進路変更等の問題に対処するとともに、担任や担当教員が指導上の問題を一人で抱え込むことを防止することにある。また、学生のコミュニケーション能力向上策の一環として語学検定試験の受験奨励と併せて海外留学等も積極的に勧める。

3. 重点課題

中期計画との関連で当面の課題としてあげているものは以下の諸点である。

- （1）新入生に対して数学・英語の一斉学力試験を実施し、その動向を把握するとともに、この結果を以後の教育指導や教育課程の改善に役立てる。また、英語のコミュニケーション能力を図る方策として、本科の4年・5年次においてTOEIC模擬試験を実施するとともに、TOEIC試験を校内で行う。
- （2）中学・高校よりの教育支援要請（SPP、SSH講師依頼等）や各教育機関、教育委員会からの教員研修事業での協力要請に応じる。

II-2 機械工学科

1. 教育理念・教育目標

機械工学は、「ものづくり」のための産業基盤として不可欠な学問分野であり、今後も豊かな社会を作り出すために中心的役割を担うと考えられる。本校機械工学科では、「ものづくり」のための基礎的知識や技術を習得させると同時に、機械技術の高度化、多様化にも十分対応できる広い視野と実践的で総合的な設計・開発能力を持った技術者の養成を教育理念とし、次の3つの教育目標を掲げている。

- ・ 機械技術者として必要な基礎学力の育成
- ・ 技術革新、高度情報化社会に対応できる能力の育成
- ・ 創造性・実践的能力の育成および人間力の育成

また、学科カリキュラムの特徴として、次の3つが挙げられる。

(1) 一つのものを作り上げる創成科目や、実験実習等の体験型科目が充実したカリキュラム

アイデアを出して一つのものを作り上げその性能をコンテスト形式により評価する創成型授業や、実際に手を動かして頭で考える実験実習などの体験型授業が充実している。その科目例として、1年生の「ものづくり科学」、2年生の「機械工作実習」、3年生の「C言語応用」「創造工学演習」、4年生の「知能機械演習」、5年生の「アイデア設計工学」がある。

(2) 機械工学の基礎学力を身に付けるカリキュラム

機械工学の根幹となる材料力学、熱力学、流れ学、振動工学などの科目においては、課題や演習を多く取り入れ、機械工作法、材料学、機械設計法、機構学などの科目においては、機械製図や機械工作実習などで学んだ例を用いるなどして、分かりやすい説明を心がけ、学生の理解を深めている。

(3) コンピュータや情報制御技術を用いて創造力・総合力を養うカリキュラム

先端ロボットに代表されるように、最近の機械は知能化・自動化の技術が目覚しく進歩しており、コンピュータやIT技術を多く取り入れた授業カリキュラムとなっている。

2. 将来計画

(1) 創成型授業の充実と、融合的ものづくり教育の実践

前述したように機械工学科では、3年生の「C言語応用」「創造工学演習」や4年生の「知能機械演習」に代表されるように体験・創成型授業を多く導入している。これらの授業は、機械工学科棟3階の創造工学実験室で実施しているが、平成23

年度にはデスクトップPCをノートPCにリプレースすることによりレイアウトを変更し、ロボット製作などの作業スペースを広くした。さらに「C言語応用」では、これまで利用していた LEGO Mindstorm に代わって、プログラミングを重視した Arduino マイコンを用いたサッカーロボットを導入し、制御プログラミングと回路設計・製作を融合した組み込み系技術者の育成のための新しい授業を他学科と共同で検討しており、平成24年度中に教育カリキュラムを開発し、平成25年度から授業で実施する計画である。また、将来的には、学科内の体験・創成型授業科目の内容を精査し充実させるとともに、創成型授業と機械設計製図や工作実習をリンクさせた融合的ものづくり教育の実践を検討したい。

（2）設備更新や先端設備の導入による実験実習や卒業・特別研究の充実

老朽化の激しかった実習工場の工作機械（旋盤、フライス盤、ボール盤、鋳造溶解炉）や、機械工学実験で使用する硬さ試験機や切削動力計などの実験装置が更新され、さらに今年度には、「水力学実験装置」の設備更新が実現した。平成23年度設備整備マスターplanでは、万能試験機や表面形状粗さ測定機など機械工学実験の基盤となる設備の更新を要求した。今後も、このような設備の更新要求を継続的に実施して実験実習を充実させていくとともに、ナノテクに代表されるように先端的な設備の導入を検討し卒業・特別研究の充実を図りたい。

（3）システムとしてデザインできる技術者の養成

機械工学には、材料力学・材料学・工作法などのメカの機能を生み出す機能材料や熱力学・流体力学など力学やエネルギーに基づいた機械物理を生かした技術すなわち「ハード面のメカ」と、ロボティクスで代表されるように近年のコンピュータ、センサ・計測工学、制御工学およびエレクトロニクスの発達によって、自動化・知能化など機械を高度に使う技術すなわち「ソフト面のメカ」が求められるようになってきている。また、環境問題や高齢化社会に対応した環境や人と調和したものづくり技術が強く要請されてきており、ハード面のメカ・ソフト面のメカに加えて「ヒューマン面のメカ」も視野に入れることが必要である。一方、機械工学に対するニーズも複合・融合化てきており、ものづくりにおいて一つの領域のみで解決できる問題は少なく、材料、環境（エネルギー）、電子工学など複数の領域にまたがった問題が多くなってきていている。したがって、複数の個々の技術を「デザイン」して一つのテクノロジーを作り上げ「機能創成」できる技術者、さらに将来的にものづくりに関わる企画・設計・生産・技術者倫理（知的財産・法令遵守・持続可能性等）をトータルで考え、「システム」として実践できる技術者の育成を目指すことを検討したい。

3. 重点課題

(1) 入学志願者の確保

平成23年度入試における機械工学科の志願者倍率は1.95倍と、前年度（1.28倍）と比べて上昇した。しかしながら、平成24年度はその反動もあり極めて厳しい状況が予想される。15歳人口は減少傾向にあり、入学志願者の確保は最重要課題と認識し、今年度は以下のことに重点を置いて活動した。

- ・ ものづくりとエコを意識したキャンパスツアーディの学科PR
- ・ 3D-CAD体験によるキャンパスリサーチでの学科PR
- ・ 興味を持ってもらえそうな科学実験による女子中学生のための体験学習の実施
- ・ 中学生を対象にした公開講座の実施（3講座）
- ・ 出前授業の実施（4回）
- ・ 学科パンフレットの更新
- ・ 学科ホームページの充実

(2) 基礎学力の養成

基礎学力の養成はいつの時代も重要課題のひとつである。本学科ではこのことを大きな問題点であると認識しており、学生に基礎学力を養成させることに授業の重点を置いている。また、機械工学の専門基礎学力の向上ならびにキャリアアップに繋がる資格取得を目指して、日本機械設計工業会機械設計技術者3級資格試験対策の補講を、機械工学科教員で分担して10月から11月にかけて土曜日（3h×10回）に実施した。今年度は、夏休み前の早い時期から学生を勧誘した結果、参加者は36名と昨年より多くなった。

4. 進学・就職指導状況

平成23年度卒業予定者35名のうち、就職希望者は22名（卒業予定者の63%）、進学希望者は13名（卒業予定者の37%）で、昨年度より就職希望者が多かった。就職希望者の内訳は、県内6名（就職希望者の27%）、県外16名（就職希望者の73%）で、全員内定を取得し進路が決定している。平成24年3月当学科卒業予定者に対する企業求人数は、平成23年12月の時点で450名（県内42名、県外408名）、求人倍率は20.5倍で、前年度の求人数422名、求人倍率18.3倍と比べて微増した。機械工学科の就職先の特徴は、機械関連分野はもちろん、電気電子・情報・化学・材料など極めて幅広い産業分野に及んでいることである。一方、進学希望者13名の内訳は、大学7名、福井高専専攻科5名、専門学校1名で、全員進学先を確保している。しかしながら、進学希望者において、推薦選抜（9名）では全員が第一志望進学先に合格することができたが、一般選抜（4名）では第一志望の進学先に不本意ながら不合格となる者が多く見受けられ、中に

は進学希望から就職希望に変更する学生（就職内定取得済み）もいた。基礎学力向上に加えて、キャリア教育や編入学試験対策も含めた進路指導の充実が今後必要である。

II-3 電気電子工学科

1. 教育理念・教育目標

電気・電子、情報・通信は、社会の基盤技術であり、今後も拡大、発展が予想される。電気電子工学科は、情報・通信から制御、エレクトロニクス、光・電子デバイス、材料、エネルギーまで幅広い知識を学び、独創力を身につけ、社会に対する責任を自覚し、「地球にやさしく、人にやさしい21世紀」をつくる技術者の育成を目指す。

(1) 電気電子技術者に必要な専門的かつ総合的な基礎力の育成

電気電子技術者のベースとなる電気回路、電磁気学、電子回路、コンピュータ技術の基礎を学んだ後、光・電子デバイス、エレクトロニクス、コンピュータ、コミュニケーション、新エネルギーといった電気電子、情報通信に関連する幅広い分野の専門科目を習得し、新たな夢の実現に向けた新しい技術を開発する際に必要とされる基礎力を育成する。

(2) 幅広い専門分野に適応できる応用力の育成

情報家電や光信用電子機器を作り出すエレクトロニクス技術、電気自動車やロボット、システムをコントロールする電子制御およびプログラミング技術、インターネットやモバイル通信を実現して情報技術革命を先導する情報通信・情報処理技術、環境に優しいクリーンエネルギー技術などを幅広く学ぶことで、新しい技術開発に適応でき、国際的に通用する電気電子技術者を育成する。

(3) 独創力およびコミュニケーション能力の育成

情報技術革命・ナノテクノロジー、新エネルギー技術に象徴される地球規模での科学技術の急速な発展に対応するため、論理的思考能力、表現力、グローバルな視野、さらに諸現象に対する洞察力や知的探求心を培うものづくり教育、実験・実習を中心とした自己獲得型技術教育を通して独創力の育成を図る。さらに、様々な社会体験教育を推進することでコミュニケーション能力を育成する。

(4) 下記に示すアドミッションポリシーを提示し、これに対応する電気電子技術者に必要な基礎力を育成する。

- ・ ロボット、システム、コンピュータなどを動かすための電子制御やプログラミング技術を学びたい人
- ・ 情報家電や光通信などに使用する電子回路や情報通信技術を学びたい人
- ・ 電気自動車や太陽光発電などに使われる環境にやさしいクリーンエネルギーや新素材技術を学びたい人

2. 将来計画

電気電子工学科は、社会の中長期的な要請に基づき、教育内容の充実を図っていく。

具体的には、

- ・ 授業内容の充実
- ・ 電気電子工学実験の充実
- ・ 卒業研究、特別研究の充実
- ・ ものづくり・創造性育成教育のさらなる充実
- ・ 工業英語力の向上
- ・ 国家資格の取得をサポートする体制の確立
- ・ 技術者倫理教育並びに知的財産教育の充実
- ・ 放射線教育の充実

3. 重点課題

(1) 入学志願者の確保

小中学校での出前授業・公開講座・地域連携事業参画・地域企業との共同研究などの活動を通じて地道に小中学生と保護者への電気電子工学科に対する認識を深め、入学志願者の確保へ繋げる。また、現在の電気電子工学科において女子学生が少ないことを考え、女子学生を増やす施策を進める。

(2) 専門科目の充実

- ① 基礎学力の向上と定着
- ② 社会的要求に対応した技術者倫理教育並びに創造性の育成を目指した知的財産教育の充実
- ③ 情報機器の発達に伴う情報教育の高度化

以上の目的を実現するため、平成23年12月にカリキュラムの改訂を行なった。平成24年度より、これらに関連する科目的授業内容を重点的に充実し、さらに学生実験、卒業研究・特別研究の充実を図る予定である。

(3) 地域連携、地域貢献の充実

電気電子工学科では、従前より地域との共同研究、地域イベントへの参画、出前授業、公開講座などを実施してきている。それらの実績を踏まえ、これまでの実施内容について精査し改善を図るとともに、電気電子工学分野における学科としての地域連携、地域貢献のあり方についても継続的に検討し、より効果的な施策を推進していく。

（4）放射線教育の充実

福井県には多数の原発が立地しており、電力会社等の原子力関連企業に就職する学生は多い。また、非破壊検査や食品への放射性物質の混入検査など多くの産業分野に、放射線機器の利用が広がっている。従って、放射線教育は今後も必須であると考えている。今年度、文部科学省の原子力人材育成プログラムに採択され、放射線教育を実施してきた。放射線教育の更なる充実を図るため、来年度も学科として応募する。X線作業主任者や第1種放射線取扱主任者に合格した学生はこの20年間で78名になる。

4. 進学・就職指導状況

平成23年度卒業予定者41名のうち、就職希望者は25名、進学希望者は16名となった。就職希望者は全員就職先が内定しており、県内6名、県外19名となった。当学科卒業予定者に対する求人企業数は460社にのぼった。電気電子工学科の就職先の特徴は高い求人数に加えて、電気・情報・化学・材料、機械、エネルギーなど幅広い産業分野に及んでいることである。進学希望者16名の進学先の内訳は、大学10名（金沢大学、岐阜大学、福井大学、和歌山大学、豊橋技術科学大学、長岡技術科学大学）、福井高専専攻科6名となった。

II-4 電子情報工学科

1. 教育理念・教育目標

「情報」とは人間の知的活動を支える根源でありあらゆる問題解決に必須のものである。

電子情報工学科では、インターネットやIT機器の基盤技術であるコンピュータ技術、情報通信技術、及びロボットに代表される制御技術の各分野で、コンピュータと「情報」を駆使して種々の問題を解決するエンジニアの養成を教育目標にしている。

電子情報工学科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

- ・ コンピュータの仕組みやプログラミングに興味がある人
- ・ ネットワークを活用したり、知能ロボットを動かすプログラムを作りたい人
- ・ 未来のIT機器の開発をやってみたい人

2. 将来計画

1年生のものづくり科学は、自走型ロボットを用いて、独創的なアイデアを喚起し、問題解決を体験する演習を実施している。この取組みは、ものづくりに必要不可欠なP D C Aサイクルの理解と意識付けを主眼にしており、その教育的効果を平成22年度の論文誌「高専教育」で発表した。

教育及び実験演習の環境整備に向けて、平成22年度と23年度において学科棟内の無線LANルータ機器を更新、増強した。また、平成23年度の校長裁量経費で、アナログ式の計測機器をデジタル式の計測機器に更新し、パソコンと連携可能な実験環境を実現した。

学科創設時より学科定員の20%～35%の女子中学生を受入れ、女子卒業生の多くが社会で活躍している。しかし、平成17年度以降、女子学生数の比率低下が続いたが、平成23年度には増加に転じた。今後も、ICT系学科を目指す女子中学生に対して魅力あるカリキュラムを用意し、女子中学生の志願者数の増加を目指す。加えて、ICT化が進む現代社会において、新しいサービスやシステムを創造できる人材の育成を進めていく。このような観点から、学科内のカリキュラム検討ワーキンググループが平成22年度に出した結論を踏まえ、ソフトウェア系・ネットワーク系科目の改訂及び情報系科目の充実に向けて更なる検討を続けていく。

平成23年4月に福井発ビジネスプランコンテストの受賞歴を持つ若手教員を採用できた。今後、この教員の経験をアントレプレナーの人材育成に生かしていきたい。また、平成24年度採用予定の教員に対して、女性を積極的に採用する方針を決めた。同性の立場で、率先して女子学生の教育・研究・学生指導が担える女性教員採用の道を拓く。

3. 重点課題

平成23年度は、4年生のPBL型授業である「創造工学演習」の学習成果の中から全国高専プログラミングコンテストの課題部門と競技部門にそれぞれ1チーム、計2チームが参加した。また、組込み型ソフトウェアデザイン能力を競うETロボコンに1チームが参加した。PBL型授業の成果を踏まえて、学生が意欲的に各種コンテストへ参加できており、今年度の全国高専プログラミングコンテストでは課題部門で敢闘賞を受賞した。

若手教員が主顧問である「IT研究会(同好会)」は、全国高専プログラミングコンテストに参加するなど、プログラミング及びメディアコンテンツ制作の鍛錬の場として活性化している。平成22年度には、2名のIT企業技術者を特命准教授に招いて「ICT技術者育成講習」を開催し、IT研究会の学生15名が受講した。講習受講学生が作成した3チームのWebコンテンツ作品を情報通信研究機構(NICT)が主催する「頑張る高専ICTビジネスコンテスト」に応募したところ、1チームが特別賞を受賞した。平成23年度も、昨年度に続けて「ICT技術者育成講習」を開催でき、IT研究会の学生8名が受講した。

毎週日曜日11時から1時間、地域FM局「丹南ゆめレイディオ」で放送中の福井高専のPR番組は開始から平成23年度で5年目に入っており、若手教員1名の活躍によって、本高専を広報と地域連携に貢献できている。さらに、地域貢献では、大型ロボットを使った出前授業、「越前市中学生ロボコン」の準備のための出前授業を実施した。また、プログラミングに興味をもつ小学生を対象に公開講座「はじめての簡単プログラミング」を、さらに「歯みがきロボコンのためのロボット作り」講座を開催した。

入試倍率の回復と女子中学生の受検者数の回復を目指す学科独自の行動プランが求められている。平成23年度のオープンキャンパスでは、4年生の女子学生2名の協力を得て中学生に興味をひかせる学科パンフレットを作ることができ、配布した。

4. 進学・就職指導状況

平成23年度の卒業予定者34名のうち就職希望者は17名、進学希望者は15名、その他が2名であった。進学希望者のうち本校専攻科に3名、国立大学に12名が内定している。電子情報工学科の平成23年度の求人数は、県内36人、県外352人であった。県内に就職内定した学生は8名で、県外に就職内定した学生は、大阪府3名、東京都4名、京都府1名、福岡県1名の計9名であった。

リーマン・ショック後の経済情勢は完全回復とは言えず、各企業の厳しい雇用状況の中、今年度は学校推薦でも内定を受けるのが困難な学生が見られた。

II-5 物質工学科

1. 教育理念・教育目標

教育理念は以下の3項目である。

- (1) 産業基盤である素材を化学の視点で学ぶ技術者を養成する。
- (2) 科学技術の発展（社会のニーズ）に適応したバイオ・材料技術に関する基礎能力（工学的素養）と、問題点を提起し解決できる能力（創造的デザイン力・総合力）を有する技術者を養成する。
- (3) 持続可能な永続型社会を築くために、材料および生物資源を有効にかつ環境と調和をはかりながら活用することができる技術者を育成する。

また、具体的な教育目標としては、以下の3項目である

① 物質工学に必要な基礎科学及び幅広い専門基礎能力の育成

応用数学・工学基礎物理・情報処理・基礎工学概論などの基礎科学を学び、さらに、物質工学の基礎となる無機化学・有機化学・分析化学・生物化学・物理化学・化学工学などを体系的に習得することで、物質の本質を理解し、応用化学及び生物化学的手法により新物質を開発する際に必要とされる幅広い基礎能力を育成します。

② 材料工学あるいは生物工学を得意とする専門能力の育成

材料工学コースでは、無機・有機材料の合成法や物性を習得することで、生物工学コースでは化学を基礎とした微生物学や遺伝子工学を習得することで、化学品・医薬品・食品等の得意とする専門分野で活躍できる技術者を育成します。

③ 実践的能力及びプレゼンテーション能力の育成

校外研修、工場見学旅行、夏季校外実習などの体験型学習により、実社会における実践力や問題解決能力、プレゼンテーション能力の必要性を認識させながら、学んだ知識を真に身につけさせるために5年間を通じた工学実験により実践力、理論的思考能力を育成し、卒業研究により問題解決能力、プレゼンテーション能力を育成します。

さらに、情報化社会に対応できるように、情報処理に関するカリキュラムを整備している。

2. 将来計画

上記のような教育理念・教育目標を中期計画の中で立て、実現すべく実行している。

本学科の特徴である、2つのコース(材料工学、生物工学)はこれからも堅持し、両分野での基礎となる教科の充実を図る。

化学技術者といえどもコンピュータに精通していることが求められており、各学年においてコンピュータ関連科目を配置し、情報教育を実施している。これまで、本学科では公害防止管理者や危険物取扱等の化学系の国家資格を取得するように推進してきたが、これに加えて、情報処理技術関連の国家資格の取得指導も行う。

3. 重点課題

公開講座（昨年度は3講座、今年度は2講座）や出前授業（昨年度は11件、今年度は10件）は今後も内容の充実を図りながら継続する。これらを通して、地域社会に対して貢献するとともに、中学生が本学科に対して入学希望を抱かせるために、本学科の良さを伝える。学科独自の広報委員を定め、学科パンフレットの刷新、ホームページの充実を継続して行う。

本学科の全教職員が、1年生の段階から直接に教育（「ものづくり科学」）を行い、その少人数教育の中で、物質工学の面白さを伝えるだけでなく、学生の人間形成に関与し、休学・退学する学生ができるだけ少なくする努力を行う。

進学（大学編入学および専攻科進学）する学生に対して、勉学の手助けを行う。

就職先の拡充を図るため、インターンシップ先や共同研究先を利用する。

4. 進学・就職指導状況

平成23年12月時点で、平成23年度卒業予定者39名のうち、就職内定者は20名、進学予定者は16名（本校専攻科：4名、大学編入学：12名）、その他3名（公務員・大学1年入学・専門学校をそれぞれ希望）であった。景気悪化にもかかわらず、卒業予定者にしめる就職希望者の割合が約51%と半数を超え、進学・その他が約49%となった。このことは、社会での卒業生の活躍や企業の本校学生に対する高い評価によるものと考えられ、就職希望者全員が就職先を決めることができた。進学は大学へは推薦で5名、学力で7名、専攻科へは推薦で3名、学力で1名となっており、推薦と学力はほぼ同数となった。

II-6 環境都市工学科

1. 教育理念・教育目標

独立行政法人国立高等専門学校機構は、全国土木工学系21学科の呼称である環境都市工学科を、次のように定義づけた。

『世界的な都市化に対応して、人に優しく自然と調和した街を創造するとともに、生活がより安全、快適、便利に営まれるような社会基盤の整備などの環境保全型の技術者の育成を目指している。そのため、豊かな教養を身につけ、確かな基礎学力に裏づけされた感性を持ち、国際化・高度情報化社会に対応できる技術者の養成を目指している。』

これを受け、本校の環境都市工学科は、次のことを教育理念として掲げている。

持続可能な地域や環境都市、人間像を追求し、そのことを社会資本として具現化する構想へと導いて、適格な地域、環境都市、多様な社会基盤施設の計画・設計・整備・維持・更新の在り方・方法論・手続きなどを学び、研究し、実践する研究実践型技術者の創発に寄与し、地域との連携に努める。

この前提となるアドミッションポリシー（入学者受入方針）は次の通りである。

- ① 自然と共生したくらしを営む環境づくりに興味がある人
- ② 快適なくらしを共有するための建物とまちづくりに興味がある人
- ③ 災害から人々のくらしを守るシステムづくりに興味がある人

また、本学科の教育の目的と使命は、社会資本を持続可能にする土木技術者と建築技術者を育成することであり、達成目標として次の3つを掲げている。

- ① 建設技術者に必要な基礎的な学力と能力の育成

社会資本を持続可能にする土木・建築の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考力を備えた実践的で創造性豊かな建設技術者を育成する。そのため、環境都市工学科では構造力学・水理学・地盤工学などの力学系基礎科目を体系的に教育することに加え、建築計画・環境衛生工学・施工管理学などの基礎科目を重視して、理論に関する学習と演習をとおして理解を深め、応用力を養うことに努めている。さらに、情報化社会に積極的に対応するための情報処理能力の習得にも力を入れている。

- ② 幅広い専門分野の理論に関する応用力の育成

専門基礎科目を応用し、さらに一步深く踏み込んで、土木・建築の分野に必要な幅広い専門分野についても学習し、社会資本の新設・更新・維持管理・災害復旧に関するいかなる分野に進んでも、十分に活躍できる技術者の養成を目指している。さらに選択科目（専門科目）を幅広く開講し、学生が将来の進路に応じて選択・習得でき、学習意欲が高まるように配慮している。

- ③ 実験実習や卒業研究を通した実践力と創造力の育成

各専門科目の学習速度にあわせ実験実習と設計製図を実施して、身をもって

体験しながら理論を理解させ、あわせて実践能力・洞察力の育成にも努めている。さらに、第5学年の卒業研究では学生自身にテーマを選択させ、自発的な調査・研究を促し援助することにより、研究に対する工学的なアプローチ手法を習得させると共に、成果発表の機会を設けることにより、構成・編集・発表（プレゼンテーション）などの能力の養成に努めている。

2. 将来計画

平成21年度入学生から改正建築士法に対応したカリキュラムとした。それによって平成21年度入学生から、指定された選択科目の単位を修得して卒業すると、卒業後4年の実務で一級建築士試験の受験資格が与えられることになる。

本学科は、昭和45年に土木工学科として福井高専に開設された。平成5年に環境問題にも対応できる学科を目指して環境都市工学科に改組した。開設以来、福井県内をはじめとした日本全国の建設系の企業や、国土交通省・福井県・福井市・越前市・鯖江市などの官公庁に多くの卒業生を輩出している。従来は土木系技術者の育成に重点をおいてきた。しかし、近年、入学生的要望や建設業界の動向を踏まえて建築系科目も充実した科目構成とした。なお、現在の4、5年生（平成19年度、20年度入学生）は改正前の建築士法に対応している。

卒業後の一級建築士試験受験資格取得を目指したカリキュラム改正の成果が問われるのは、平成21年度入学生が卒業し一級建築士試験を受験する平成30年である。改正前の一級建築士試験受験資格のある現5年生を対象とすれば平成28年である。しかし、対象学生が卒業するのは2年後、4年後である。したがって今後1～2年で次のことをする必要がある。

（1）キャリア教育の充実

本学科は前述のようにこれまで土木系技術者を世の中に輩出してきた。しかしながら、現5年生からは建築系技術者として社会に出て行く卒業生が出てくる。また、平成21年度入学生からは5学年の選択科目の履修内容によって卒業後の建築士試験受験資格が異なってくる。したがって、在学中に卒業後のキャリアパスを示す必要がある。さらにはキャリアパスを提示することによって、学生の学習意欲の向上を図らなければならない。

（2）キャリアパスに見合った教育内容の精査

卒業後のキャリアパスを示すと同時に、そのキャリアパスに見合った教育内容を提示し、実践していかなければならない。本学科の土木系技術者教育にはこれまでに培ってきた教育内容や教授方法があるが、建築系技術者教育にはそれがない。建築系カリキュラムをすでに実践している大学、高専との連携を密にしていく必要が

ある。土木系技術者教育、建築系技術者教育あるいは場合によっては土木建築複合型技術者教育のどれをとってもその分野のエンジニアリングデザイン能力の育成に関する教育が重要となる。

（3）卒業生のキャリアを把握するシステムの構築

環境都市工学科卒業後に卒業生がどのような進路をたどりどのような職に就いているかを知り、卒業生が求めているものを、学科の教育内容および教授方法に反映させることが、キャリアパスに見合った教育の一番の近道である。社会のニーズをカリキュラムに反映させるには、現に産業界等で豊富な経験を有している卒業生から得た情報を検討していくことが第一である。本学科には同窓会組織として「翔土会」がある。翔土会との連携を深めて、卒業生の意見の集約に努めていく。

3. 重点課題

（1）環境都市工学科からの情報発信

環境都市工学科で行っていることを広く社会に発信していく。具体的には、①H Pの充実、②出前授業の充実、③オープンキャンパスの充実などがあげられる。社会への情報発信をすることによって環境都市工学科への入学志願者の増加も見込まれる。また、学科に在籍する学生への情報発信も重要である。具体的には、①キャリアパス、②科目の流れおよび科目内容、③取得資格の案内などである。学生への情報発信を充実させることにより、学生の学習への目的意識が高まり、学習意欲の向上に結びつけられる。基礎学力、専門学力の必要性を説明し、それら学力の向上を目指す。

（2）同窓会組織「翔土会」との連携強化

卒業後3年から10年の卒業生の意見を聞くことが重要である。本学科で学習した知識と能力が卒業生の進むキャリアにとっての outcomes となっているかを把握しながら、授業内容を変更していかなければならない。そのためにも卒業生との定期的かつ密な連携をさらに強化する必要がある。この基礎資料として、及び卒業生に対するサービスとして、正確な卒業生名簿を整備するとともに、名簿発行と会員への配布を検討する。

4. 進学・就職指導状況

進路指導は、この学年から4年の実務で一級建築士の受験資格を得るという新カリキュラムの履修が始まり、3年次より個人面談や進路に関するアンケートを実施して、土木と建築への志向の明確化を含め進路に対する意識を早い段階から持たせるようにした。また、4年次（10月）の三者面談において進路の方向性を決定させ、進学・就

職に対する準備を始めるように指導した。さらに、進路指導委員会が主催した進路指導セミナー、SPI 模擬試験などを通じて就業への意識啓発をはかり、学科として、先輩講座、インターンシップ（報告会を含む）などを実施し、進学ではチャレンジを促し、就職では公務員、ゼネコン、コンサルタントなどの職種について説明を行った。

このような進路指導の結果、今年度卒業予定の環境都市工学科 15期生 31名の進路の内訳は、進学が 13名（本校専攻科 6名（うち 2名が建築系）、豊橋技術科学大学（特別推薦：建築系）1名、岐阜大学 1名、北海道大学 1名、三重大学 1名（建築系）、和歌山大学 1名、京都建築専門学校 1名等）であった。就職が 18名で、就職先は、公務員では国土交通省近畿地方整備局、東京都、福井県、福井市、鯖江市、敦賀市に各 1名の 6名、民間企業では関西電力、東海旅客鉄道、中部電力、東芝エレベータ、NIPPO、前田道路などの県外企業へ 6名、坂川建設 2名（建築・土木）、西村組、ホクコン・プロダクツ、井波木材（建築）などの県内企業へ 6名であった。今年度の進路の特徴として、進学では建築系が加わり、就職では公務員に大量 6名、建築系、東芝エレベータなどに就職開拓ができたことがあげられる。

III. 専攻科

1. 教育理念・教育目標

(1) 概要

専攻科は、高等専門学校5年間の上に、より高度な専門的知識と技術を教授し、創造的な研究開発や先端技術に対応でき、かつ国際的にも通用する人材を育成するために設けられた2年制の教育課程である。修了生は大学評価・学位授与機構に申請し、審査の後に学士の学位を授与される。本校の専攻科は、生産システム工学専攻（1学年定員：12人）および環境システム工学専攻（1学年定員：8人）の2専攻で構成されている。また、本科4、5年次の全学科と専攻科2専攻のすべての教育課程で構成した「環境生産システム工学」教育プログラムを実施しており、このプログラムは日本技術者教育認定機構（略称：JABEE）から社会の要求を満たしている工学（融合・複合、新領域）関連分野の技術者教育プログラムであるとして、平成16年度より認定されている。

2010年5月13日付のJABEE受審結果（2009年度受審：継続審査）において、学習・教育目標が分かりにくいという指摘を受けて、校内で検討を重ねた結果、2011年度より、本自己点検・報告書4ページに示した専攻科学習・教育目標のように5つの大項目とそれらを細分化した20の小項目に改定した。

(2) 2011年度専攻科入学生からの目指すエンジニア像と学習・教育目標

専攻科「環境生産システム工学」プログラムが目指すエンジニア像についても、2011年度入学生からは、学習・教育目標の改定に合わせて、より具体的な表現として『得意とする専門分野を持つことに加え、他の技術分野の知識と能力を積極的に吸収し、自然環境との調和を図りながら持続可能な社会を有機的にデザインすることのできる知識と能力を身に付けた、国際社会で活躍できる実践的技術者』としている。

改定した学習・教育目標からわかるように、まず記号にJを付けることによって、JABEE認定プログラムの学習・教育目標であることが分かるようにした。また、5つの大項目はそれだけで記憶できるように分かりやすい表現として、さらに学生が到達する目標となるように、語尾を「身に付ける。」とした。内容的には、これまでの学習・教育目標の内容と変更はしていないが、専攻科設立時から目指している得意とする技術分野の深化に加えて、現在の多様化・国際化した社会状況に対応できる技術者となることを念頭に、異なる技術分野の知識と能力を積極的に吸収することを具体的に表現し、学生の到達すべき目標として掲げた。

本プログラムの特徴である「ものづくり・環境づくり」能力とは、ものをつくり出すことあるいはつくり出す過程が自然や社会などの地球環境に与える影響を常に考えられる能力（環境を意識したものづくり）だけにとどまらず、「人間が住みよい

環境とは何か」、「人間だけが住みよくてよいのか」をも考慮できる能力（環境づくりができる）の育成を目指している。

（3）カリキュラムの特色

本科5学科各々の専門知識の基礎を習得した後、専攻科では得意とする専門知識を深化させる専門展開科目と、今日の多様化した社会に対応できるように、幅広く他の技術分野の知識と能力を身に付けるための専門共通科目を開講している。この専門共通科目の内7科目（技術者倫理、創造デザイン演習、先端材料工学、デザイン工学、環境工学、地球環境、経営工学）を必修とし、融合・複合分野の教育プログラムであることを特徴づけている。また、夏季休業期間を利用しコーオプ教育の一環としての約一ヶ月間のインターンシップや、北陸技術交流テクノフェアにおいて特別研究の内容を学外の技術者や研究者に説明させるなど、学内にとどまらない技術者教育に力を傾注している。

2. 将来計画

（1）エンジニアリング・デザイン教育の向上と共同教育の実施

21世紀となり10年以上が経過し、多様化した社会から技術者に寄せられるニーズも変化してきている。このことを踏まえて、エンジニアリング・デザイン能力を向上させる技術者教育の必要性が叫ばれており、JABEE認定の重要な審査項目にもなっている。エンジニアリング・デザイン能力とは、必ずしも正解のない問題、トレードオフな問題に対して、実現可能な具体策を見つける能力であるとされている。本校専攻科では、「創造デザイン演習」や「デザイン工学」を通して、この能力の向上を図っている。さらに充実させるために、企業との連携による共同教育を行うことを検討し、専攻科生が社会の要望に応えられる知識と能力を身に付けて修了できるようにしなければならない。

（2）専攻科の拡充と本科との連携

昨年度の専攻科卒業生は30名、現在の専攻科学生数は1年、2年ともに27名、来年度の専攻科への入学予定者数は25名であり、専攻科生の数は減少傾向にある。これは社会の情勢から本科学生の進学希望者数の減少によるものであると考えられる。言い換れば本校本科生が社会に必要とされていることの証左でもあるが、高専5年一貫教育から専攻科を加えた7年一貫の技術者教育を実施していること、そしてその中の本科4、5年と専攻科の教育課程でJABEE認定された技術者教育プログラムを実施していること、高専機構の専攻科充実方針があることなどから、専攻科志願者の増加を図らなければならない。

専攻科の授業料は本科生と同額であり大学編入学に比べて経済的に学習できる。

学位授与機構への申請と小論文試験合格が必要であるが学士の学位も取得できる。また、本科5年の卒業研究と専攻科1、2年の特別研究の計3年間の研究従事期間は大学院卒に匹敵する。実践的な技術者にも研究開発型の技術者にもさらには大学院進学から研究者への道も開かれる。このような専攻科のアピールポイントを積極的に本科生に説明し、志願者増を目指す。

また、専攻科を充実させるには、専攻科に入学してくる本科卒業生のレベルアップが大前提となることから、現在本科生にも開放している数学総合試験や TOEIC-IP 試験に加えて、さらに本科との連携を強化していくことを検討する。

3. 重点課題

(1) 学習・教育目標の修正および周知

前述したように、今年度から学習・教育目標の表現に修正を行った。教職員および学生へ、この修正した学習・教育目標の周知を徹底し、専攻科修了生の質の保証をより確実となるようにする。

(2) 国際活動・英語能力の向上

今年度は、高専機構主催の平成24年度第4回海外インターンシッププログラムに専攻科2年生が応募し、機構による審査の結果、派遣学生に選ばれた。平成23年9月4日から25日まで、マレーシアにある(株)カネカ(マレーシア)に派遣された。帰国後、その成果を専攻科1年生の前で報告した。また、別の専攻科2年生はタイで開催された ISTS2011(International Symposium on Technology for Sustainability 2011)で英語による口頭発表を行った。ISTSは、高専機構とタイのKMITL(King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang)の主催で、国際的な雰囲気の場で高専学生(主として専攻科生)に英語による自らの研究成果を発表する機会を提供し、彼らの英語コミュニケーション能力の向上と国際感覚の涵養を目的とするシンポジウムである。平成24年3月に行われる高専機構海外インターンシップに専攻科1年生が応募したが残念ながら選外となった。しかしながら、このような国際的な事業に積極的に応募する姿勢が見られており、この雰囲気を継続し、さらに大きくするような啓発活動を行う。

海外インターンシップのような高専機構が行う国際活動には TOEIC スコアなどの英語に関する資格が重要となる。今年度から、TOEIC スコア 400 点以上の取得を修了要件から削除した。このことは外部資格を修了要件にしないという高専機構からの通達によるものであるが、専攻科生には 400 点に満足せずにさらに上を目指して国際化に対応することを意味している。

専攻科の英語の授業である現代英語では、TOEIC スコア向上の内容に加えて、来年度の ISTS 参加希望者を多くするためにも、今年度から英語による特別研究内容の発

表を前提とした外国人非常勤講師による指導を取り入れている。また、英語に対するモチベーションを高めるための方策として TOEIC-IP 試験を本校で年 5 回実施し、高得点者を修了時に表彰することや、専攻科生の海外での学術活動およびボランティア活動を支援するため、海外活動支援制度を設けて経済的支援などを行っている。

（3）エンジニアリング・デザイン教育の充実

将来計画のところで述べたように、今後エンジニアリング・デザイン教育の重要性が増してくる。専攻科ではこれをデザイン工学と創造デザイン演習の授業で統括的に実施している。今年度は創造デザイン演習の授業で北陸先端技術テクノフェアでの企業ブース訪問を取り入れた。来年度は地元企業の技術者を講師に迎えた共同教育実現を検討していく。

IV. 教務関係

1. 基本方針

教務活動は、本校の教育理念や方針に沿った教育を行うための業務運営が主たる活動である。このため、学習・教育目標を達成し、社会のニーズに即した優秀な人材を育成するための、最も効果的なカリキュラム編成、授業方法、評価方法の研究と実施が重要な職務と考えられる。また、これらの目標を達成するために入学生の質の向上と適正な志願倍率の確保に向けた取り組みも重要な業務に挙げられる。ここでは現在の本校の教務活動に関し、教務関連の課題と今年度の対応を概説し、昨年度より開始した原子力人材育成教育、長岡技術科学大学との戦略的技術者育成協働教育を含め、特に問題となっている入学者確保に関する対策を詳細に述べる。

2. 教務関連の課題と今年度の対応

本校の教育理念である、「創造性豊かな人材の育成、幅広い工学的素養、基礎能力及び応用能力の育成を目指す実践教育、高度に情報化した国際社会に対応する教育、環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育」を行うため、要請すべき人材像を示し、それに沿う形で本科(準学士課程)と専攻科課程に学習・教育目標を設定し、カリキュラムを編成している。来年度受審予定の大学評価・学位授与機構による機関別認証評価においても「教育理念があり、それに沿ったカリキュラムが編成されているか」が最重要事項とされており、今後とも、このことに留意したカリキュラム編成研究が肝要である。

平成18年度に高等専門学校設置基準が改訂され、高等専門学校にこれまでの履修単位ばかりでなく、学修単位が60単位まで導入することが認められた。本校では各学科の高学年に講義演習タイプの約20単位の学修単位を導入したが、実質的な講義の時間数は変化していない。一方、4、5年に専攻科と同様な単位換算の講義タイプの学修単位を導入する高専が出始めている。本校では、他高専の導入状況と問題点を検討しながら、慎重に導入時期を決定したい。

本校では平成17年度より、中学生・保護者の要望と低学年の創造教育進展のために、低学年のクラス編成と入試制度、カリキュラムを改訂した。具体的には、学力入試で各科8名の工学基礎コースを設け、2年進級時に本人の志望と成績により転科が可能になる制度である。これは高専への入学の意思はあるものの、希望学科が絞り込めないという生徒・保護者や中学校教諭からの意見に基づいて、全国高専で初めて本校が導入した制度であり、現在学力受検者の約7割が希望している。実際の転科の状況は、平成17年度には14名、18年度には5名、19年度には11名、20年度には6名、21年度には5名、22年度には4名が転科し、転科者の人数は減少傾向を示している。また、この制度を設けるに当たり、1年の1クラスを工学基礎コース、他のクラスを混合学級とした。さらに、ものづくり科学という創成型の授業を開始す

るなどのカリキュラムの改訂を行った。この制度による入学者が一昨年度初めて卒業し、工学基礎コースに関する学生アンケート等を実施し制度の総括を行った。京都の堀川高校など創成型授業が普通高校でも注目を集めている。本校では工学基礎コースの精神を生かしながら、早期キャリア教育など時代の要請に対応した高専教育を実現するために、制度の改正を行いたい。

4年前より導入した1コマ100分の授業の問題点を改善するため、できるだけ3.5コマ（50分授業では7限）で終了できるように時間割を改正している。現状では4コマ（8限）終了の日が週1回火曜日に特定の学年で生じるが、将来は全ての曜日が3.5コマ（7限）で午後4時頃に終了できるようにカリキュラムの改訂を継続して検討したい。

校舎改修工事の関係もあり平成20年度より8、9月を夏休みとする学事日程を採用した。そのため9月中の学生指導の一環として、9月末に学力強化週間を設け、成績不振の学生を対象に基礎学力の強化を図る行事を一昨年度より開始した。今年度も昨年度に引き続いて低学年での実施例が多く、夏休み課題の確認・指導、授業の復習・補講、仮進級解除、再試験、一斉試験、校外研修、資格試験の指導など多岐にわたる内容で実施することができた。学力強化週間は、夏休み終盤の9月末に主として成績不振の学生を指導することで、該当学生が後期のスタートをしやすくなるなどの効果も期待できる。基礎学力向上は本校で最も取り組むべき課題の一つであり、今後も今年度の実施結果を参考に内容の改善を検討していきたい。

発達障害・学習障害の学生に対する支援については、本校でも人數的には少ないが対象となる学生が出てきており、該当学生の教務に関する支援を行うため、平成21年度特別支援ワーキンググループ（WG）を設置し（構成メンバー：教務主事（WG長）、学生相談室長（副WG長、議長）、看護師、カウンセラー）、支援が必要な学生毎に支援チームを設けて対応を開始し、今年度よりこれを特別支援室に格上げする形で支援活動を強化している。

本校の本科（準学士課程）と専攻科課程には前述の学習・教育目標（p.3～5参照）が明確に設定されており、各学習・教育目標の達成度の評価を学生自らができるように達成度評価シート等を整備し、キャリア養育の一環として、自身の現状把握と将来像を考えるための重要な施策としている。

3. 原子力人材育成教育、長岡技術科学大学との戦略的技術者育成協働教育

今年度、本校は経済産業省原子力人材育成補助プログラムに採択された。本校では、これまでに高等専門学校における教育制度の大きな特徴であるくさび形教育カリキュラムに原子力関連の教育を一部導入して、実践してきた。本補助事業では、それをさらに充実発展させ、低学年から高学年にわたる継続的な授業や実験・実習に加えて特別講演会・施設見学会の開催や卒業研究等による組合せを導入したプログラムによっ

て、特に放射線に関する基礎的な知識と技術の習得並びに理解の更なる促進を図り、原子力施設の集中地域である福井県はもとより、国内の原子力産業界で求められている幅広いエンジニアリングスキルを身につけた、原子力関係の専門的で実践的な技術者の育成と、データを基に風評などに左右されず正しい評価ができる人材育成を目的としている。

平成22年度より6年間の事業として、長岡技術科学大学が高専機構と協働し、戦略的技術者育成アドバンスドコース事業を開始することになり、6高専がこの事業に参加することになった。本校は同事業を推進するための協力校に選出され、同事業を本校の学生に対し推進することになった。今年度は、先導科目と位置付けされ、工学的課題に対する解決方法を理解して問題解決に向けたアクションをとる能力等を育成することを目的として夏季休業期間に開講された“集中セミナー・集中ラボ演習”に7名の学生が参加した。また最先端工学の現状について学び、今後技術者が果たすべき役割について考え、成長するための基礎力を養う等の目的で開講された“先端技術講座”に2名の学生が参加した。そして今年度後期は、本校5年生を対象にしている“数学特講”において長岡技術科学大学の担当教員が気候学的現象を数学的にわかりやすく、かつ興味深く説明し、自然現象への数学の適用例を学生に教授している。

4. 入学者確保とその状況

本校の教育理念に沿った教育を進め、また、本校の教育レベルの維持・向上を図るためにには、入学生の質の向上と適正な志願倍率の確保は重要な課題である。過去3年間の入試倍率の推移を以下の表に示すが、過去6年間で見ると18年度の1.7倍から1.5倍へと少しづつ低下する傾向にあったが、これまでの結果を検証し、①入試に関する1年生へのアンケート調査、②推薦基準の改正、③入試会場の増設、④全中学生配布用入試リーフレットの作成、⑤入試関連行事の見直しと改善、⑥入試会場の増設、⑦推薦募集枠の1名増加などを行った結果、平成22年度は1.6倍に回復した。さらに、平成23年度にはキャンパスツアーの新企画を5月と早い段階に導入するなど広報活動の強化を図ったところ、1.7倍に向上した。

<過去3年間の入試倍率の推移> () 内は女子で内数。

年 度	学 科 [募集人員]	機 械 [40]	電気電子 [40]	電子情報 [40]	物 質 [40]	環境都市 [40]	計 [200]
H23	志願者数	78(2)	76(8)	64(10)	54(26)	76(25)	348(71)
	合格者数	40(1)	40(5)	40(8)	41(20)	40(12)	201(46)
	倍 率	2.0	1.9	1.6	1.4	1.9	1.7

年 度	学 科 [募集人員]	機 械 [4 0]	電気電子 [4 0]	電子情報 [4 0]	物 質 [4 0]	環境都市 [4 0]	計 [2 0 0]
H22	志願者数	51(1)	55(3)	80(10)	82(20)	55(10)	323(44)
	合格者数	41(1)	40(3)	40(5)	40(12)	40(9)	201(30)
	倍 率	1. 3	1. 4	2. 0	2. 1	1. 4	1. 6
H21	志願者数	60(1)	75(3)	47(8)	57(17)	57(13)	306(42)
	合格者数	40(0)	40(3)	40(4)	40(14)	40(10)	200(31)
	倍 率	1. 5	1. 9	1. 2	1. 4	1. 4	1. 5

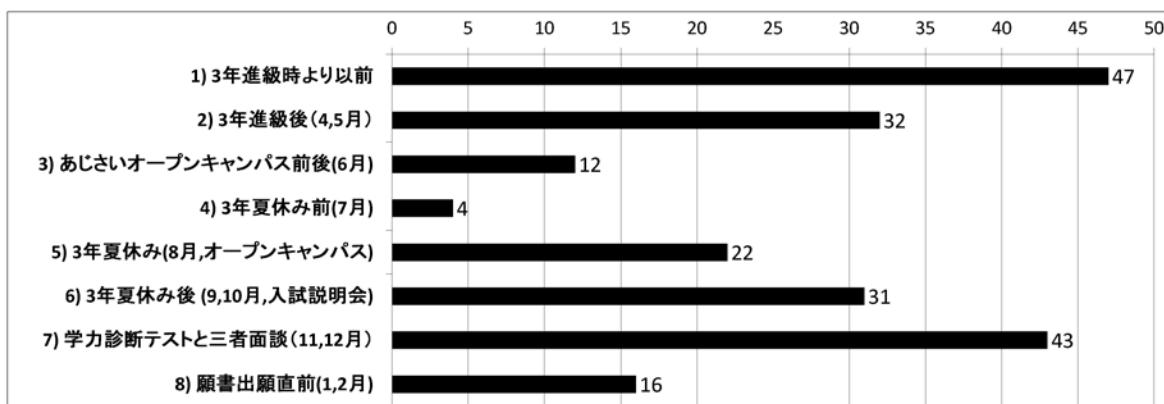
(注) 平成23年度入学者選抜試験中学校別合格者数をこの項目最後に添付する。

(1) 入試に関する1年生へのアンケート調査

4月に新1年生に対し、入試に関するアンケート調査を実施し、今年度の入試に関する方針を決定するための基礎資料とした。以下に例として、高専受験の決定時期、本校を志望した理由とアドミッションポリシーに関するデータを示す。

① 高専受験の決定時期

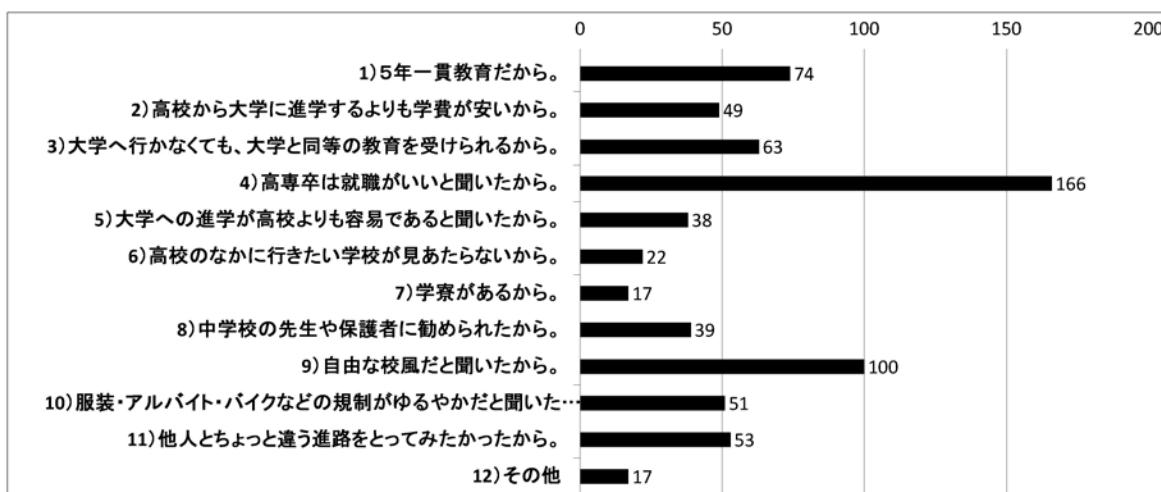
高専受験の決定時期としては、昨年度は「11、12月の3者面談の頃」が最も多く、「3年進級時より以前」、「3年夏休み後」の順で回答者数が多かった。今年度も次図に示すように、高専受験の決定時期の回答者数は昨年度とほぼ同様、「3年進級時より以前」が最も多く、続いて「11、12月の3者面談の頃」そして、「3年進級後」と「3年夏休み後」はほぼ同数となっている。これより、学年を問わず参加できる5月開催のあじさいオープンキャンパス（現キャンパスウォーク）は、特に中学低学年時から本校への進学意識を啓発する格好の機会といえる。さらに、8月と10月に行ったオープンキャンパスも本校への進路選択を促す機会として大きな意義を持っていると判断できる。



<高専受験の決定時期（複数回答可）>

② 本校を志望した理由

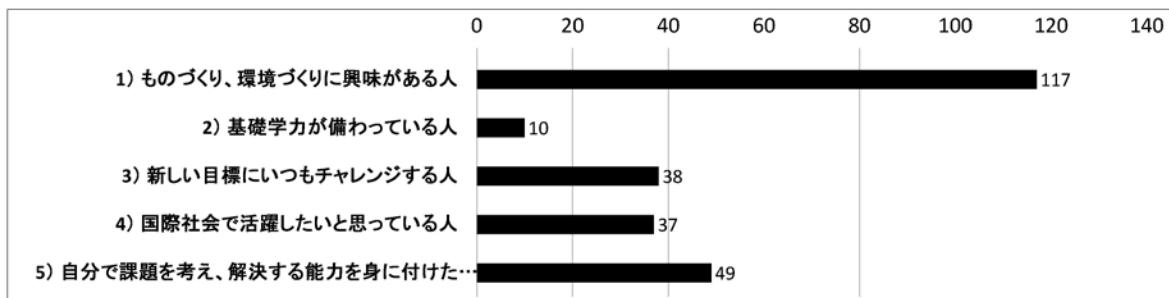
本校を志望した理由を複数回答可で集計したところ、次図のように、「高専卒は就職がいいと聞いたから」が一番多くなり、2番目が「自由な校風に憧れたから」、3番目が「5年一貫教育だから」であり、「大学へ行かなくても、大学と同等の教育を受けられるから」もほぼ同数であり、このような傾向は昨年度とほぼ同様であり、最近の社会経済状況を反映していると思われるが、「高専卒は就職がいいと聞いたから」の回答者数は昨年度よりも増加しており、就職という将来問題を中学生も強く意識しているといえる。また、「高校から大学に進学するよりも学費が安いから」と「大学への進学が高校よりも容易であると聞いたから」いう経済面も考慮した将来の進学を挙げた学生数も、昨年度とほぼ同数あり、保護者や中学教員へのアピールとしては重要な事項の一つと考えられる。



<福井高専を志望した理由（複数回答可）>

③ アドミッションポリシー

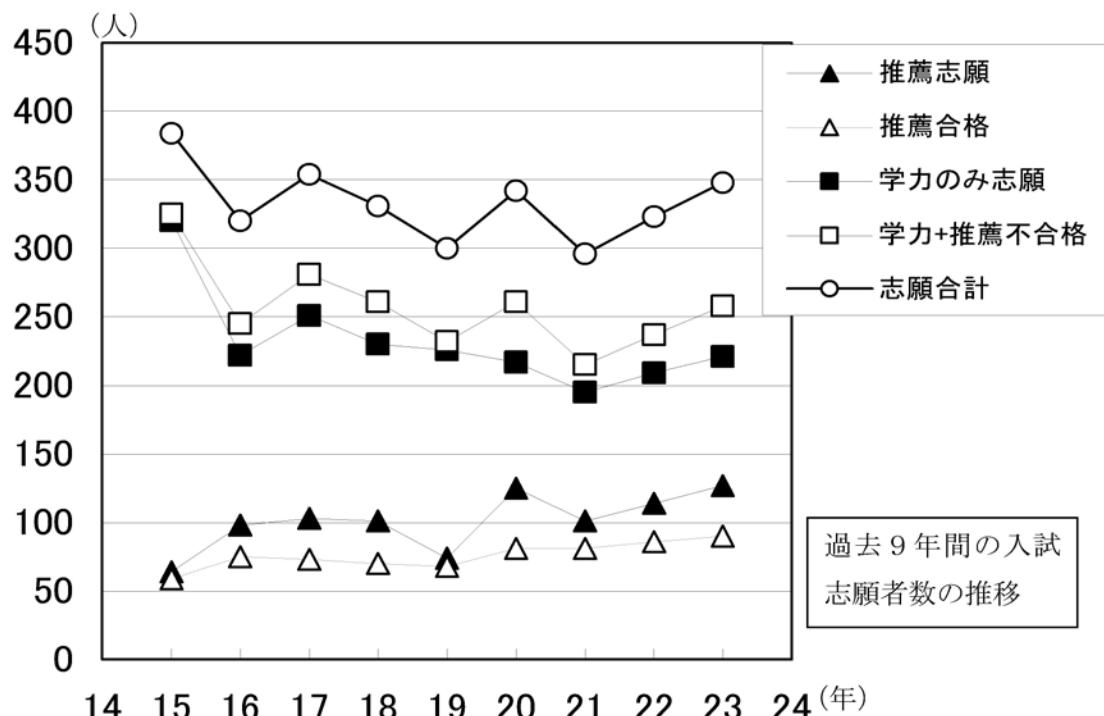
福井高専のアドミッションポリシーの中で、魅力を感じ、福井高専志望の理由となったものは何かを複数回答可で質問したところ、次図のように「ものづくり、環境づくりに興味がある人」の回答者数が昨年度と同様に一番多い。この項目は本校で一番重視している項目であり、アドミッションポリシーに沿った学生が入学しており、適切な状況と考えられる。なお、それ以外の傾向は昨年度とほぼ同様であり、3～5の項目への回答者数はほぼ同数であった。



<アドミッションポリシーの中で福井高専志望の理由となったもの（複数回答可）>

（2）推薦基準の検討

本校の教育レベルの維持とさらに教育内容を向上するために、入学生の質の向上と適正な志願倍率の確保は重要な問題である。中学生の生徒数の減少と共に、本校の入試倍率は平成17年度1.8倍、18年度1.7倍、19年度1.5倍と低下傾向が続いていたが、20年度に推薦基準の改訂（緩和）を行い、1.7倍にまで回復した。21年度は入学者の質はまづまづであったが、倍率は1.5倍に減少した。22年度は推薦募集枠を1名増加し、入試会場の改善、広報活動の強化を行い1.6倍に回復した。下図に過去9年間の入試の志願者数の推移を示す。



平成20年度に改訂した内容は以下の通りである。

- 推薦要件の緩和（対象学年を2、3年とし、基準点数を68点以上に低減）
- 募集人員を30%程度から35%程度に5%（各科2名）増加

次に、平成22年度に改訂した内容は以下の通りである。

- (a) 募集人員を35%程度から15名程度に増加（2.5%（各科1名）増加）
- (b) イ要件の「科学の分野」を「科学や技術の分野」に改正

この改定案は、過去の入試データおよび入学後の成績との相関を詳細に検討して割り出しており、入学後の1年生の成績を調べてみると、この基準で推薦入学した学生の成績は問題がなく適性であることを確認している。今年度の推薦要件についてもいくつか改正案を提案し検討したが、最終的に基準は変更せずに、広報活動を充実することで対応することにした。

（3）入試会場の5会場体制の整備

福井高専会場と滋賀県彦根市会場以外に、19年度に嶺北北部のあわら市、20年度に嶺南の敦賀市、そして21年度は人口の多い福井市に学力検査会場を新設し、学力検査は5会場体制になった。21年度の福井市会場は、JR福井駅に隣接し、交通の便が良いアオッサ7階の放送大学福井学習センターで実施した。22年度から福井市会場の収容人員を増加し、受験生の地域制限を撤廃してより利用しやすくするため、同じアオッサの6階フロアを全て占有して入試を行えるようにした。これに伴い、会場の環境が厳しいあわら会場の統合を検討して行きたい。また、本校会場も21年度の本館棟改修によって、新しい教室で実施できるようになった。

（4）入試配付資料の改善、カレッジガイドのデジタル化、キャンパスグッズの製作

入試関連の中学生に対する本校紹介用資料としては、冊子体のカレッジガイドを用いており、中学校訪問時や郵送で県内全中学校および滋賀県・石川県の中学校に指定部数を配布し、オープンキャンパスや入試説明会等の参加者に渡している。なお、本校ホームページにカレッジガイドのデジタルパンフレットを掲載し、いつでもカレッジガイドがパソコン画面で本をめくるように見られるよう改善した。

また、各県立高校の紹介資料が中学生全員に配布されているのに対応するため、3年前から「福井高専Q&A」というリーフレットを作成し福井県内の中学生全員に配布している。今年度は6～7月の福井県および滋賀県の中学訪問時に持参し3年生全員への配布を依頼した。また、2年時の進路指導の授業での使用を目的に、県内の中学校2年生全員に配布して頂くよう依頼し、滋賀、石川県内中学校には指定部数を9月に郵送した。また、昨年度改訂した本校紹介用のCD（ビデオ映像）を、オープンキャンパス等で配布し、中学校訪問時に持参した。

なお、今年度は本校のロゴマークの入ったキャンパスグッズ（ファイル、シャープペンシル、蛍光ペン、エコバッグ等）を製作し、オープンキャンパス等で配布した。

(5) 入試関連行事の見直しと改善

① 校長・副校長による県内の中学訪問と挨拶（4、5月）

年度の当初に校長・副校長が丹南および福井地区の主要中学校を訪問し、各中学校校長に対して前年度の志願者派遣に対する謝礼を述べている。また、副校長が残りの県内のほぼ全中学校を訪問し、前年度の御礼と今年度の入試関連行事の予定、特に今年度改修を記念して開催する新企画のキャンパスツアーと恒例のオープンキャンパスへの参加を依頼した。1年生のアンケート結果で「就職が良いこと」が志望動機で最も多いことから、就職（不況時の高い求人倍率）と進学状況、および校舎改修を分かりやすく説明した印刷物を作成し、訪問時に配布した。

② KOSEN キャンパスウォーク 2011（5月）

KOSEN キャンパスウォーク 2011 を連休後半の5月7日（土）に開催した。1～3年までの中学校生徒、教員及び保護者対象に、校舎、各実験室や女子寮等の施設・設備見学をスタンプラリー形式で行い、併せて相談コーナーで本校の教育・学生生活・入試等の質問に答えることで、本校を身近に感じてもらうことを目的としたものであった。当日は生徒数が401名、全体で629名の参加があり、女子中学生の参加者数は男子中学生のそれの半分以上であった。

参加者へのアンケート調査では、満足度に関しては「大変良かった」と「良かった」への回答者の割合は中学生で97%、全体では98%と非常に高かった。また、自由記述欄への記述は239件あり、その主な内容として、“各学科の特徴が分かった”、“行きたい学科の内容が理解できた”や“学生が伸び伸びと勉強していることが分かった”等の良い感触の感想が195件と全体の82%を占めていた。

③ 中学校訪問（6月中旬～7月上旬）

6月中旬から7月上旬にかけて、県内のほぼ全中学校と滋賀県の中学校を副校長、学科長・一般科目主任、教務主事補が分担して訪問した。昨年度から、教員ができるだけ2人体制で訪問することとし、詳細な訪問マニュアルも作成した。さらに今年の入試や進路情報などの分かりやすい印刷物を作成し配布した。応募者が減少傾向の滋賀県は教務主事団が2人体制で訪問した。また、2年前入試会場として敦賀会場を新設したため、若狭地区の中学校もほぼ全校を訪問した。さらに石川県の中学校の中で、昨年応募者のあった福井県側の加賀市、小松市の中学校を訪問した。

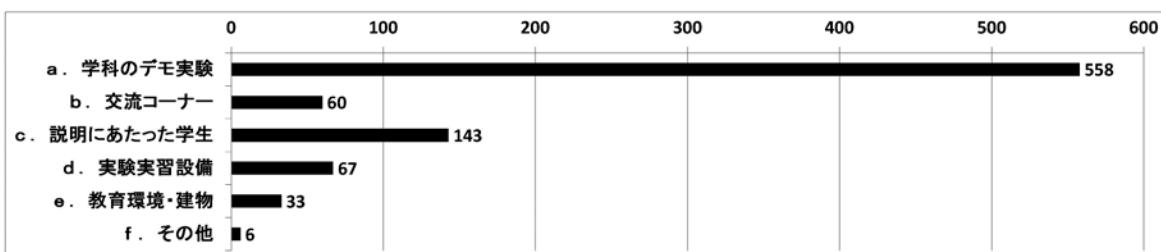
④ キャンパスツアー2011（8月）

毎年夏に、本校の各学科の内容を中学3年生・保護者・中学校関係者に紹介するため開催しており、昨年度の同時期に開催していたオープンキャンパスを、キャンパスツアーと名称を改め、保護者も参加しやすいように今年度も土曜日に開催した。このイベントは、各学科の5年生が準備して実際にデモ実験等を体験

できるために中学生に人気がある。今年度の最終的な参加者は、生徒449名、保護者217名、教員28名（総数694名）となり、昨年度よりも総数で10名多かった。

キャンパスツアー実施後のアンケート結果は、以下の通りである。昨年度と同様であるが、各学科が工夫を凝らし体験コーナーが充実していたため、学科のデモ実験等のコーナーの評価が高かった。また、全体の満足度も非常に高く、回答者のほぼ全員が「大変良かった」または「良かった」と回答した。開催日に関してもアンケートを採ったが、「どの時期でも良い」が最も多く、続いて現在の日程（8月第一土曜日）、7月下旬の順であった。本校の学事日程との兼ね合いより、来年度も今年度のような日程で良いと判断される。なお、オープンキャンパスの見学方式として、固定した学科でなく現在のような5学科全部を見学する方式の方が良いと回答した生徒が大多数を占めた。

(a) 一番印象に残ったこと（一つ回答）



(b) 満足度



⑤ キャンパスリサーチ（10月中旬）

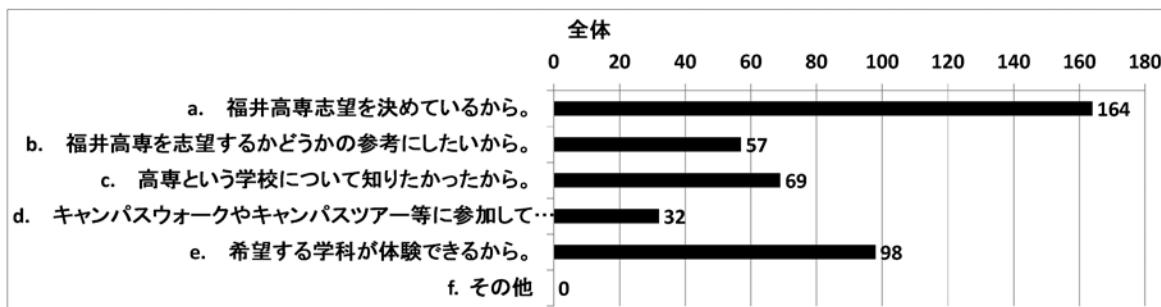
新しい試みとして、高専際の開催時期に合わせて、10月15日(土)にオープンキャンパス第3弾、キャンパスリサーチを中学3年生のみを対象に開催した。

当日、232名(男子183名、女子49名)の参加者は希望する2学科での授業を体験してもらい、これを通して学科の内容や特徴についての理解を深める機会を提供した。授業体験後は、高専際に参加する中学生も多くみられ、本校の文化的な雰囲気の一端にも触れていた。

キャンパスリサーチ終了後、参加者に対してアンケート調査を行った。キャンパスリサーチへの参加動機の調査結果(複数回答可)を次図に示した。同図によると「a. 福井高専志望を決めているから」と「e. 希望する学科が体験できるから」

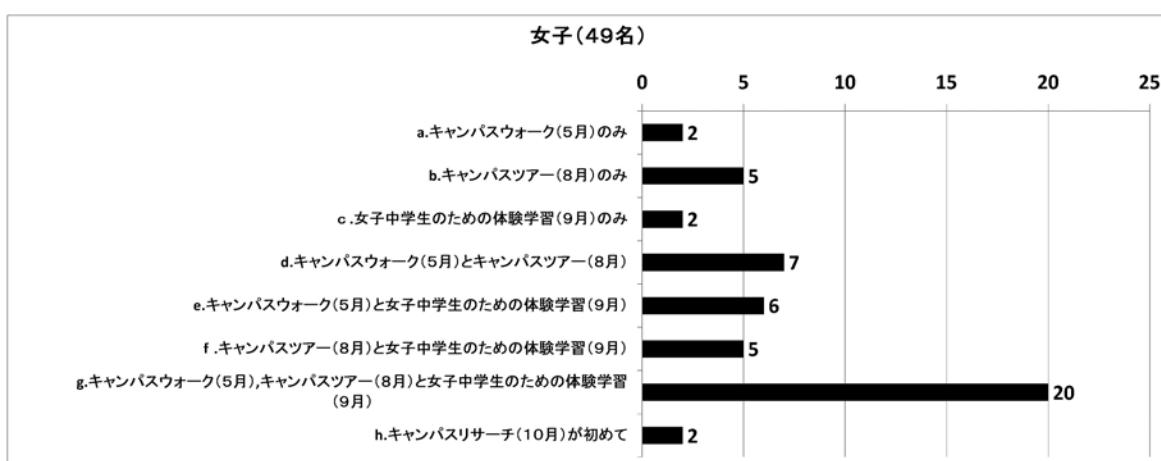
の回答者数の総数割合は、全体の約 6.2 %に達している。e. の事項の回答者数には a. の回答者も含まれており、本校第一志望学科と第二志望学科を明確に決定し、学科選択のミスマッチを避けようとする意図で、キャンパスリサーチに参加した中学生も多いように思われる。

(a) 参加動機（複数回答可）



また、今年度行われたオープンキャンパスにどの程度参加したかについての調査結果を男子中学生と女子中学生に分けて、次図に示した。ほとんどの参加者はこれまでに開催したオープンキャンパス等に1回、ないし2回参加していることがわかる。その一方、今回が始めてという参加者も参加者全体の約 1.3 %を占めており、11～12月に予定されている3者（中学生、保護者、担任）面談に向けての準備のためにこの機会を利用したものと考えられる。

(b) オープンキャンパスへの参加状況



最後にオープンキャンパスの参加者を過去7年間で比較した（下表）。この表からも分かるように、今年度の参加者は5月、8月、10月の合計で1,555名あり、昨年より134名減少したが、生徒数は1,082名で5名減と前年数をほぼ維持した。

また、参加中学校も延べ206校となり、中学校関係者に高専という名前が浸透してきている証だと思われる。なお、今年度実施された3回のオープンキャンパスで重複して参加した生徒を1回参加として求めた実参加生徒数は744名になる。昨年度の実参加生徒数734名と比較すると10名多く、近年では最も多い参加生徒数であった。

<過去7年間のオープンキャンパス参加者・参加校数の推移>

区分	参加校	参加者				計
		生徒	保護者	教諭		
23年度	5月	62	401	221	7	629
	8月	91	449	217	28	694
	10月	53	232	0	0	232
	計	206	1,082	438	35	1,555
22年度	5月	53	340	168	6	514
	6月	65	307	166	18	491
	8月	89	440	213	31	684
	計	207	1,087	547	55	1,689
21年度	6月	59	341	216	24	558
	8月	82	413	183	25	621
	計	141	754	399	49	1202
20年度	6月	56	263	153	30	446
	8月	80	395	139	35	569
	計	136	658	292	65	1,015
19年度	6月	49	301	170	26	497
	8月	78	435	116	30	581
	計	127	736	286	56	1,078
18年度	6月	38	235	84	15	334
	8月	76	317	117	29	463
	計	114	552	201	44	797
17年度		82	474	148	37	659

<過去5年間のオープンキャンパスへの実参加生徒数>

年 度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
実参加生徒数	551	497	547	734	744

⑥ 入試相談コーナー（8月、10月）

8月27日（土）、28日（日）に開催された「おもしろフェスタ in サンドーム福井2011」の高専コーナーおよび10月15日（土）、16日（日）開催の高専祭において、入試相談コーナーを設け本校の紹介と入試の案内を行った。その結果、おもしろフェスタでは、中学3年生が12名、2年生が6名、小学生が2名参加し、保護者も相談に訪れ、昨年より増加した。高専祭の方は、中学3年生よりも中学1、2年や小学生が保護者と訪れることが多く、長い目で見た入試対策として今後も継続すべきと考えている。

⑦ 中学校訪問等（9月）

丹南地区および福井・嶺北北部地区の中学校を9月末に訪問し、募集要項等を持参した。今年度の入試情報や入試説明会の参加依頼、中学校主催の高校説明会への積極的参加などを説明した。

⑧ 入試説明会（10～11月）

福井県、滋賀県内を幾つかのブロックに分けて、校長・副校長・学科長・一般科目主任・教務主事補によって本校の紹介と入試の実際についての説明会を行っている（福井県10会場（11回）、滋賀県6会場）。昨年とほぼ同じ形式で実施しており、会場の一部を変更し、福井県内の説明会は、福井会場（2回）と高専会場（2回）以外は副校長と教務主事補がチームを組んで説明会を行った。なお、募集要項の内容や入試問題等の内容を昨年より多く分かりやすくしたスライドを作成し、入試説明会のマニュアルを改訂した。学科紹介用のスライドは、統一したデザインで各学科に作成を依頼した。過去5年間の入試説明会の参加者数の推移を下表に示すが、昨年度より生徒数で66名、合計で128名増加していた。福井新聞に9月に掲載された県教育委員会発表の高専志望者数も昨年度と比較して29名増加している。今年は福井県の中学3年生の人数が約300名減少したが、参加生徒数は幸いにも増加し、過去8年間では最多の人数となり、オープンキャンパスの参加者増に対応していた。

また、各中学校が主催する高校説明会にも積極的に参加するようしている。今年度は昨年から6校増えて17校から参加依頼があり、副校長が10回、教務主事補が7回出席し入試に関する話をした。なお、昨年までは丹南地区の中学校からの依頼が主であったが、今年度は滋賀県からの依頼が4校と増加し、大野や若狭地区からの依頼もあった。なお、2月には、中学校2年生に対する本校紹介の依頼が1件あり、教務主事補が参加した。

<過去5年間の入試説明会参加者数、県教委発表の高専希望者数（9月集計）の推移>

	生徒	保護者	教諭	計	県教委
23年度	258	272	61	591	291
22年度	351	337	61	749	312
21年度	285	256	80	621	283
20年度	268	223	65	556	254
19年度	329	297	78	704	278

5. 留学生受け入れ状況

本校では、諸外国との相互理解と友好の増進に寄与するため、平成3年度から外国人留学生を受け入れ、今年度までに64名に達している。今後も国際協力のため積極的に受け入れを続けたい。また、他の学生にとっても学校・クラス内に留学生と日常的に接することは、国際社会の一員であることの理解や、国際感覚を身に付ける観点からも有益と考えられる。

平成23年度の留学生の在籍状況は下表の通りである。

学年・学科等	国名	マレーシア	ラオス	モンゴル	カンボジア	パングラディッシュ	インドネシア	合計
3年	機械工学科	1						1
	物質工学科			1				1
	小計	1		1				2
4年	機械工学科	1						1
	電気電子工学科					1		1
	物質工学科			1				1
	小計	1		1		1		3
5年	機械工学科	1						1
	電子情報工学科			1				1
	物質工学科	1						
	小計	2		1				3
専攻科 1年	生産システム 工学専攻			1				
	小計			1				1
	合計	4	0	4	0	1	0	9

6. 在校生の状況

平成23年度の在籍状況は以下のとおりである。（平成23年10月1日現在）

<本科>

学 科	定 員		現 員					
	学級	学科	1年	2年	3年	4年	5年	合 計
機械工学科	40	200	40 (1)	40 (1)	41 (0)	47 (1)	35 (0)	203 (3)
電気電子工学科	40	200	40 (5)	42 (3)	39 (3)	41 (2)	41 (3)	203 (16)
電子情報工学科	40	200	40 (8)	42 (5)	37 (4)	44 (5)	36 (4)	199 (26)
物質工学科	40	200	41(20)	43(12)	35(12)	40(12)	39(18)	198 (74)
環境都市工学科	40	200	40(12)	39 (9)	43(11)	37(10)	31 (5)	190 (47)
合 計	200	1,000	201(46)	206(30)	195(30)	209(30)	182(30)	993(166)

() 内は女子で内数

<専攻科>

専 攻	1 年	2 年	合 計
生産システム工学専攻	17 (0)	14 (1)	31 (1)
環境システム工学専攻	10 (2)	13 (8)	23 (10)
合 計	27 (2)	27 (9)	54 (11)

() 内は女子で内数

平成 23 年度入学者選抜中学校別志願者数等一覧

中学校名	推薦選抜合格者							学力選抜合格者							合格者計						
	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計			
国見中学校																					
川西中学校																					
至民中学校						1					1	2	1				1	2			
社中学校		1			1			1	1			2			2	1		3			
福井大学 教育地域科学部 附属中学校											1	1					1	1			
灯明寺中学校				1	1						1	1					2	2			
森田中学校								1	1	1			3		1	1	1	3			
明道中学校		1			1			1					1		1	1		2			
進明中学校	1				1			1	1			2		1	1	1		3			
清水中学校			1		1											1		1			
藤島中学校	1			1		2				1			1	1			2		3		
光陽中学校										1		1					1		1		
足羽中学校				1	1	2	2	2	1				5	2	2	1	1	1	7		
足羽第一中学校				1		1		1				1	2		1		1	1	3		
明倫中学校	2				2	1	1	2			1	5	3	1	2			1	7		
成和中学校			1	1		2										1	1		2		
大東中学校	1	1			2				1			1	1			1	1		3		
松岡中学校	1					1	1				2	2	5	2			2	2	6		
永平寺中学校								1			2	3		1			2		3		
上志比中学校		1			1										1			1			
勝山中部中学校																					
勝山南部中学校																					
かつやま子ども の村中学校		1			1										1			1			
美山中学校				1	1		1					1		1			1	2			
開成中学校				1	1		1		1	1	3		1			1	2	4			
陽明中学校	1			1	2		1			1	2	1	1				2	4			
上庄中学校						1					1	1						1			
三国中学校	1		1	1	3			1		1	2		1	1	1	2	5				
芦原中学校				1		1										1		1			
金津中学校				1		1					1	1				1	1	2			

中学校名	推薦選抜合格者							学力選抜合格者							合格者計						
	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計			
丸岡中学校			1	1		2	1		3			4	1		4	1		6			
丸岡南中学校	1			1		2			1			1	1		1	1		3			
春江中学校	1		1	2		4				1	1	2	1		1	3	1	6			
坂井中学校						1						1	1					1			
気比中学校	1	1	1			3								1	1	1		3			
松陵中学校									2			2			2			2			
角鹿中学校																					
栗野中学校		2			1	3		1	1			2		3	1		1	5			
小浜第二中学校							1	1		1		3	1	1		1		3			
上中中学校		1				1				1		1		1		1		2			
武生第一中学校	2	1		1	2	6	1	3	1	1		6	3	4	1	2	2	12			
武生第二中学校				1		1		2		1	1	4		2		2	1	5			
武生第三中学校		1				1		1				1		2				2			
武生第五中学校								1		1	2			1		1		2			
万葉中学校		1	1			2		2	2	1	5		1	3	2	1		7			
鯖江中学校			1		3	4	3			1	4	3		1		4		8			
中央中学校			2		4	6	2		1	2	2	7	2		3	2	6	13			
東陽中学校	2			1	1	4		2			1	3	2	2		1	2	7			
朝日中学校		1		1		2								1		1		2			
織田中学校	1	1				2	1					1	2	1				3			
宮崎中学校		2				2		1			1		2	1				3			
越前中学校	1					1						1						1			
越廻中学校																					
武生第六中学校			1			1	1		2			3	1		3			4			
南越中学校		1	1			2	2	1		1		4	2	2	1	1		6			
池田中学校			1			1								1				1			
南条中学校							1				1	2	1				1	2			
今庄中学校					1	1											1	1			
河野中学校									1		1				1			1			
福井県小計	15	14	16	16	18	79	20	21	22	20	22	105	35	35	38	36	40	184			

中学校名	推薦選抜合格者							学力選抜合格者							合格者計							
	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計				
秦荘中学校																						
玉園中学校																						
彦根西中学校				1		1												1		1		
彦根南中学校																						
安土中学校																						
長浜西中学校							1							1	1						1	
木之本中学校		1					1									1					1	
老上中学校										1			1					1		1		
高穂中学校																						
葉山中学校								1					1		1						1	
葛川中学校																						
瀬田中学校																						
南郷中学校	1						1								1						1	
今津中学校				1		1												1		1		
安曇川中学校																						
湖西中学校		1					1									1					1	
比叡山中学校																						
甲南中学校			1				1											1			1	
日野中学校		1	1				2										1	1			2	
甲西北中学校		1					1										1				1	
滋賀県小計	1	4	2	2	0	9	1	1	0	1	0	3	2	5	2	3	0	12				

V. 進路指導関係

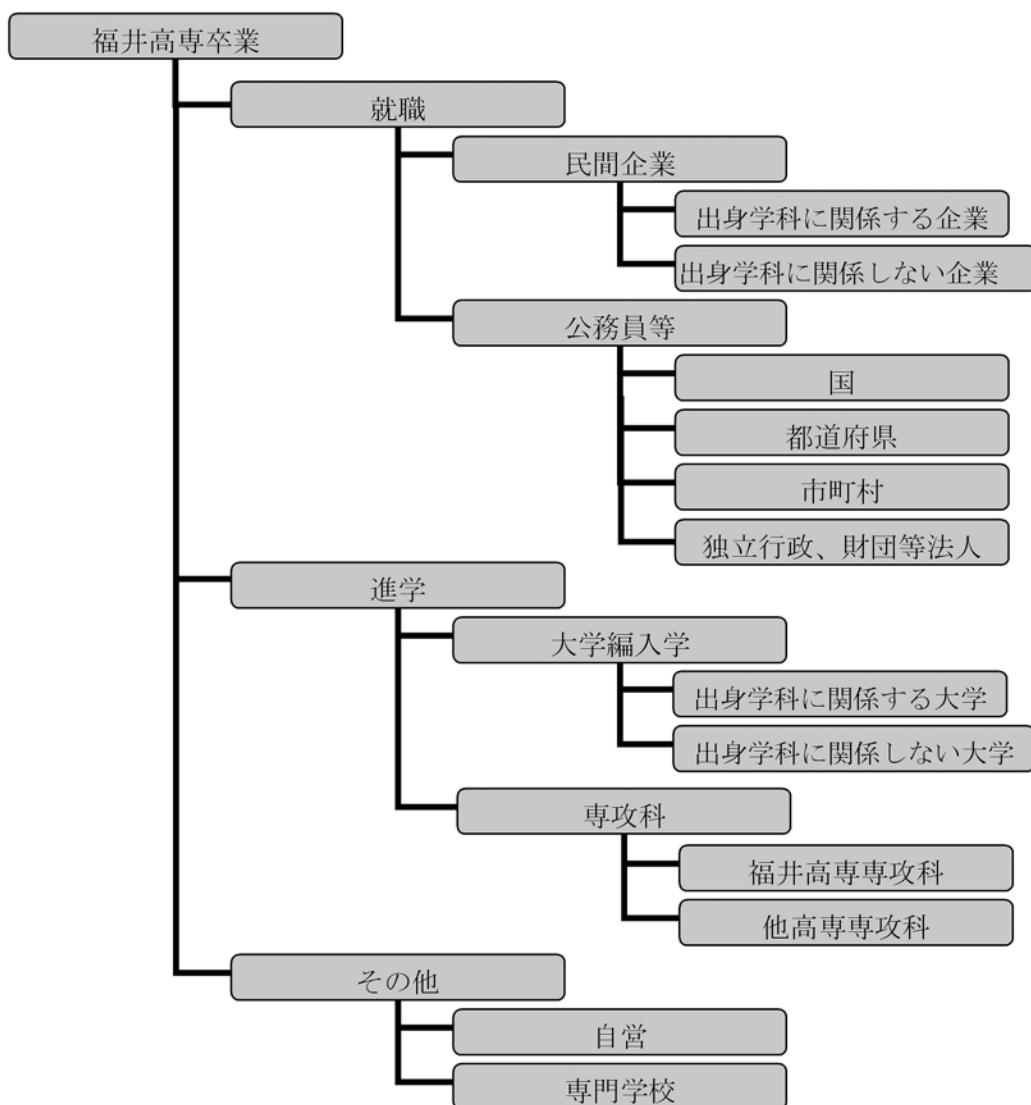
1. 基本方針

高等専門学校は設置以来、卒業生の産業界での活躍もあり、求人倍率が高倍率を続けてきた。また、高学歴社会を望む社会の風潮から大学編入を求める時期もあったが、近年は価値観の多様化によって学生は就職、専攻科進学、大学編入学、専門学校などへと幅広い選択をするようになってきた。本校では、将来技術者として活躍を期待される学生の重要な決定事項である進路について、進路指導委員会と各学科が綿密な連絡をとりながら学生の指導に当たっている。また、キャリア教育にも力を入れ、本校入学当初からの「社会において自立できる力の養成」を目標とした方針を立てている。

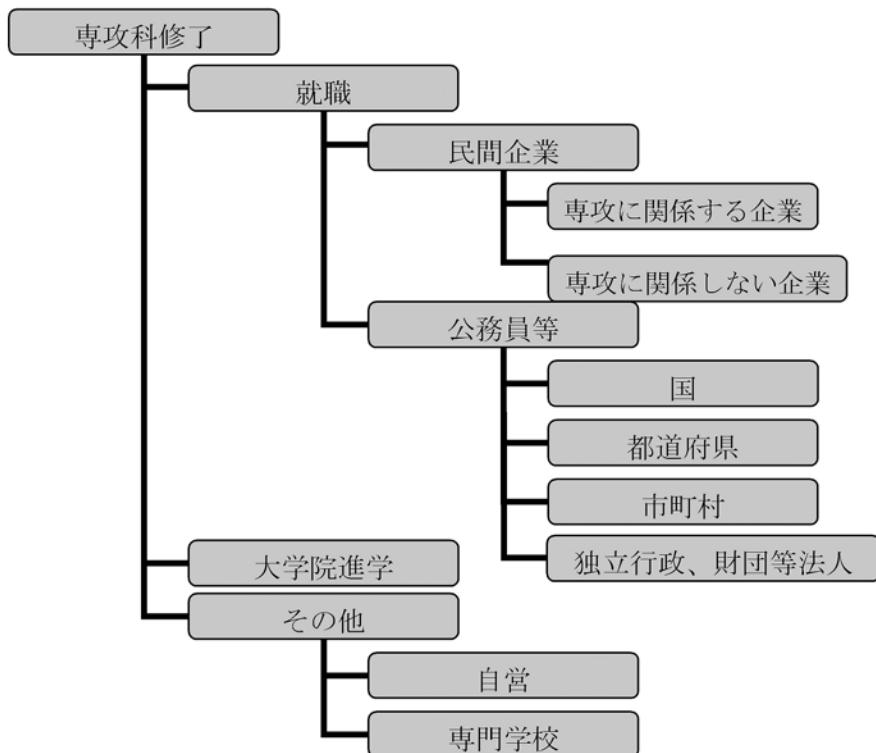
2. 本校卒業後・修了後の進路

本科生および専攻科生の進路を下図に示す。

(本科生の場合)



(専攻科生の場合)



本科生の場合、平成 21 年度までは、専攻科の設置や大学の編入生受け入れ数の増加などによって、進学を希望する学生数が増え、ほぼ半数が大学編入学もしくは専攻科進学という傾向にあった。しかし、他の高等教育機関に比べ、高専卒業生の就職内定率がこの不況にもかかわらず好調な理由（平成 23 年度、就職を希望する学生に対する求人倍率は、本科については約 18 倍、専攻科については約 24 倍）により、徐々に就職希望者が増えてきた。本校では、平成 23 年度卒業予定者の場合、就職者と進学者の比率は 62 : 38 である。なお価値観の多様化によって、出身学科にそれほど関係しない企業や大学へ進むことを希望する学生もいる。平成 23 年 1 月末現在、本科生に関し進学予定者を含めた進路内定率は約 96% となっており、専攻科の進路内定率は、平成 23 年 11 月の時点で既に 100% に達している。

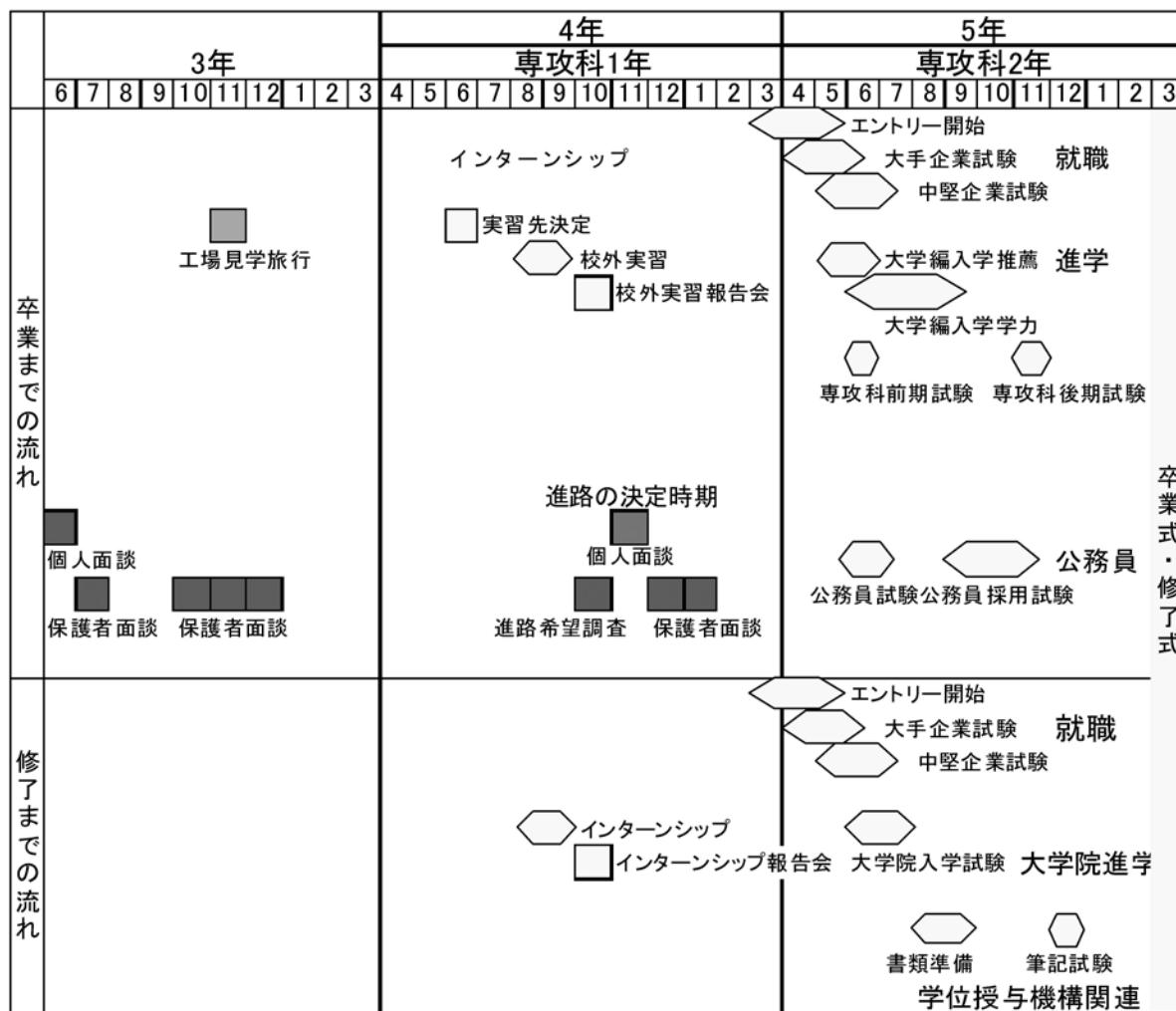
3. 進路決定の流れ

就職に関しては、本科 4 年、専攻科 1 年の 3 月には全国規模の大手企業の就職活動が始まる。環境系では、公務員試験を受ける学生も多いが、専攻科 2 年で受検できる公務員試験は、国家Ⅰ種、国家Ⅱ種、福井県Ⅰ種、市町村などである。本科 5 年で受検できるものは、国家Ⅱ種、国家Ⅲ種、福井県Ⅱ種、市町村などである。また消防官、

警察官や防衛省、気象庁、海上保安庁などの職員採用試験がある他、独立行政法人や財団法人と呼ばれる公務員に準じた進路もある。

進学に関しては、本科では5月頃から推薦選抜による編入学試験が、また6月からは学力選抜による編入学試験が始まる。専攻科生に対する大学院の入試は、6月頃から始まる。

以上のような就職・進学について、学生に対してタイムテーブルで示したものが下表である。



4. 進学・就職先一覧

(平成22年度)

進学・就職先一覧(平成23年3月卒業・修了予定者)					
機械工学科	電気電子工学科	電子情報工学科	物質工学科	環境都市工学科	専攻科
進学(20名)	進学(14名)	進学(22名)	進学(15名)	進学(14名)	生産・構造(2名)
福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	進学(3名)
北陸道大学	長岡技術科学大学	筑波大学	長岡技術科学大学	北陸道大学	長岡大学大学院
秋田大学	東京農工大学	東京農工大学	筑波大学	長岡大学	1
長岡技術科学大学	東京工業大学	東京農工大学	千葉大学	長岡技術科学大学	
富山大学	福井大学	福井大学	福井大学	富士大学	
金沢大学	岐阜大学	大阪大学	豊橋技術科学大学	福井大学	
福井大学	名古屋大学	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	
愛媛技術科学大学	愛媛技術科学大学	和歌山大学	三重大学	豊橋技術科学大学	
岐阜大学	大阪大学	広島大学	和歌山大学	岐阜大学	
九州工業大学	1	1	1	1	
就職(23名)	就職(25名)	就職(18名)	就職(18名)	就職(20名)	就職(24名)
●県内<8名>	●県内<8名>	●県内<5名>	●県内<5名>	●県内<12名>	●県内<12名>
福井フクタガ	旭化成リマーケ	アスク電機	オヨロク神	オフロム㈱	オフロム㈱
吉川精工	神カナエニルコム	義永和システムマネジメント	組立産業㈱	ジビル課題設計㈱	ジビル課題設計㈱
福リヨコ種子事業所	信越化学工業㈱	義サカイエルコム	高橋建設技術サービス㈱	高橋建設技術サービス㈱	高橋建設技術サービス㈱
レンゴー㈱金津事業所	美高塗装販賣	日化化學㈱	朝高野原	舟岡コンピュータ㈱	舟岡コンピュータ㈱
	日本電塗シパウラ㈱	松文産業㈱	豊賀市	坂井市	坂井市
	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1
	1	1	1	1	1
●県外<10名>	●県外<17名>	●県外<10名>	●県外<14名>	●県外<11名>	●県外<7名>
アイシン精機㈱	アトックス	大阪ガス㈱	大日本レーリング印刷㈱	㈱エム・チック	福井県警察
関西電力㈱	出光興産㈱	京セラ㈱	関西電力㈱	福井市	1
鍛カンセツ	オムロン㈱	京セラ㈱	独立行政法人国際印刷局	福井石油㈱	1
京セラ㈱滋賀瀬戸工場	京セラ㈱	京セラ㈱	第一工業製薬㈱	フク化学生産㈱	1
セラダイヘン	中部電力㈱	ダイキン工業㈱	大扶工業㈱	朝ミルコン	1
小島プレス工業㈱	ダイキン工業㈱	中野製薬工業㈱	中部電力㈱	朝ピュアソフト	1
錦江電機エンジニアリング㈱	日本精密工具㈱	東京ガス㈱	東京ガス㈱	福井県警察	1
佐久間精工㈲	日本精密工具㈱	大日本塗装㈱	東京ガス㈱	福井市	1
住友精化成㈱	日立電機㈱	京セラ㈱	東京ガス㈱	福井市	1
住友精化成	日立電機㈱	京セラ㈱	東邦ガス㈱	福西村	1
神奈製作所	北陸電力㈱	三菱電機㈱	日本資本㈱	朝日エイ	1
東海交通機械㈱	三菱電機㈱	日立電機㈱	日本資本㈱	朝ナバーフリー	1
東海旅客鉄道㈱	三島電機㈱	日立電機㈱	日本資本㈱	朝ピュアソフト	1
東京電力㈱	三島電機㈱	日立電機㈱	日立電機㈱	福井県警察	1
神日本船㈱	三島電機㈱	日立電機㈱	日立電機㈱	福井県警察	1
神日本船㈱	1	1	1	1	1
神日本船㈱	1	1	1	1	1
ピューテック㈱	1	1	1	1	1
ピューテック㈱	1	1	1	1	1
農業機械・畜産機械等の整備会社	1	1	1	1	1
ユニチカ㈱	1	その他(2名)	その他(2名)	その他(2名)	その他(2名)
錦リヨコ沿岸製作所	福井工業高等専門学校研究室	1	福井工業高等専門学校研究室	福井工業高等専門学校研究室	1
	その他(専門学校予定)	1	その他	その他(専門学校予定)	1

(平成23年度)

進学・就職先一覧(平成24年3月卒業・修了予定者)					
機械工学科	電気電子工学科	電子情報工学科	物質工学科	環境都市工学科	専攻科
進学(12名)	進学(18名)	進学(15名)	進学(18名)	進学(11名)	生産・構造(3名)
福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	進学(3名)
玄洋大学	長岡技術科学大学	千葉大学	長岡技術科学大学	北陸道大学	長岡大学大学院
福井大学	金沢大学	福井大学	福井大学	長岡大学	長岡大学大学院
愛媛技術科学大学	福井大学	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	長岡大学	長岡大学大学院
三重大学	岐阜大学	京都工芸繊維大学	京都工芸繊維大学	三重大学	1
京都工芸繊維大学	1	京都工芸繊維大学	1	和歌山大学	1
和歌山大学	1	1	1	1	1
就職(22名)	就職(25名)	就職(17名)	就職(19名)	就職(17名)	就職(23名)
●県内<8名>	●県内<8名>	●県内<8名>	●県内<8名>	●県内<8名>	●県内<11名>
越前ボリマー㈱	荒川電機設計事務所	神アイジュー㈱	ニシ・ジェイ化成㈱	朝井建設㈱	朝井建設㈱
錦糸町田製作所	共司コンピュータ㈱	神アートワークノゾー	酒井化學工業㈱	京セラ㈱	京セラ㈱
住友化学工業㈱生産工場	神糸町田製作所	神イシワタ	酒井化學研究所支援センター	板川建設㈱	朝サカイエルコム
神福井田村製作所	1	信越化學工業㈱生産工場	信越化學工業㈱	京セラ㈱	京セラ㈱
森永北陸乳業㈱	1	神福井田村製作所	信越化學工業㈱	京セラ㈱	京丹生消防組合
レングー㈱武生事業所	1	神福井田村製作所	神福井田村製作所	京セラ㈱	京丹生特産㈱
	1	1	1	1	1
アボットジャパン㈱	1	京セラ㈱	京セラ㈱	福井県	タナカフォーライト㈱
オプティックシステム	1	大阪ガス㈱	大阪ガス㈱	福井県	東洋染工㈱
木谷電機㈱	1	日立電機㈱	日立電機㈱	新潟市役所	新潟市役所
ギャノン㈱	1	神んでん	第一工業製薬㈱	新潟市役所	新潟市役所
京セラ㈱滋賀瀬戸工場	1	セイコエプソン㈱	日立電機㈱	新潟市役所	新潟市役所
大同工業㈱	1	日本精密工具㈱	日立電機㈱	新潟市役所	新潟市役所
ダイニチ工業㈱	1	SEBACIS	日立電機㈱	新潟市役所	新潟市役所
大和製縫(株)	1	日立電機	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
東レエンジニアリング㈱	1	東洋客室乗務員協会	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
日東電工㈱食糧事業所	1	西日本旅客鉄道㈱	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
日本車輌製造㈱	1	日立電機	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
株テレンブ㈱	1	日本原子力発電㈱	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
ピューテック㈱	1	北陸電力㈱	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
兵神設備㈱	1	北陸電力㈱	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
北陸電力㈱	1	神吉野工業所	日立電機	新潟市役所	新潟市役所
錦村田製作所八日市事業所	1	1	1	1	1
その他(1名)	1	1	1	1	1
日本総合資源開発学院	1	1	1	1	1

VII. 学生指導関係

1. 基本方針

本校の学生指導に関する基本方針は

- ① 毎日、規則正しい生活を送ること
- ② よき学生としてのマナー（社会規範）を身につけること
- ③ 自ら考え、自ら進んで学ぶ姿勢を示し、真摯な態度で学業に取り組むこと
- ④ 文化・芸術・スポーツに親しみ教養を高めること
- ⑤ 自身の将来像を描き、その実現のために計画的に実行すること

の5つにある。これは本校開学以来の学生への指導方針を明文化したものであり、平成23年5月に全教職員、学生に周知した。

2. 学生支援について

前述の基本方針に沿って行う学生指導に関する福井高専の教育の最大の目的は、個性を尊重しつつ社会に通用する知育・德育・体育のバランスのとれた人間になることを学生に教授することにある。この目的を達成するため、本科5年間において福井高専の教育システムの根幹として担任制度が設けられている。本科の5年間は15歳から20歳までの幅広い年齢の若者が対象となるが、一貫した教育・指導という見地から、本校では入学時から学生と呼び、例え1年生の学生であっても自立した責任ある行動をとるよう指導している。そのため入学当初の学齢では通常の高校と比較するとやや緩やかな学則ではあるが、20歳の卒業に至るまで担任によるきめ細やかなサポートを行い、学生に社会的責任を自覚させ、社会に通用する卒業生を育てる努力をしている。この高専独自の5年一貫の担任による指導体制は、福井高専卒業生が社会から評価を受け、高い求人倍率を誇っている大きな理由の一つであり、本校第Ⅱ期中期計画の1の(7)の①にもある通り今後も継続し充実させていくことが大切であると考える。

担任の業務は多岐にわたり、例えば、学生生活全般の指導（友人関係、生活・行動の把握（欠課、欠席の点検）、各種届け出の指導等）、学業成績・悩み等についての個別相談、さらに学年に応じた学校行事の指導・企画・引率等がある。また、全学年で保護者懇談会を実施しており、家庭との意思疎通を図ることも担任の重要な業務のひとつである。

クラス担任は、1、2年を一般科目教室教員、3～5年を各専門学科の教員が担当し、担任補佐（3年は一般科目教室教員）が支援する形式をとっている。しかし、従前はシステム上学科単位で運営されることが多く、各学年の横の連携が弱いことが指摘されていた。そこで平成16年度に、進路指導を強化する目的でまず高学年に学年主任制度を導入し、さらに平成23年度より低学年においても学年主任制度を取り入れ、

担任は進路指導室と連携しながらキャリア教育の充実を図っている（本校第Ⅱ期中期計画の1の（7）の③に対応）。また、平成17年度には、第1学年に混合学級制度を取り入れ、学科間の垣根を越えた交流の素地を作ることで、ヒューマンスキルの形成に学科という縦の関係だけでなく横への膨らみを持たせる工夫を行っている。

次に、多感な青年期にあたる学生の人格形成に大きな影響を与えるものが課外活動である。本校の教育方針の中で「健康の増進につとめ、身体的・精神的に強じんな耐久力を育成する」と謳っており、将来技術者として健康的に活動し、また協調性やコミュニケーション能力を習得するためにも課外活動は重要な位置を占めるものと考えられる。元来、高専制度には、5年間じっくりと課外活動に打ち込めるという利点があり、これを生かして本校では体育系・文化系において多数のクラブが活動している。また、課外活動の安全管理の一環として、クラブ活動の安全管理を主とした指導マニュアルの作成し、さらに今年度も学生と教職員を対象に救命救急法講習会を実施した。

次に、本校には学生全員によって構成される学生会があり、学生会役員を中心となり、体育祭、高専祭、弁論大会、壮行会、クラブ紹介等の学校行事やクリーン大作戦、献血等のボランティア活動などを自主的に企画・運営している。ここでは学生会役員会およびクラブ予算の決定を行う学生総会等が運営機関として設けられ、広報活動としての学生会誌の発行も行っている。学生会の活動に参加することにより、協調性、自主性、リーダーシップや企画力などが育成されることから、クラブ活動と同様に学生会活動も継続して支援していく必要がある。

さらに、本校では、実際に体を動かして経験の中から生きた知識を習得する「体験型のづくり教育」を推進し、これらに関連するコンテストへの参加を積極的に奨励している。全高専が参加し、全国大会が催されるロボットコンテスト（ロボコン）、プログラミングコンテスト（プロコン）、デザインコンペティション（デザコン）の他多くのコンテストに参加している。

その他、平成23年度アクションプランに則り、メンタルヘルス関連への対応強化として、全教職員対象のメンタルヘルス・関連FDを実施した。ボランティア活動に關しても、学生会が主体となったクリーン大作戦を今年度も実施した。さらに今年度は、福井県大学連携リーグ東日本大震災災害ボランティアへも参加した。また、出前講座などへも講師補助として学生たちが積極に参加している。

学生達の健康を護り、学習機会を保証するために、平成20年度より麻疹の対策および調査を実施している。その結果、現在組織としての麻疹耐性率（十分量の抗体を持つか、あるいはワクチンを接種したもの）が学生・教職員を含めた学校組織として95%を越え、疫学的に麻疹の連鎖感染リスクを払拭できたことは大きいと考えられる。また、教職員に対してはインフルエンザの予防接種を推奨し、感染リスクの低減の努力を行っている。

以上のように、本校では、担任制度の充実を図り、クラブ活動・学生会活動・もの

づくり関連コンテスト等の課外活動を奨励し、健康管理・安全管理およびメンタルヘルス関連の対応強化やボランティア活動への取り組みなどを通して、5年一貫教育の利点を生かした人格形成の人間教育を実践していると自負する。

3. 学生の活動状況

(1) 東日本大震災の募金活動

平成23年4月1日（金）・15日（金）・22日（金）

JR鯖江駅前および本校厚生福利施設前で学生会が実施

(2) 新入生オリエンテーション合宿

平成23年4月13日（水）・14日（木） 奥越高原青少年自然の家で実施

メンタルヘルスの話、携帯デビュー講演、教務関係の話、服育の講演

クラスミーティング、学校生活の話

(3) 新入生歓迎会・クラブ紹介 平成23年4月15日（金）

(4) 学生総会 平成23年4月20日（水）

(5) 第47回体育祭 平成23年4月29日（金）

(6) 舞鶴高専交歓試合

平成23年5月22日（日）

福井高専・舞鶴高専で開催

(7) 平成23年度福井県高等学校春季総合体育大会

平成23年6月3日（金）～6月5日（日）

県内各地で開催

陸上、バスケットボール、バレーボール、卓球、水泳

サッカー、剣道、テニス、ソフトボールが参加

(8) 第46回北陸地区高等専門学校体育大会壮行会 平成23年6月22日（水）

(9) 第46回北陸地区高等専門学校体育大会 福井高専が担当で開催

平成23年6月25日（土）ラグビー

平成23年7月2日（土）野球、陸上

平成23年7月9日（土）・7月10日（日） 本大会

成績 総合第3位

団体 男子テニス、野球、女子バレーボール、女子ソフトテニス、女子卓球、女子バドミントン、水泳、男子剣道、女子剣道が準優勝

個人 陸上（男子 200m、男子 5000m、男子走高跳）、テニス（男子シングルス、男子ダブルス）、ソフトテニス（女子）、水泳（男子 50m自由形）、剣道（男子）が優勝

(10) 第44回全国高等専門学校サッカー選手権北信越大会

平成23年7月9日（土）・10日（日）

長岡高専が担当で開催

成績 準優勝

- (11) 救急救命法の講習会
平成23年7月28日（木）鯖江・丹生消防組合署員2名による講演及び実習
体育系クラブ学生37名、教職員12名参加
- (12) 第46回全国高等専門学校体育大会
男子テニス 平成23年8月25日（木）～27日（土）東京高専が担当で開催
成績 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 3位
陸上競技 平成23年8月27日（土）～28日（日） 長野高専が担当で開催
サッカー 平成23年8月20日（土）～23日（火）木更津高専が担当で開催
剣道 平成23年8月28日（日） 長岡高専が担当で開催
ソフトテニス 平成23年8月20日（土）～21日（日）
長野高専が担当で開催
- (13) 第18回全国高等専門学校将棋大会
平成23年8月22日（月）～24日（水） 富山高専が担当で開催
- (14) 福井県大学連携リーグ東日本大震災災害ボランティア
平成23年8月23日（火）～26日（金）
岩手県陸前高田市でボランティア活動 学生14名が参加
- (15) 奈良高専学生と本校学生会との交流
平成23年8月30日（火） 奈良高専学生3名が来校
- (16) 鯖江市交通安全市民大会＜クイズラリー＞
平成23年10月10日（月）体育の日 鯖江市西山公園噴水前広場で開催
学生会の学生5名が参加
- (17) 第8回クリーン大作戦
平成23年10月12日（水）
J R 鯖江駅～高専までの3コースの清掃奉仕活動
- (18) 平成23年度 弁論大会
平成23年10月13日（木）
6テーマ（内1テーマはエキシビションマッチ）で実施
- (19) 第47回高専祭開催
平成23年10月14日（金）～16日（日）
テーマ「無題～俺ら次第～」
ライブコンサート、球技大会、献血の講演会、護身術の講演会
吹奏楽コンサート、少林寺拳法演武会、合気道演武会、アマバンライブ
bingo大会、献血、露店 他
- (20) 第7回全日本学生室内飛行ロボットコンテスト
平成23年10月21日（金）～22日（土） ポートメッセ名古屋で開催
本校「Shooter-acro」6位（多摩川精機販売賞）

- (21) アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト2011
東海・北陸地区大会
平成23年10月30日（日） 岐阜高専が担当で開催
競技課題は「ロボ・ボウル（Robo Bowl）」
本校Aチーム「パラボラQ」
本校Bチーム「投迅防」 デザイン賞、特別賞
- (22) 全国高等専門学校デザインコンペティション2011 in 北海道
平成23年11月12日（土）～13日（日） 釧路高専が担当で開催
- (23) 第5回東海北陸地区高等専門学校英語スピーチコンテスト
平成23年11月12日（土） 岐阜高専が担当で開催
前田勝太（2E I） 2位（全国大会出場）
- (24) 全国高等専門学校第22回プログラミングコンテスト全国大会
平成23年12月22日（木）・23日（金） 舞鶴高専が担当で開催
- (25) 学生総会 平成24年1月25日（水）開催
- (26) 第5回全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテスト
平成24年1月28日（土）～29日（日） オリンピック記念青少年総合センターで開催
- (27) 学生会誌「青塔」発行 平成24年3月
- (28) 外部資格取得状況（平成22年度の主なもの）について
英語検定2級：8名、英語検定準2級：24名、工業英語検定3級：53名、工業英語検定4級：12名、CAD利用技術者試験2級：43名、機械設計技術者試験3級：8名、ディジタル技術検定試験2級制御：2名、ディジタル技術検定試験2級情報：13名、ディジタル技術検定試験3級：6名、第三種電気主任技術者：5名、第一種電気工事士：1名、第二種電気工事士：9名、X線作業主任者：6名、第1種放射線取扱主任者：1名、第2級陸上特殊無線技士：1名、初級システムアドミニストレータ：1名、技術士1次試験上下水道部門：1名、危険物取扱者乙種全類：9名、危険物取扱者乙種第4類：7名、測量士補：11名、消防設備士乙種第7類：1名

4. 奨学金受給状況・授業料免除実施状況一覧（平成23年度）

日本学生支援機構奨学生

(平成23年5月1日現在)

	本科					専攻科		合計
	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	1 年	1 年	
合計	7	9	17	13	9	0	1	56

その他奨学生

(平成23年5月1日現在)

種類	貸与月額	本科					専攻科		合計
		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	1 年	2 年	
福井県 奨学生	自宅通学	18,000円	1	2	2		2		7
	自宅外通学	23,000円				1			1
鯖江市 奨学生	自宅通学	10,000円			3	1			4
	自宅外通学	17,000円							0
	自宅外通学	20,000円							0
あしなが育 英奨学生	自宅通学	25,000円			1				1
	自宅外通学								
合計			1	2	6	2	2	0	0
									13

入学科免除実施状況

区分	免除対象額	申請者数
免除対象者	84,600円	1

入学科徴収猶予実施状況

区分	猶予対象額	可否(人)
徴収猶予対象者	84,600円	2

授業料免除実施状況

区分	免除対象額	前期(人)	後期(人)
全額免除対象者	117,300円	18	20
半額免除対象者	58,650円	11	11
失格者		6	6

VII. 学寮関係

1. 基本方針

学寮は遠隔地からの入学生に修学の便を与えると同時に、共同生活を通してお互いに敬愛啓発し、人間形成を図るという目的で設置されている。そのために、施設、設備の充実には特に力を入れており、生活指導の面では全教員が交替で寮監として泊まり、寮生と直に触れ合うことにより教育目標を果たすよう努めている。

2. 寮生の受け入れ状況

学寮は「青武寮」と称し、収容定員は245名である。東寮・西寮・南寮・北寮の4棟に分かれており、北寮は女子留学生の受け入れも可能な設備を整え女子寮として改修されている。

平成23年度在籍寮生数

平成23年12月1日現在

学科\学年	1年	2年	3年	4年	5年	合計
機械工学科	11	9(1)	12	16	12	60(1)
電気電子工学科	10(2)	11(1)	9(2)	9	9(3)	48(8)
電子情報工学科	8(2)	7	8(1)	4(1)	9(2)	36(6)
物質工学科	13(7)	8(3)	9(4)	8(1)	10(4)	48(19)
環境都市工学科	10(2)	6(1)	9(2)	6(2)	3	34(7)
合計	52(13)	41(6)	47(9)	43(4)	43(9)	226(41)

()は女子で内数

3. 活動状況

学生寮の管理運営は、寮関係教職員と寮監とが緊密に連携を取りながら行なっている。施設・設備面での改善も優先順位を設けて実施している。寮生活の円滑化と充実を図るため、寮生会を組織し、その自主的な活動として寮祭を始め多くの寮内行事を企画し活発に実行している。教職員も寮生会を積極的に支援している。また、国際化を視野に3年次からの外国人留学生の受け入れを行なっている。平成23年度からは短期の外国人留学生の受け入れも実施している。国際的な視野を養うために留学生と他の寮生との交流の促進を図っている。更に、オープンキャンパスなどでは中学生や保護者に対する学寮案内を通して積極的に施設等の公開をしている。

VIII. 学生相談室・保健室関係

1. 学生相談室

(1) 基本方針

本校では、学生生活が円滑に送れるように学生の種々の悩み事や問題の相談に応じるため、福利施設の2階に学生相談室を開設している。

(2) 学生相談室利用状況と相談分野

学生相談室は、教員3名、看護師1名及び非常勤の専門カウンセラー1名の5人体制で運営されている。今年度の各相談員の担当を表1に示す。

相談室員のスキルアップとして、各種の研修会（メンタルヘルス講習会、発達障害者支援のための特別支援教育講習会、ピュアーキャンパス支援講習会、全国学生相談研修会など）へ参加した。教職員向けには、メンタルヘルス講演会を8月に開催し、意識の高揚に努めた。学生に対しては、年度当初の新入生オリエンテーションでの説明会、各クラスにおけるカウンセラーによるメンタルヘルス説明会及び性格診断テストを行った。今年度は、東海地区・北陸地区の高専メンタルヘルス関連の研究協議会の当番校を行い、本校の看護師・カウンセラーと共に研修会を主導した。

表1 平成23年度相談員の担当日時

曜日	月	火	水	木	金
放課後 16:15～17:00	大久保 茂	朝倉 相一	14:00～18:00 清水 照代 カウンセラー	14:00～18:00 清水 照代 カウンセラー	吉村忠与志

表2、表3に平成22年度の月別および学年別相談室利用者の利用者数と相談分野別の件数を示す。

表2 平成22年度学生相談室、学年別と月別利用者数

	4・5月	6・7月	8・9月	10・11月	12・1月	2・3月	22年度
1学年	14	2			2		18
2学年	10	2		5	3	1	21
3学年	10	4			2	2	18
4学年	1	13	2	3		1	20
5学年	21	7		1	5		34
専攻科	5	5					10
保護者	5	10			4	4	23
職員他	5	10	1	3	4	4	62
計	72	57	12	17	25	21	206

表3 平成22年度学生相談室、月別相談内容と相談件数

	4・5月	6・7月	8・9月	10・11月	12・1月	2・3月	22年度
意欲	5	10	1	6	5	2	29
友人	16	6			3		25
家庭	13	5	3	2	4	4	31
生活	1						1
学習	11	29	6	7	11	15	79
将来	26	7	2	2	2		39
その他	2						2
計	74	57	12	17	25	21	206

2. 保健室

(1) 基本方針

学内の保健衛生・学生の健康維持を中心に、あらゆる面で学生をサポートしている。通常の保健業務の他に、学生の精神面における相談業務も行っている。

(2) 保健室の利用状況

保健室の平成22年度利用状況について表4、5に示す。看護師（1名）にはフィジカルな対応以外にメンタル面における対応もお願いしている（インテーカーとしての対応も含む）。表4は保健室の学年別、表5は相談分野別の利用者数である。

表4 保健室の学年別利用者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	22年度	21年度
1年	13	17	13	12	2	4	19	18	4	7	5	4	118	105
2年	14	15	22	10	6	3	20	13	19	8	4	2	136	217
3年	31	31	28	24	7	10	22	28	28	18	7	2	236	134
4年	24	24	15	10	7	1	12	15	8	11	5	2	134	294
5年	24	29	42	28	15	4	19	24	14	16	11	3	229	271
専攻科 1年	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	5	23
専攻科 2年	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	10
保護者	0	2	0	2	0	1	0	1	3	0	0	0	9	1
その他	20	27	44	28	20	17	30	30	23	23	26	47	335	209
	126	145	164	114	57	40	122	129	105	83	58	60	1,203	1,264
													1,203	1,264

※その他・・・オープンカレッジ・職員・卒業生の利用等

表5 相談分野別利用者数

学年/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	22年度	21年度
いじめ													0	0
不登校	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1
人間関係	15	13	3	0	0	0	0	1	1	2	0	0	35	25
学習	0	0	4	1	2	0	0	0	1	1	0	0	9	12
進路	1	2	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	7	12
暴力	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	97	96	111	78	27	33	80	85	58	47	31	26	769	849
メンタル	13	29	45	35	28	7	42	43	45	30	27	34	378	365
合 計	126	145	164	114	57	40	122	129	105	83	58	60	1,203	1,264

IX. 図書館関係

1. 基本方針

本校の図書館は、低学年の学生の教育を始めとして、高学年の学生や専攻科生及び教職員の研究補助、更には、地域住民への貢献等を目的として運営されている。図書館は閲覧室と事務室及び1、2階の書庫とから成り、約400m²の閲覧室には、100席の閲覧室と約3万冊収容の開架書架が設置されている。閲覧室と同フロアの2階書庫は常時開扉されていて、開架書架同様の利用が可能になっている。インターネットを利用した学外からの蔵書検索も可能で、学外者の借り出しもできるようになっている。

2. 活動状況

(1) 教育支援

学生の教育面では、専門分野の蔵書の充実を図るとともに、一般的な教養書の購入にも努めている。また、「資格試験コーナー」やもの作りと実験のノウハウを簡単に解説した「もの作りコーナー」、「定期試験の過去問題コーナー」、「教科書コーナー」等を設けて、学生の学習の便宜に資している。また、平成23年度は英語多読図書約500冊を購入して、学生の英語に対する関心を高めるとともに、英語力の向上を目指している。

購入する図書に関しては、各学科の教員の推薦によって決めるとともに、学生図書委員によるブックハンティングによって約600冊の図書を購入する等、学生の意見や嗜好を取り込む工夫をしている。また、国語科の協力を得て、学生と教職員からなる「校友会誌編集部会」による校友会誌「青樹」(特集、随想、読書感想文、創作、詩、短歌等約100作品)を毎年発行している。

(2) 研究支援

研究面では、長岡技術科学大学と高専によるコンソーシアムに参加することで、Science Direct(エルゼビア社)、ACS(アメリカ化学会)、AIP(アメリカ物理学協会)、APS(アメリカ物理学会)の約2,000タイトルの電子ジャーナル及びMathSciNet(アメリカ数学会)、JDream II(科学技術振興機構)の文献データベースを利用できるようにしている。また、本校で購読していない電子ジャーナル及び雑誌・図書等の文献については、図書館間相互貸借サービス(NACSIS-ILL)を利用して、文献複写・図書を学外から取り寄せるなどして、研究者への研究支援体制を整えている。

(3) 地域貢献

地域貢献については、平日は午前8時30分から午後8時まで、土曜日は午前9時から4時30分まで開館して、地域住民の利用に資するとともに、必要文献の貸出しにも応じている。

また、福井県内図書館横断検索システムに参加して、県内主要図書館の蔵書の一括検索と物流システムの活用による蔵書の貸借が可能になり、さらに、福井県地域共同リポジトリに参加して、本校研究者の学術成果をインターネットを介して公開することで、地域に対する説明責任を果たしている。

以下、平成22年度末の蔵書構成を表1に、利用状況を表2に示す。

表1 平成22年度末の蔵書構成

分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	
和書	7,030	2,850	5,137	5,412	16,411	18,972	893	3,243	3,784	10,534	74,266
洋書	469	358	202	248	3,926	1,557	11	56	1,331	919	9,077
合計	7,499	3,208	5,339	5,660	20,337	20,529	904	3,299	5,115	11,453	83,343
比率 (%)	9.0	3.8	6.4	6.8	24.4	24.6	1.1	4.0	6.1	13.7	100.0

この他に、教育後援会文庫が11,130冊があるので、蔵書の総計は94,473冊になる。

表2 平成22年度の月別利用状況

月	開館日数	入館者数	貸出冊数	貸出者数	入館者数/日	貸出冊数/日	貸出者数/日
4	23	4,729	1,083	564	205.6	47.1	24.5
5	23	5,410	956	461	235.2	41.6	20.0
6	26	6,990	1,127	507	268.8	43.3	19.5
7	26	6,588	1,059	449	253.4	40.7	17.3
8	18	2,916	598	241	162.0	33.2	13.4
9	17	1,784	339	165	104.9	19.9	9.7
10	23	4,770	813	409	207.4	35.3	17.8
11	24	5,283	885	416	220.1	36.9	17.3
12	20	4,231	882	423	211.6	44.1	21.2
1	20	3,919	656	308	196.0	32.8	15.4
2	23	5,497	627	294	239.0	27.3	12.8
3	20	2,259	339	137	113.0	17.0	6.9
計	263	54,376	9,364	4,374	206.8	35.6	16.6

この他に、DVDなどの視聴覚資料の利用者が年間64人

X. 創造教育開発センター

1. 創造教育開発センター設立の経緯と業務

本センターは、FD委員会、教育改善委員会等の役割を統合し新たな位置づけを持つて2007年度（平成19年度）に発足したセンターである。本センターの主な業務内容として、

- (1) 教育改善のためのFD活動の推進
- (2) e-Learningなどのメディア活用教育の調査と研究
- (3) カリキュラムの調査と情報集積

を挙げている。なお各年度毎にセンター報告書を刊行している。

2. 平成22年度、平成23年度の活動

平成20年度に高専設置基準が改正され組織的なFD活動の義務化がなされ、それともない、本センターも発足4年目として年間計画をたて活動をしてきた。主な取り組みとしては、公開授業や授業アンケートの実施、FD研修会の開催、福井県大学間連係事業への参加などが上げられる。以下、センターの主要な取り組みについて概観しておく。

（1）授業アンケート

授業アンケートに関しては、原則全科目終了時にweb入力により実施し、結果を各教員に返却しコメントを集め、次年度に学生と教職員に公開している。アンケートの学生評価に関しては、全体的にはほぼ高水準で推移している。学年毎に見ると、ここ数年は隔年で平均点が上下している。

学生への公開方法は、印刷製本の形をとらずに、各クラスに関連するものを簡易ファイルとしてクラスに1冊ずつ配布している。一方、アンケートの全体は資料用として分厚いものを1部のみ作成した。また、学内教職員向けにはグループウェア上に公開している。今後もこの形態での資料の配布とネット上での学内向けの公開という形が適当と思われる。

（2）公開授業

前期の中間考查終了後に公開授業週間を設定している。参観者率は、平成19年度は79%、平成20年度は58%、平成21年度は43%と低下傾向にあったが、平成22年度は50%、平成23年度は54%となり低下に歯止めがかかった。実施方法としては、事前に授業担当者に参観の連絡をし、参観後に感想等を授業担当者とセンターに送る形式である。参観者の感想はどれも良好であった。また、従来実施してきた各学科・教室毎年1名ずつの公開授業についても「公開授業に関する教

務に関する申し合わせ事項」を、実施し易いように改正し、継続している。これを公開授業期間に実施する場合もあった。公開授業あるいは公開授業週間の実施により、多くの教員が参観したり参観されたりする形が普通になってきた。

(3) 大学間連携事業

平成20年度に採択された文部科学省戦略的大学連携事業「個性的な地域創生のための学習コミュニティを基礎とした仮想的総合大学環境の創造」に関して本センターが中心となって様々な取り組みを行なってきた。この連携事業（通称「F レックス」）には、福井県立大学、福井工業大学、仁愛大学、仁愛女子短期大学、敦賀短期大学、福井高専の6大学・短大・高専が参加をしている。この連携事業ではFD活動の協同推進が事業の4つの柱（連携基盤、学生の学習コミュニティ形成、地域と連携した学習コミュニティの形成、相互研修型FD活動の推進）の1つとなっている。センター活動のかなりの部分がこの連携事業の推進にあてられており、各部門で本センターの委員が積極的に参加し事業推進に貢献している。

特にF レックス関係では合宿研修が大きな取り組みとなった。

平成22年度は、池田町冠荘にて、9月3日～4日に福井県内から約30名（本校からは8名）の参加を得て実施した。「初年次教育 ポートフォリオの取り組み」「アンケートから見る福井県の学生の特徴」「プレゼン能力の向上をめざそう」という3つのセッションを持った。

平成23年度は、小浜市福井県立大学にて、8月26日～27日に福井県内から約40名（本校からは6名）の参加を得て実施した。「専門分野と対話力を考える」「サイエンスコミュニケーション・トレーニング」「キャリアを描かせるには」を研究テーマとして開催した。いずれも福井県内の全ての大学が参加をしてのFD企画であった。

(4) e-Learning の推進

新たなmoodleサーバーを稼働させて利用する環境が整っている。このサーバーでは事前に全学生・専攻科生を各学科・クラス毎にユーザーとして登録し、クラス単位の授業を簡単に利用できるようにしている。このような利用方法は学年制を採用している高専の教育形態の特徴に合わせたカスタマイズの好例となった。

(5) 卒業生等、進路先等へのアンケート

現在、平成20年度に引き続き、「卒業生・修了生アンケート」「就職先・進学先アンケート」を行っている。卒業生・修了生アンケートの郵送には前回同様に進和会の協力を得、ネットによる回答も実施している。今年度末集計予定である。

（6）FD研修会

平成22年度は、「アンケートから見る福井高専の学生の特徴」と題したFD講演会を開催した。講師の方が、平成22年度に実施したアンケートを用いて福井県の学生と本校の学生の特徴を比較し論じられ、活発な意見交換があった。

平成23年度は、本校教職員のなかで校長表彰を受けた3名の教員から、表彰対象となった教授方法、地域との連携及びクラブ活動指導への工夫等の紹介がなされた。

3. 次年度への課題など

センターの活動の中では、カリキュラムの例の収集が具体化できていないが、カリキュラムについては現在、「高専教育の質保証、教育内容・方法の充実・改善等を目指す観点から、高専機構の「教育内容・方法の改善検討専門部会」が中心となり、平成21年度実施の「カリキュラム調査」をもとに、また、高専機構内部、外部からの意見を踏まえて策定する」といった高専機構による「モデルコアカリキュラム」が検討されている。また、e-Learningの推進も緒についたばかりである。利用実績の積み重ねとその効果についての検討がこれからも求められている。

全国的には、学生の変化に応じた教育システムの構築とキャリア教育について議論が注目を集めている。FD活動という面からも、検討することが課題となっている。

X I. 総合情報処理センター

1. 基本方針

総合情報処理センターは、1年生の情報処理教育から高学年の実験・演習及び卒業研究、教員の研究まで情報処理教育並びに研究活動の支援を行っている。

プログラミングの演習のみならず情報リテラシー教育などにも幅広く利用されており、多様な利用形態に対応したハードウェア、ソフトウェア環境が充実している。

加えて、高等教育機関としての高度情報化社会にふさわしい情報通信のインフラである校内 LAN の運用、維持・管理を担っている。このネットワーク環境より、インターネットを使った教員の教育・研究や学生の学習、情報の伝達・収集・発信などが可能となっている。

2. 活動状況

平成22年度に教育用電子計算機システムを更新し、ネットブート型のシンクライアントシステムを導入した。これは、サーバーに配置されたOSをクライアント端末のパソコンが起動時にロードし、ローカルハードウェア上で実行するシステムである。

従来の教育用電子計算機システムと比較し、ソフトウェアの互換性が高いということや CAD のような高速処理が必要であるソフトウェアでも快適に動作するという利点がある。

また、OSの管理や、変更作業が短時間で行えるなど、これまで以上に演習室端末を柔軟かつ容易に管理運用できるようになった。このような運用方式によって、特定の演習室でしか利用できなかったソフトウェアがどの演習室からでも利用可能となった。そのため授業時間割の割り振りや、時間外利用等でのセンター利用に対する利便性が向上した。

3. 利用状況

総合情報処理センターの4つの演習室（第1演習室パソコン48台、第2演習室パソコン7台、第3演習室パソコン50台、第4演習室パソコン46台）での授業時間割（平成23年度前期・後期）を表1（前期）、表2（後期）に示す。また、平成23年4月から12月の平日17時以降（休日を含む）の時間外利用の状況を延べ利用者数および延べ利用時間で表3に示し、それ以外での利用状況を表4に示す。

表1 総合情報処理センター時間割（平成23年度前期）

曜日	第1演習室	第2演習室	第3演習室	第4演習室 ものづくりアトリエ
月	1 1F5 ものづくり科学		5EI 電子情報工学 実験IV	5E 制御工学II
	2			5B 構造デザイン
	3 2EI プログラミング基礎			
	4			
	5			
	6 1F4 コンピュータ科学入門	5M 機械工学実験II	3M C言語応用	3E 情報処理II
	7			
	8			
火	1 4M 知能機械演習		4EI 電子情報工学 実験III	5B 環境保全工学
	2			5B 数値解析
	3			
	4			
	5 1F3 コンピュータ科学入門	3M 創造工学演習	2EI 電子情報工学 実験I	3EI プログラミング応用
	6			5B 環境都市工学設計製図
	7 1F5 コンピュータ科学入門			
	8			
水	1 1F2 コンピュータ科学入門		4EI 情報構造論	5B 水文学
	2			
	3 3C 情報処理演習		2E 情報処理I	4B 環境都市工学設計製図I
	4			
	5 1ALL ものづくり科学	1ALL ものづくり科学	1ALL ものづくり科学	1ALL ものづくり科学
	6	ものづくり科学		
	7			
	8			
木	1	2M 機械工作実習	3EI 電子情報工学 実験II	
	2			3B 環境都市工学実験実習II
	3 4C 情報化学			
	4			
	5 1F1 コンピュータ科学入門		5E 現代制御工学	4B 環境都市工学実験実習III
	6			
	7			
	8			
金	1 3EI 数値解析	2PS/ES 画像情報処理	4EI 創造工学演習	3B 環境都市工学設計製図II
	2			4B コンクリート構造学I
	3 2C プログラミング基礎			
	4			
	5 2M C言語基礎		4M 機械計算力学	
	6			5M アイデア設計工学
	7			
	8			

表2 総合情報処理センター時間割（平成23年度後期）

曜日		第1演習室	第2演習室	第3演習室	第4演習室 ものづくりアトリエ
月	1	1ALL ものづくり科学	1ALL ものづくり科学	1ALL ものづくり科学	1ALL ものづくり科学
	2				
	3	1F3 コンピュータ科学入門		2EI 情報基礎演習	3E 情報処理Ⅱ
	4				
	5				
	6	4C 物質工学実験Ⅲ		2C プログラミング 基礎	4B 環境都市工学実験実 習Ⅲ
	7				
	8				
火	1	4EI 電子情報工学実験Ⅲ	2M 機械工作実習	4C 情報化学	
	2				3B 環境都市工学実験実 習Ⅱ
	3				
	4				
	5	1F5 コンピュータ科学入門		1F1 コンピュータ科学 入門	4B 環境都市工学設計製 図Ⅰ
	6				
	7	4C 物質工学実験Ⅲ		1F2 コンピュータ科学 入門	
	8				
水	1	5C 設計製図	5M 機械工学実験 Ⅱ	2EI 電子情報工学 実験Ⅰ	5B 環境保全工学
	2				
	3	4E 情報処理システム論Ⅱ			3B 環境都市工学設計製 図Ⅱ
	4				
	5	5EI 計算機シミュ レーション		2E 情報処理Ⅰ	5B 構造デザイン
	6	4EI 電子回路Ⅱ			
	7	2PS/ES 経営工学			
	8				
木	1	5E 電気電子設計	3EI 電子情報工学 実験Ⅱ	5B 数値解析	
	2				
	3	4EI 情報構造論			5B 環境都市工学設計製 図Ⅱ
	4				
	5			2M C言語基礎	4B コンクリート構造学Ⅰ
	6	1F4 コンピュータ科学入門		4E 制御工学Ⅰ	
	7				
	8				
金	1	4EI ソフトウェア工学	2EI プログラミング 基礎	3M 機械設計製図Ⅰ	
	2				
	3	5C 品質管理			
	4				
	5				
	6				
	7				
	8				

表3 時間外利用状況（平成23年1月～12月）

月	人数(人)	利用日数	利用時間(各演習室の合計)
1	196人	15日	66時間00分
2	140人	12日	59時間00分
3	19人	8日	38時間00分
4	27人	6日	15時間00分
5	369人	21日	95時間30分
6	223人	22日	89時間00分
7	235人	19日	99時間00分
8	94人	5日	37時間00分
9	8人	2日	7時間30分
10	223人	18日	84時間20分
11	372人	20日	107時間30分
12	277人	17日	94時間00分
合計	2183人	165日	791時間50分
月平均	182人	14日	66時間00分

表4 その他の利用状況

利用日	利用内容	利用者
4／12	授業支援ソフト講習会	総合情報処理センター
6／12	鰐江市防災リーダー養成講座	環境都市工学科
6／26	CAD 利用技術者試験	環境都市工学科
7／3	公開講座	環境都市工学科
7／24	公開講座	教育研究支援センター
10／9	鰐江市防災リーダー養成講座	環境都市工学科
10／15	キャンパスリサーチ	機械工学科
10／27	web 調達システム操作説明会	総務課契約係
12／2	JDream II 講習会	学生課情報サービス係

X II. 地域連携テクノセンター

1. 基本方針

本校の位置する丹南地域は眼鏡枠製造をはじめ、繊維・染色産業や電子・機械・化学工業が盛んであり、加えて、越前和紙、越前打刃物、越前漆器や越前焼の伝統産業を有することから、依然として福井県の経済を支える重要な拠点となっている。

地域連携テクノセンターは、本校の使命である『教育・研究・地域貢献』の対外的な窓口であり、丹南地域のみならず県内全域にわたってより良いサービスを提供するために、以下の事業を展開している。

(1) 共同研究、受託研究の受け入れ

地域連携テクノセンターは「地域・文化」、「環境・生態」、「エネルギー」、「安全・防災」、「情報・通信」、「素材・加工」および「計測・制御」の7つの研究部門から構成されている。平成22年度には県内企業を中心に12件の共同研究の申込みと2件の受託研究の申込みがあり、基礎調査・試験から製品開発にいたる広い範囲で地元産業界と歩みをともにしている。また、各研究部門では共同研究、受託研究の前段階にも当たる技術相談に隨時応じており、昨年度も依頼の大部分について難題の本質を見極め、解決の糸口を助言した。

研究の円滑な遂行を助成するために、地域連携テクノセンター内の8つの実験室には誘導結合形高周波プラズマ発光分光分析装置、X線光電子分光装置、超高分解能電子顕微鏡システム、走査型プローブ顕微鏡、超高分解能電界放出形走査電子顕微鏡、試料水平型多目的X線回折装置、超伝導核磁気共鳴装置などを設置している。これらの装置、試験機は企業単独の基礎研究、応用研究や品質管理にも活用されている。

さらに、地域社会との密接な関係を保持し、実益を共有または還元する目的で、2階には「伝統産業支援室」と「地場産業支援室」とを配している。

(2) シーズの公開、各種コンテストの主催・共催

地域連携テクノセンターの活動紹介誌『J O I N T』に教員や技術職員のシーズを掲載、広く外部に配本して本校の有する人的財産、資源の情報を発信している。これらのシーズは毎年更新して、ニーズとの整合性を図るべく鋭意努力している。また、専攻科委員会との協同のもと北陸技術交流テクノフェアでは専攻科2学年によるシーズ発表を継続している。

地域連携テクノセンターが主催する「マグネットコンテスト」、「さばえめがねワク waku コンテスト」には毎回多数の作品が寄せられ、児童、生徒や学生の理科離れ対策の一つとして、独創的な思考力の涵養の一環として役立っている。そのほか、平

成22年度以降「ふくい防災マップコンテスト」が主催事業に、「越前市中学生ロボットコンテスト」や「歯みがきロボットコンテスト」が共催事業に加わっている。

上記以外にも全国高専テクノフォーラムや丹南産業フェアなどに出展して、地域連携テクノセンターの活動内容およびその成果を公表している。

（3）起業家の育成と事業創出の支援

福井県内での起業意欲を高揚し、伝統産業や地場産業の活性化に寄与する目的で、地域連携テクノセンターの3階には「アントレプレナーサポートセンター」を置いている。ここは、地域の産業活性化プランと連携しながら起業のための基礎知識や活動方針を研鑽する施設であり、修了後は地元の行政機関が準備する支援施策に則って事業に着手することになる。

対象者は数年後に起業を志す、もしくは、自らのアイデアを事業に結び付けたいと考える地域の技術者および本校の学生であり、オフィススペースを半年契約で最長1年間提供している。

これら(1)、(2)、(3)に加えて、地域連携テクノセンターでは「JOINT フォーラム」の開催や「丹南地区における緊急連絡システム」の運用などを通じて、最近の研究事例・技術開発への取り組みを紹介するとともに地域社会の安寧に貢献するべく尽力している。また、平成23年9月からは昨年度に引き続き高専機構運営費交付金対象事業である「企業技術者等活用プログラム」として“ICTと地域とを融合させる共同教育の展開”を、特命准教授3名を任用して専科棟マルチメディア室(3D、VR分野)および電子情報工学科棟創成教育ラボ(ICT分野)において平成24年2月まで実施した。

2. 活動状況（平成23年度）

	事業
5月	地域連携テクノセンター活動紹介誌『JOINT 2011』の発行
6月	平成23年度 福井高専地域連携アカデミア総会の開催 鯖江防災リーダー養成講座〔主催事業の一環〕
7月	公開講座「防災マップ作成講座」〔主催事業に関連〕 「越前市ロボットコンテストに係る製作講習会・第1回」〔共催事業の一環〕
8月	第9回全国高専テクノフォーラム（東京都で開催）に参加、出展 第5回きのくに学生ロボットコンテスト・小学生部門（支援事業）講習会および予選会の開催 夏休み工作教室（共催）の開催 「越前市ロボットコンテストに係る製作講習会・第2回」〔共催事業の一環〕
9月	平成23年度 企業技術者等活用プログラム『ICTと地域とを融合させる共同教育の展開』の実施〔平成24年2月末まで〕 丹南産業フェア2011に参加、出展 第5回歯みがきロボットコンテスト（共催）および表彰式に参加 第8回さばえめがねワクwakuコンテスト（主催）作品募集〔～9月30日〕 第17回マグネットコンテスト（主催）作品募集〔～9月30日〕
10月	越前市中学生ロボットコンテスト2011（共催）および表彰式に参加 鯖江防災リーダー養成講座〔主催事業の一環〕 地域連携アカデミア会員企業との技術マッチング事業の実施〔平成24年度まで〕 北陸技術交流テクノフェア2011に参加（専攻科2学年によるシーズ発表）
11月	第3回ふくい防災マップコンテスト（主催）最終審査会および表彰式の開催 第8回さばえめがねワクwakuコンテスト（主催）最終審査会の開催
12月	JOINTフォーラム2011（シーズ発表会および異業種交流会）の開催 第17回マグネットコンテスト（主催）最終審査会の開催 第5回きのくに学生ロボットコンテスト・小学生部門（支援事業）に参加
1月	第8回さばえめがねワクwakuコンテスト（主催）表彰式の開催
2月	第17回マグネットコンテスト（主催）表彰式の開催

X III. 教育研究支援センター

1. 基本方針

本センターは、本校において教育研究支援に携わる技術職員の業務を組織的かつ効率的に行うとともに、その専門性を確保し、その職務の遂行に必要な能力および資質の向上を図り、本校における教育研究支援を円滑に実施することを目標として運営されている。

2. 活動状況

(1) 教育支援

各学科の実験・演習、卒業研究および一般物理・一般化学・工学基礎物理の実験に対して支援を行なった。

(2) 研究への支援

本校の共同研究・科研費研究に参画し、研究活動の活性化のために寄与している。センター員は自ら、科学研究費補助金(奨励研究)の申請に積極的に取り組んでおり、申請に向けて平成22年10月13日に勉強会を開いた。平成22年度は4名が応募し、採択されなかったものの2名がAランク評価を受けた。平成23年度は4名のセンター職員が応募した。

(3) 地域貢献への支援

各学科等の依頼を受けた公開講座、出前授業の支援に加え、7月24日に、支援センターが主体となって公開講座を開催した。(資料中の出前授業一覧、公開講座実施一覧参照)地域連携テクノセンターの事業に協力し、シーズ集への投稿、今立和紙共同組合の依頼を受けての水質測定を行った。

(4) 本校運営への支援

第一班は、全国高専ロボットコンテスト参加チームへの支援を行った。

第二班は、事務情報化推進室の依頼を受け、校内の情報化業務に対する支援を行った。

第三班は、職場の安全衛生確保のため作業環境測定士資格に基づく実験室等の作業環境測定を行ったほか、全国高専デザインコンテストへの支援を行った。

5月のキャンパスウォーク、8月に行なわれたキャンパスツアーリポートに対して支援を行った。

（5）見えるセンター活動

活動報告書の発行、技術発表会の開催、公開講座の開催、ホームページでの情報発信を通じてセンター活動の状況が見えるように努めている。

（6）ポテンシャルアップ

各種研修事業への参加、職務に関連した成果の外部発表、本校運営に必要な資格取得を奨励しセンター職員のポテンシャルアップを図っている。23年度よりセンター員から業務改善目標を提案し、達成状況を半期毎に自己評価し、期末にセンター長と面談する取り組みを開始した。

XIV. 評価体制

1. 本校の評価体制

本校では学校内部の自己点検・評価委員会規則に則り、教育活動の評価及び評価結果を改善策に結びつけるシステムがある。教員の教育活動に関する定期的な評価を適切に実施するために、本校では2つの体制を軸に整備している。一つは学生による教育（授業）評価、もう一つは教員本人による教育（授業）自己評価である。前者は教育活動、特に授業の改善は早くから個々の教員レベルで実施されてきたが、平成14年度から全ての授業を対象に校内に設置した「創造教育開発センター」がアンケートを実施し、その結果を各教員に提示し、コメントを求め、今後の課題を記述した報告書を作成し、公表している。後者は各教員に他教員の教育、研究などの状況を記入、提示させ、得点化、校内ランキングを作成して公表し、フィードバックしている。

授業評価アンケートの結果の冊子及び教員の教育活動自己評価の結果をもとに、経年的な推移から教育レベルの向上を図っている。主な企画として、公開授業を実施し、同僚教員を中心とした専門家による評価を受け、質の向上を図っている。システムに参加する教員は、専門及び教科教育法の立場から多面的な評価ができるよう配置され、教員のFD活動としても重要である。平成22年度からは前期中間試験後に、1週間の公開授業週間を設け積極的に公開授業への参加を促すとともに、随時公開授業を行い、年間7名以上の教員が公開授業を実施し、同僚教員が評価し、授業の進め方や改善に関する意見交換を活発に行っている。その結果は報告書の形で評価教員及び委員会へ提出し、最終的に次時期授業アンケートの結果を受け改善の程度を検討している。以上の創造的教育研究センターを中心としたシステムの在り方、さらに全校的な観点から教育システム評価委員会においても検討される。これらの結果は、各教員のその後の教育に確実に反映することが必要であり、それ以後の評価で再び結果が問われることとなる。これらのことにより、本校の授業は格段に学生にとって理解されやすいものとなった。

2. 外部評価の受審

平成16年度（2004年度）に、本校本科4、5年と専攻科の教育プログラム（環境生産システム工学）が日本技術者教育認定機構（JABEE）により認定された。認定の有効期間は原則6年であることから、平成21年度に継続審査を受審して認定継続が認められたが、指摘事項もあり、今年度専攻科入学生からは同事項を改善した教育プログラムを開催している。これを受け、平成24年度には中間審査の受審を予定している。

また、平成17年度には大学評価・学位授与機構による高等専門学校機関別認証評価を受審し、改善事項がない認定を受けた。ただし、同認証評価は7年以内ごとに受審することが義務づけられており、平成24年度に受審する予定である。

3. 外部有識者会議による外部評価

本校の外部評価は外部有識者会議、JABEE の受審、機関別認証評価の受審などがあるが、外部有識者会議には福井県内、技術科学大学の大学関係者、地元の中学校関係者、福井県、地元の産業界、報道関係、商工会議所関係者を招聘し、毎年 1 回の外部評価を行っている。

以下には、平成 22 年度の外部有識者会議における各委員の講評を記す。

(平成 22 年度「外部有識者会議」講評 平成 23 年 3 月 8 日開催)

[新原委員] 長岡技術科学大学 学長

概要説明を聞いて、全体的に大変素晴らしいと思いましたが、二点お願いがあります。

一点目は外部資金の獲得でございます。現在の経済情勢からは厳しいと思いますが、減少傾向にある外部資金の獲得は、教育・研究の向上、活性化につながるものであり、外部評価の重要な指標の一つとなるため、さらに努力していただきたい。

二点目ですが、寮に関する良い面の活用であります。私自身も高校から大学まで寮生活を 10 年ほど経験しましたが、寮には文系から理系までいろいろな人がいて、人間関係など多くのことを学びました。現在の寮は個室化が進み、私のような経験出来なくなってきたていると思うため、上級生が下級生を教える環境、留学生と日本人が交流する環境など、寮でしか出来ない教育と生活について再度考えて頂きたい。

[岸松委員] 鮎江市小中学校校長会 会長

私は新原委員とは観点が少し違いますが、福井高専は担任制がとられ、寮では寮監の先生が面倒をみててくれており、学生にとっては至れり尽くせりの環境で素晴らしいと思いますが、その一方で、そこまで必要なのかという気持ちもあります。その辺のバランスも難しいと思いますが、入学したからには卒業までいる学校であって欲しいと一番に願っています。そういう意味からも、地域から見守られ愛される学校、関心を持たれる学校にしていく努力をお願いします。

[野村委員] 鮎江商工会議所 会頭

私は、福井高専は素晴らしい学校だと思っていますが、ものづくり教育を通して起業家精神をぜひ養成していただきたいことと、優れた地元の企業を知ってもらうため、福井高専の学生に地元の産業フェアに積極的に参加するようご指導願いたい。

[美濃輪委員] 信越化学工業（株）磁性材料研究所 所長

これからの中堅企業は中小企業も含め海外に出て行くことが益々多くなることが考えられるため、福井高専の中に世界を呼び込むというか、ここに来れば世界を感じるような仕組みを検討していただきたい。例えば、英語力を付けるために、留学生をもっと増やす、あるいは、外国人教員を採用しコミュニケーション能力を向上させるというような試みである。

[山下委員] (株)福井新聞社 論説主幹

工業や技術そのものにはあまり関係のない教養的な部分、英語であれ日本語であれ人と接する上でのコミュニケーション能力やデザインマインドを磨くことにも留意して欲しい。

[小倉議長] 福井大学 工学部長・工学研究科長

全体的な印象としては大変よく取り組んでいると思いますが、一方でここまでしなければならないのかという気もします。英語力・コミュニケーション能力の向上、外部資金の獲得、創造性の育成等々について各委員からコメントがありましたが、学校側として考える課題や問題点を意識して整理していく、高専が益々発展していくためには、課題をもう少し明確にした上で方向性を出していくことが必要ではないかと思います。

※ 福井県工業技術センター所長 宮崎委員におかれましては、所用により欠席されました。

4. JABEEへの取り組み

日本技術者教育認定制度とは、大学などの高等教育機関で実施されている技術者教育プログラムが、社会の要求水準を満たしているかどうかを外部機関が公平に評価し、要求水準を満たしている教育プログラムを認定する専門認定(Professional Accreditation)制度であり、日本では、非政府団体である日本技術者教育認定機構(JABEE:Japan Accreditation Board for Engineering Education/設立1999年11月19日)が、技術系学協会と密接に連携しながら技術者教育プログラムの審査・認定を行っている。JABEEは、技術者教育の質的同等性を、国境を越えて相互に承認し合う国際的な協定「ワシントンコード」に正式加盟しているため、JABEE認定教育プログラムの修了生は国際的に認められることになる。また、国内では技術士一次試験が免除され修習技術者となり、最短でプログラム修了後4年で技術士二次試験を受験できる。

本校では、本科5学科の4、5年と専攻科2専攻の教育課程を複合した「環境生産システム工学」を定義して、工学（融合複合・新領域）関連分野で認定審査を受審し認定され、2004年度専攻科修了生から認定プログラム修了生を社会に送り出している。認定には有効期間があるため、その都度受審（2006年に中間審査、2009年に継続審査）

し、認定を継続させている。「環境生産システム工学」の特徴は、「ものづくり・環境づくり」能力の習得を掲げているところにある。この意味するところは、異なる技術分野の知識を積極的に吸収し、ものの使い方や使われ方が社会や自然環境に及ぼす影響にも考慮して、構造物や製品をデザインでき、多様化した社会に対応できる実践的な技術者を育成することである。

認定プログラムは、社会の要求や学生の要望を取り入れて、継続的に教育改善がなされなければならない。「環境生産システム工学」プログラムも、認定当初は5つの大項目と35個の小項目からなる学習・教育目標を掲げていたが、継続審査を受審するときに小項目を32個にし、今年度からは、大項目の文言を修正するとともに小項目を20個にしてわかりやすくし、プログラム関係者（本校教職員、学生）や社会に対して、本プログラムの目指すところを周知しやすくしている。改定後の学習・教育目標は自己点検書Ⅲ専攻科において示してある。学習・教育目標の改定を行ったことにより、それらの達成度評価方法にも改定を加え、シラバスに掲載している。

平成24年度に中間審査を受審することになっており、認定を継続していくことはもちろん、社会の変化に対応した教育改善を常に行っていける教育システムの構築を継続的に行っていく所存である。

XV. 資 料 一 覧

科学研究費補助金採択一覧

【 上段 : 件数、下段 : 金額(千円) 】

区分	20年度		21年度		22年度		23年度	
	直接費	間接費	直接費	間接費	直接費	間接費	直接費	間接費
特定領域研究	0		0		0		0	
	0		0		0		0	
新学術領域研究							1	
							3,200	960
特別研究推進費	0		0		0		0	
	0		0		0		0	
基盤研究 (A)	0		0		0		0	
	0		0		0		0	
基盤研究 (B)	1		1		1		0	
	6,300	1,890	2,700	810	1,600	480	0	0
基盤研究 (C)	7		6		3		2	
	7,400	2,220	6,000	1,800	4,200	1,260	2,000	600
挑戦的萌芽研究	0		0		0		1	
	0		0		0		1,200	360
若手研究 (A)	0		0		0		0	
	0		0		0		0	
若手研究 (B)	1		1		1		0	
	500	150	1,200	360	900	270	0	0
計	9		8		5		4	
	14,200	4,260	9,900	2,970	6,700	2,010	6,400	1,920
	18,460		12,870		8,710		8,320	

科学研究費補助金採択一覧

年 度	研究科目	所 属	職 名	氏 名	申 請 額 (直接費/間接費)	研 究 課 題	
						研 究 課 題	
平 成 20 年 度	基盤研究(B)	機械工学科	教授	安丸尚樹	6,300	1,890	フェムト秒レーザー援用ナノ構造硬質薄膜による次世代表面設計技術の開発研究
	基盤研究(C)	一般科目	教授	長水壽寛	600	180	新たな数学教育を推進するためのかきごんおよび評価による実証的な研究
	機械工学科	教授	加藤寛敬	900	270	摩擦を利用したナノ結晶微細構造表面膜の創製とそのトイド粉がロジーティ性評価	
	環境都市工学科	教授	山田幹雄	700	210	浚渫土および砕石膏ボード粉を活用した袋詰め固化物の剛性評価と構築路床への適用策	
	環境都市工学科	准教授	吉田雅穂	1,100	330	カーボンストックを目的とした丸太打設による地盤の液状化対策技術の開発	
	一般科目	教授	坪川武弘	1,300	390	気候変動の数理モデルを題材とした数学教材の調査と開発	
	環境都市工学科	准教授	辻子裕二	2,500	750	豊かな保水性のもとに植生の自然治癒力を最大限に活かす表層崩壊斜面の安定処理策	
	一般科目	准教授	北浦 守	300	90	二価マンガンイオンを用いた希土類螢光体代替材料の量子材料設計	
	若手研究(B)	一般科目	講師	森 芳周	500	150	胚、胎児に関する倫理的議論の再構築－人格か否かという議論を超えて－
合 計				9件	14,200	4,260	
合 計					18,460		
平 成 21 年 度	研究科目	所 属	職 名	氏 名	申 請 額 (直接費/間接費)	研 究 課 題	
						研 究 課 題	
	基盤研究(B)	機械工学科	教授	安丸尚樹	2,700	810	フェムト秒レーザー援用ナノ構造硬質薄膜による次世代表面設計技術の開発研究
	基盤研究(C)	一般科目	教授	長水壽寛	600	180	新たな数学教育を推進するためのかきごんおよび評価による実証的な研究
	機械工学科	教授	加藤寛敬	800	240	摩擦を利用したナノ結晶微細構造表面膜の創製とそのトイド粉がロジーティ性評価	
	環境都市工学科	教授	山田幹雄	500	150	浚渫土および砕石膏ボード粉を活用した袋詰め固化物の剛性評価と構築路床への適用策	
	一般科目	教授	坪川武弘	900	270	気候変動の数理モデルを題材とした数学教材の調査と開発	
	環境都市工学科	准教授	辻子裕二	700	210	豊かな保水性のもとに植生の自然治癒力を最大限に活かす表層崩壊斜面の安定処理策	
	一般科目	准教授	北浦 守	2,500	750	二価マンガンイオンを用いた希土類螢光体代替材料の量子材料設計	
合 計				8件	9,900	2,970	学生実験指導における効果的な動画教材作成と評価の研究
合 計						12,870	

研究科目	所 属	職名	氏 名	申請額 (直接費/間接費)	研 究 課 題	
					題	
基盤研究(B)	機械工学科	教授	安丸尚樹	1,600	480	フェムト秒レーザー援用ナノ構造硬質薄膜による次世代表面設計技術の開発研究
基盤研究(C)	一般科目	教授	坪川武弘	900	270	気候変動の数理モデルを題材とした数学教材の調査と開発
	機械工学科	教授	加藤寛敬	1,700	510	摩擦表層のトライボメタラーとその応用
	環境都市工学科	准教授	吉田雅穂	1,600	480	温暖化対策と林業活性化に貢献する間伐材を用いた地盤補強技術の開発
若手研究(B)	電子情報工学科	助教	奥田篤士	900	270	学生実験指導における効果的な動画教材作成と評価の研究
合 計		5件		6,700	2,010	
				8,710		
研究科目	所 属	職名	氏 名	申請額 (直接費/間接費)	研 究 課 題	
新学術領域研究	機械工学科	教授	加藤寛敬	3,200	バルクナノメタルの特異なトライボロジー特性の解明	
基盤研究(C)	機械工学科	教授	加藤寛敬	800	摩擦表層のトライボメタラーとその応用	
	環境都市工学科	教授	吉田雅穂	1,200	温暖化対策と林業活性化に貢献する間伐材を用いた地盤補強技術の開発	
挑戦的萌芽研究	電気電子工学科	教授	川本 昴	1,200	学生実験指導における効果的な動画教材作成と評価の研究	
合 計		4件		6,400	1,920	
				8,320		

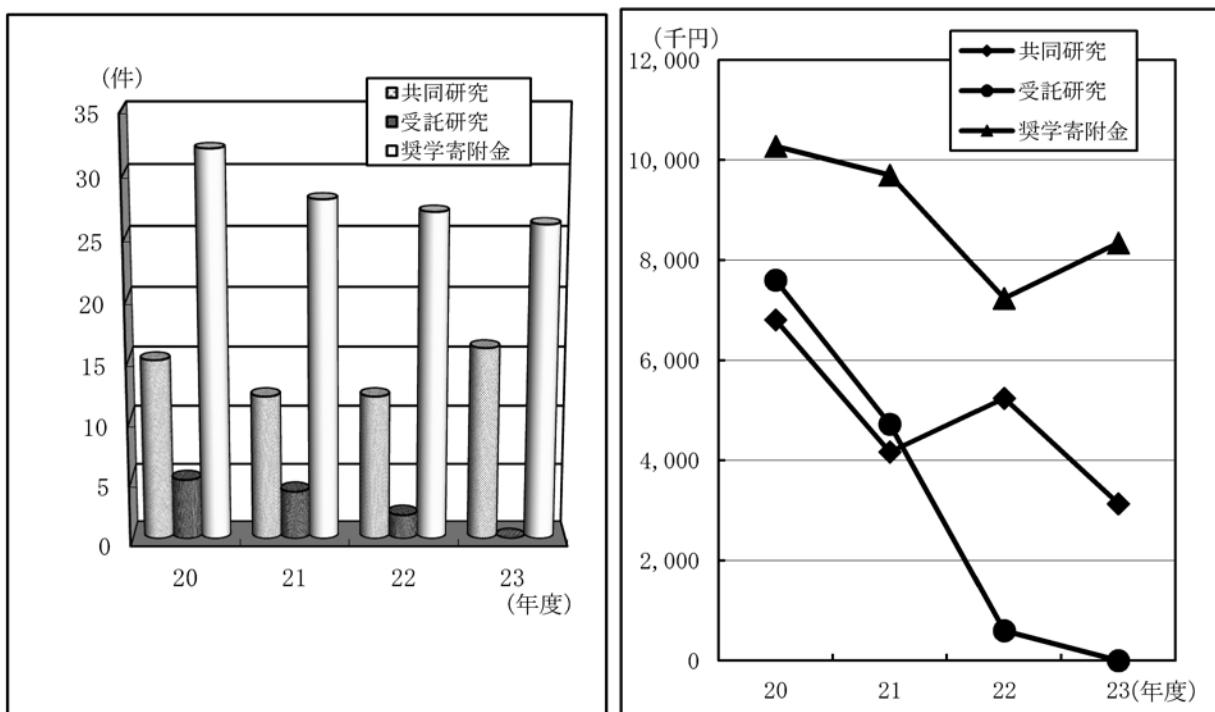
外部資金受入一覧

【単位：件、千円】

区分	20年度		21年度		22年度		23年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
共同研究	15	6,812	12	4,170	12	5,243	16	3,134
受託研究	5	7,602	4	4,725	2	600	0	0
奨学寄附金	32	10,276	28	9,700	27	7,239	26	8,343
計	52	24,690	44	18,595	41	13,082	42	11,477

※平成23年12月31日現在

☆平成23年度の共同研究には準共同研究（研究費が0円であるため共同研究とはみなさないが共同研究に準じて契約を取り交わしたもの）を含む



民間等との共同研究受入一覧

年度	研究題目	申請企業	研究担当教員	研究期間	受入額(円)
	ナノカーボンを用いた水素センサーの開発	日東シンコー株式会社	電気電子工学科 教授 川本 昴	平成19.7.26～平成20.9.30	800,000
	木タールを添加した再生アスファルト舗装材の研究開発	(財)福井県建設技術公社	環境都市工学科 教授 武井幸久 物質工学科 教授 小泉貞之	平成20.4.17～平成21.3.19	1,000,000
	タッチペネルセンサの高機能化	東芝電子エンジニアリング㈱	電気電子工学科 教授 原田望	平成20.5.1～平成20.9.30	300,000
	交流電圧検出回路の研究	株式会社 カワチュウ	電気電子工学科 教授 原田望	平成20.6.3～平成21.3.31	250,000
	機能面及びデザイントレンドを考慮したメガネ等のデザイン開発	鮪江商工会議所	地域連携テクノセンター長 加藤省三	平成20.7.1～平成21.3.28	700,000
	有機リン加水分解酵素表層発現酵母を用いた有機リン農薬検査法の開発	(財)若狭湾エネルギー研究センター	物質工学科 准教授 高山勝己	平成20.7.4～平成21.2.28	1,387,850
	(Ba, Sr)Al2O4:Eu,Dy系高輝度夜光塗料顔料の開発	長岡技術科学大学	一般科目教室 准教授 北浦守	平成20.7.25～平成21.3.31	250,000
	最先端ICT活用PBL型教育による高専・大学統合教育の質向上に関する研究	長岡技術科学大学	電子情報工学科 助教 奥田篤士	平成20.7.25～平成21.3.31	100,000
	加工を利用した構造用金属材料の組織と力学特性の制御	豊橋技術科学大学	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成20.8.1～平成21.2.28	270,000
	コロイド滴定法を用いた生物由来産業廃棄物の表面電荷評価と新たな環境浄化剤の創製	豊橋技術科学大学	物質工学科 教授 小泉貞之	平成20.8.1～平成21.2.28	360,000
	スマートマイクロチップデバイスを用いた医療・生物・農業検査チップの研究	豊橋技術科学大学	物質工学科 准教授 高山勝己	平成20.8.1～平成21.2.28	270,000
	分子動力学計算による生体高分子の機能解析	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々木洋	平成20.8.1～平成21.2.28	450,000
	森林の影響を考慮した自然斜面崩壊の力学的メカニズムに関する基礎的研究	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 准教授 辻子裕二	平成20.8.1～平成21.2.28	270,000
	衛星画像を用いた地震による道路被害早期把握に関する研究	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 講師 辻野和彦	平成20.8.1～平成21.2.28	270,000
	技術者教育としての課外活動の可能性の提示と教育メソッドの開発	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 助教 江本晃美	平成20.8.1～平成21.2.28	135,000
	計	15件			6,812,850

年度	研究題目	申請企業	研究担当教員	研究期間	受入額(円)
21年度	木タールを添加した再生アスファルト舗装材の研究開発	(財)福井県建設技術公社	環境都市工学科 教授 武井幸久 物質工学科 教授 小泉貞之	平成21.5.20～平成22.3.26	1,000,000
	機能面及びデザイントレンドを考えたメガネ等のデザイナー開発	鯖江商工会議所	地域連携テクノセンター長 山田幹雄	平成21.7.1～平成22.2.28	700,000
	メタバースを利用した高専・大学統合型協調プロジェクトベース学習手法の研究	長岡技術科学大学	電子情報工学科 助教 奥田篤己	平成21.7.24～平成22.3.31	100,000
	有害残留農薬分解除去システムの基盤構築	長岡技術科学大学	物質工学科 准教授 高山勝己	平成21.8.3～平成22.2.28	280,000
	超強加工した金属材料の力学特性・磨耗特性の解明	豊橋技術科学大学	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成21.8.3～平成22.2.28	270,000
	イノベーション医療・生物・農薬検査センサデバイスとの応用研究	豊橋技術科学大学	物質工学科 准教授 高山勝己	平成21.8.3～平成22.2.28	270,000
	セラミック蛍光体を添加したLED封止用樹脂の開発	豊橋技術科学大学	一般科目教室 准教授 北浦守	平成21.8.3～平成22.2.28	270,000
	機能性バイオ・ナノ材料の分子シミュレーション解析	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々和洋	平成21.8.3～平成22.2.28	270,000
	技術者教育としての「課外活動の可能性の提示と「人間力」養成メソッド」の開発	豊橋技術科学大学	環境年工学科 助教 江本晃美	平成21.8.3～平成22.2.28	200,000
	衛星画像を用いた地震による道路被害早期把握に関する研究	豊橋技術科学大学	環境年工学科 講師 江野和彦	平成21.8.3～平成22.2.28	270,000
22年度	森林の影響を考慮した自然斜面崩壊の力学的メカニズムに関する基礎的研究	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 准教授 江子裕二	平成21.8.3～平成22.2.28	270,000
	コロイド滴定法を用いた生物由来産業廃棄物の表面電荷評価と新たな環境浄化剤の創製	豊橋技術科学大学	物質工学科 教授 小泉貞之	平成21.8.3～平成22.2.28	270,000
	計	12件			4,170,000

年度	研究題目	申請企業	研究担当教員	研究期間	受入額(円)	
22年度	河川等の水位表示方法と表示装置及び構築用プロックの開発	丸高コンクリート工業(株)	電気電子工学科 準教授 電子情報工学科 助教 環境都市工学科 準教授 環境都市工学科 助教 環境都市工学科 準教授 物質工学科 教授	米田知晃 奥田篤士 辻野和彦 田安正茂	平成22.5.1～平成23.3.31	700,000
	木タールを添加した再生アスファルト舗装材の研究開発	(財)福井県建設技術公社	環境都市工学科 教授 物質工学科 教授	武井幸久 小泉貞之	平成22.5.11～平成23.3.25	1,000,000
	高効率燃料の開発	(株)ウイングシステム	物質工学科 教授 機械工学科 教授	小泉貞之 藤田克志	平成22.5.17～平成23.3.31	500,000
	有用なセルラーゼ生成トリコデルマ菌の探索と有効利用に関する調査研究	関西電力(株)研究開発室 エネルギー利用技術研究所	物質工学科 教授	吉村忠興志	平成22.5.20～平成23.3.31	369,600
	機能面及びデザイン技術者育成を目指した教育手法と教材の開発	鯖江商工会議所	地域連携テクノセンター センター長 山田幹雄		平成22.5.21～平成23.2.28	700,000
	シミュレーション技術者育成を目指した教育手法と教材の開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 教授	吉村忠興志	平成22.7.1～平成23.3.15	100,000
	強ひずみ加工により作製したサブミクロン結晶粒バルク純Feの摩耗特性	豊橋技術科学大学	機械工学科 教授 加藤寛敬		平成22.7.1～平成23.3.15	250,000
	機能性バイオ・ナノ材料の分子シミュレーション解析	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々和洋		平成22.7.1～平成23.3.15	200,000
	有機塩素系農薬に対する分解菌の探索と同定	長岡技術科学大学	物質工学科 準教授 高山勝己		平成22.7.23～平成23.3.31	300,000
	砂浜海岸に流出する小規模河川の河口閉塞に関する共同研究	長岡技術科学大学	環境都市工学科 助教 田安正茂		平成22.7.23～平成23.3.31	250,000
109	電界とハイブリッド光源による植物の発芽・成長制御システムの開発	埴エンジニアリング(株)	電気電子工学科 教授 川本 昇		平成22.10.15～平成23.3.31	273,000
	ナノカーボンを用いたペーストレス脳波電極の開発	長岡技術科学大学	電気電子工学科 教授 川本 昇		平成23.1.19～平成23.3.31	600,000
	計	12件				5,242,600

年度	研究題目	申請企業	研究担当教員	研究期間	受入金額
23年度	機能面及びデザイントレンドを考えたメガネ等のデザイン開発	鯖江商工会議所	地域連携テクノセンター センター長 山田幹雄	平成23.5.24～平成24.2.29	650,000
	有用なセルラーゼ生成トリコデルマ菌の探索と有効利用に関する調査研究	関西電力(株)研究開発室 エネルギー利用技術研究所	物質工学科 教授 吉村忠與志	平成23.6.21～平成24.3.30	404,250
	ウッドビッチを有効活用する舗装材の研究開発	(財)福井県建設技術公社	環境都市工学科 教授 武井幸久	平成23.7.1～平成24.3.23	1,000,000
	河川等の水位表示方法と表示装置及び構築用プロックの開發	丸高コンクリート工業(株)	電気電子工学科 准教授 米田知晃 電子情報工学科 助教 奥田篤士 環境都市工学科 准教授 辻野和彦 環境都市工学科 助教 田安正茂	平成23.7.16～平成24.3.31	300,000
	高密度格子欠陥を有するサブミクロン結晶粒パルク金属性のトライポロジー特性	豊橋技術科学大学	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成23.7.11～平成24.3.15	50,000
	シミュレーション技術者育成を目指した教育手法と教材の開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 教授 吉村忠與志 物質工学科 助教 佐々和洋	平成23.7.11～平成24.3.15	150,000
	マルチモーダルセンサによる極限センシングシステム開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 准教授 高山勝己	平成23.7.11～平成24.3.15	130,000
	大規模系バイオ・ナノ・メタマテリアルの高精度ハイブリッド・シミュレーション研究	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々和洋	平成23.7.11～平成24.3.15	150,000
	カーボンナノチューブ分散ゴムを用いた脳波電極の開発	長岡技術科学大学	電気電子工学科 教授 川本 昇	平成23.7.22～平成24.3.15	300,000
	摩擦を利用したナノ結晶微細構造表面膜の創製と評価	(財)若狭湾エネルギー研究センター	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成22.6.1～平成24.3.31	0
24年度	高専・技科大の連続性を考慮した複合領域標準化キスピットの作成－空間情報学を事例に－	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 環境都市工学科 准教授 辻子裕二 准教授 辻野和彦	平成23.7.11～平成24.3.15	0
	急増する広域災害に対する植生効果を考慮した対策技術の確立	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 准教授 辻子裕二	平成23.7.11～平成24.3.15	0
	「人間力」養成プロジェクト～課外活動など～	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 助教 江本晃美	平成23.7.11～平成24.3.15	0
	「エジットプロセスによるシリコンインターによる形状形成技術の開発	(財)若狭湾エネルギー研究センター	物質工学科 教授 常光幸美	平成23.9.1～平成25.3.31	0
	蛋白質表層発現酵母に供するプラスミドDNAの構築	(財)若狭湾エネルギー研究センター	物質工学科 准教授 高山勝己	平成23.11.1～平成24.3.31	0
25年度	「エットプロセスによるシリコンインターによる形状形成技術に関する基礎研究	(財)産業総合研究所	物質工学科 教授 常光幸美	平成23.11.1～平成24.10.31	0
		16件			3,134,250

受託研究受入一覧

年度	研究題目	委託者	研究担当教員	研究期間	受入額(円)
20年度 和紙事業所における安価な排水処理システム開発に関する研究 持続可能な地域総合防除のための鳥獣害対策支援GISの開発 工場排水中の微量重金属検出－回収ハイブリッド技術の開発	子供向けプログラミング教材の評価と検証	株式会社 Jig.jp	電子情報工学科 教授 薩田 昇	平成20.4.1～平成21.3.31	260,000
	オンラインプログラミングコンテストの評価と検証	株式会社 Jig.jp	電子情報工学科 講師 西 仁司	平成20.4.1～平成21.3.31	260,000
	和紙事業所における安価な排水処理システム開発に関する研究	越前市	環境都市工学科 准教授 奥村充司	平成20.5.1～平成21.3.31	200,000
	持続可能な地域総合防除のための鳥獣害対策支援GISの開発	独立行政法人科学技術振興機構 産学連携事業本部	環境都市工学科 講師 江野和彦	平成20.7.10～平成21.3.31	4,882,000
	工場排水中の微量重金属検出－回収ハイブリッド技術の開発	独立行政法人科学技術振興機構 JSTイバッショナルズイバッショナルズ	物質工学科 准教授 松井栄樹	平成20.8.8～平成21.3.31	2,000,000
	合計	5件			7,602,000
	和紙事業所における安価な排水処理システム開発に関する研究	越前市	環境都市工学科 准教授 奥村充司	平成21.4.15～平成22.3.31	200,000
	カーボンナノチュープを用いた脳波電極の開発	独立行政法人科学技術振興機構 JSTイバッショナルズイバッショナルズ	電気電子工学科 教授 川本 昇	平成21.8.22～平成22.3.31	2,000,000
	有機色素クラスター形成による高効率金属検出－凝集技術の開発	独立行政法人科学技術振興機構 JSTイバッショナルズイバッショナルズ	物質工学科 准教授 松井栄樹	平成21.8.22～平成22.3.31	2,000,000
	越前岬水仙ランド再整備構想策定	越前町	環境都市工学科 教授 武井幸久 講師 江野和彦 助教 江本晃美	平成21.9.17～平成21.11.30	525,000
22年度 竹粉の有効利活用に係る調査研究 軟弱粘性土地盤における周面摩擦支持力丸太の開発と有効性の実証	合計	4件			4,725,000
	竹粉の有効利活用に係る調査研究	(株) サバエコンストラクト	物質工学科 教授 小泉貞之	平成22.7.20～平成23.3.31	200,000
	軟弱粘性土地盤における周面摩擦支持力丸太の開発と有効性の実証	兼松日産農林(株)	環境都市工学科 准教授 吉田雅徳	平成22.11.1～平成23.2.28	400,000
	合計	2件			600,000

平成20年度寄附金受入一覧

(単位：円)

	寄附者名	寄附金額	寄附の目的	担当教員等
1	財団法人日本板硝子材料工学助成会	1,426,500	一般科目教室 北浦守准教授の教育研究奨励	一般科目教室 北浦守准教授
2	株式会社田中地質コンサルタント	100,000	物質工学科 松井栄樹准教授の教育研究助成	物質工学科 松井栄樹准教授
3	株式会社大虫電工	100,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
4	株式会社カワチュウ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
5	東工シャッター株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
6	株式会社ミツヤ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
7	株式会社ホクシン	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
8	株式会社サンルックス	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
9	武生特殊鋼材株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
10	日東シンコー株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
11	日東シンコー株式会社	400,000	電気電子工学科 川本昂教授の教育研究助成	電気電子工学科 川本昂教授
12	丸一調査設計株式会社	60,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
13	大和建設株式会社	200,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
14	株式会社アタゴ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
15	株式会社福井銀行	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
16	株式会社カワチュウ	250,000	電気電子工学科 原田望教授の教育研究助成	電気電子工学科 原田望教授
17	サカイオーベックス株式会社	100,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
18	株式会社カズマ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
19	酒井化学工業株式会社	200,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
20	信越化学工業株式会社武生工場	1,000,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
21	福井めがね工業株式会社	60,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
22	轟産業株式会社	500,000	環境都市工学科 山田幹雄教授の教育研究助成	環境都市工学科 山田幹雄教授
23	丸文通商株式会社福井支店	100,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
24	福井工業高等専門学校 教育後援会	2,000,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
25	オムロン株式会社	1,000,000	国立高等専門学校における制御技術に係る教育研究支援のため	福井工業高等専門学校長
26	大日コンサルタント株式会社	600,000	環境都市工学科 辻野和彦講師の教育研究助成	環境都市工学科 辻野和彦講師
27	株式会社エコ・プランナー	300,000	環境都市工学科 奥村充司准教授の教育研究助成	環境都市工学科 奥村充司准教授
28	財団法人クリタ水・環境科学振興財団	750,000	物質工学科 高山勝己准教授の教育研究助成	物質工学科 高山勝己准教授
29	大日コンサルタント株式会社	100,000	環境都市工学科 辻子裕二准教授の教育研究助成	環境都市工学科 辻子裕二准教授

平成20年度寄附金受入一覧

(単位：円)

	寄附者名	寄附金額	寄附の目的	担当教員等
30	福井工業高等専門学校 教育後援会	300,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
31	株式会社不二越	500,000	機械工学科 田中嘉津彦教授の教育研究助成	機械工学科 田中嘉津彦教授
32	鯖江市めだかクラブ	30,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
計	32件	10,276,500		

平成21年度寄附金受入一覧

(単位：円)

	寄附者名	寄附金額	寄附の目的	担当教員等
1	福井県和紙工業協同組合	300,000	物質工学科 上島晃智教授の教育研究奨励	物質工学科 上島晃智教授
2	轟産業株式会社	500,000	環境都市工学科 山田幹雄教授の教育研究奨励	環境都市工学科 山田幹雄教授
3	株式会社ホクシン	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
4	武生特殊鋼材株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
5	東工シャッター株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
6	酒井化学工業株式会社	200,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
7	株式会社アタゴ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
8	丸一調査設計株式会社	60,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
9	有限会社古川陶苑	200,000	電気電子工学科 川本昂教授の教育研究奨励	電気電子工学科 川本昂教授
10	株式会社ホクコン	100,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
11	大和建設株式会社	200,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
12	福井工業高等専門学校 教育後援会	1,000,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
13	株式会社カズマ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
14	丸文通商株式会社福井支店	40,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
15	福井工業高等専門学校 機械工学科 岡田 将人	2,000,000	機械工学科 岡田将人講師の教育研究奨励	機械工学科 岡田将人講師
16	オムロン株式会社	1,000,000	国立高等専門学校における制御技術に係る教育研究支援のため	福井工業高等専門学校長
17	ナカヤ化学産業株式会社	200,000	図書・雑誌の購入	福井工業高等専門学校長
18	北陸テレコム懇談会	20,000	福井工業高等専門学校の教育研究助成	福井工業高等専門学校長
19	福井工業高等専門学校 教育後援会	1,000,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
20	信越化学工業株式会社 武生工場	300,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
21	株式会社 サンルックス	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
22	信越化学工業株式会社 武生工場	500,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
23	吉岡 幸 株式会社	40,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
24	福井工業高等専門学校 教育後援会	1,000,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
25	スガイ化学工業 株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
26	福井工業高等専門学校 教育後援会	500,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
27	坂田 憲 彦	150,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
28	福井県和紙工業協同組合	250,000	物質工学科 上島晃智教授の教育研究奨励	物質工学科 上島晃智教授
計	28件	9,700,000		

平成22年度寄附金受入一覧

(単位：円)

	寄附者名	寄附金額	寄附の目的	担当教員等
1	福井工業高等専門学校 教育後援会	1,000,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
2	轟産業株式会社	500,000	環境都市工学科 山田幹雄教授の教育研究奨励	環境都市工学科 山田幹雄教授
3	株式会社アタゴ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
4	酒井化学工業株式会社	200,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
5	武生特殊鋼材株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
6	株式会社ホクコン	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
7	大和建設株式会社	100,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
8	吉岡幸 株式会社	40,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
9	スガイ化学工業 株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
10	東工シャッター株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
11	信越化学工業株式会社 武生工場	800,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
12	株式会社 サカイエルコム	100,000	電気電子工学科 山本幸男准教授の教育研究奨励	電気電子工学科 山本幸男准教授
13	轟産業株式会社	40,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
14	ナカヤ化学産業株式会社	200,000	図書・雑誌の購入	福井工業高等専門学校長
15	福井工業高等専門学校 環境都市工学科 間瀬 実郎	38,815	環境都市工学科 間瀬実郎准教授の教育研究奨励	環境都市工学科 間瀬実郎准教授
16	福井工業高等専門学校 教育後援会	500,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
17	ジビル調査設計株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
18	株式会社 閔 組	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
19	福井工業高等専門学校 教育後援会	1,500,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
20	生越久靖	50,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
21	公益財団法人 中部電気利用基礎研究振興財団	140,000	一般科目教室 池田昌弘講師の教育研究奨励	一般科目教室応用物理 池田昌弘 講師
22	株式会社 若吉製作所	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
23	株式会社 不二越	600,000	機械工学科 田中嘉津彦教授の教育研究奨励	機械工学科 田中嘉津彦教授
24	福井工業高等専門学校 教育後援会	400,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
25	株式会社 カズマ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
26	大日コンサルタント株式会社	600,000	環境都市工学科 辻野和彦准教授の教育研究奨励	環境都市工学科 辻野和彦准教授
27	福井県和紙工業協同組合	250,000	物質工学科 上島晃智教授の教育研究奨励	物質工学科 上島晃智教授
計	27件	7,238,815		

平成23年度寄附金受入一覧

(単位:円)

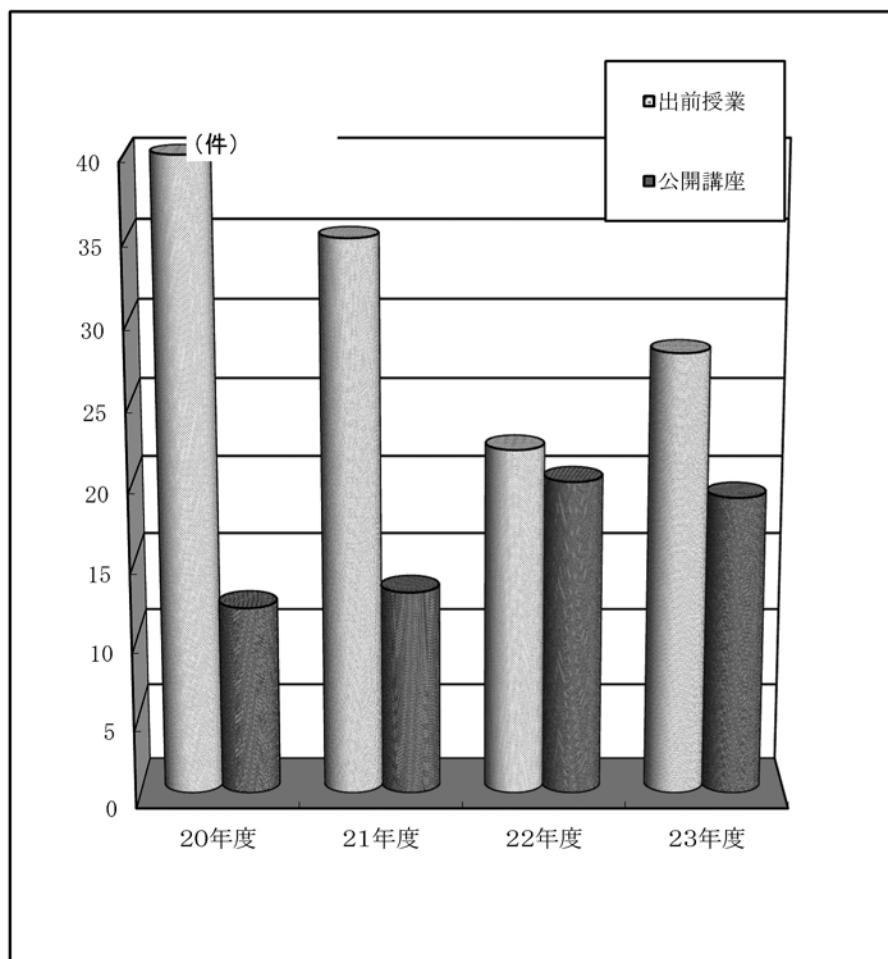
	寄附者名	寄附金額	寄附の目的	担当教員等
1	轟産業株式会社	500,000	環境都市工学科 山田幹雄教授の教育研究奨励	環境都市工学科 山田幹雄教授
2	株式会社ホクコン	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
3	株式会社 若吉製作所	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
4	酒井化学工業株式会社	200,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
5	東工シャッター株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
6	株式会社関組	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
7	ジビル調査設計株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
8	吉岡幸株式会社	40,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
9	株式会社アタゴ	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
10	大和建設株式会社	100,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
11	武生特殊鋼材株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
12	株式会社ホクシン	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
13	福井工業高等専門学校 環境都市工学科 辻子裕二	151,250	環境都市工学科 辻子裕二准教授の教育研究奨励	環境都市工学科 辻子裕二准教授
14	轟産業株式会社	40,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
15	信越化学工業株式会社武生工場	1,000,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
16	福井工業高等専門学校 地域連携テクノセンター	271,958	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
17	丸文通商株式会社福井支店	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
18	福井工業高等専門学校 教育後援会	1,500,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
19	サカイオーベックス株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
20	坂川建設株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
21	スガイ化学工業 株式会社	20,000	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	地域連携テクノセンター
22	ナカヤ化学産業株式会社	200,000	図書・雑誌の購入	福井工業高等専門学校長
23	財団法人 長岡技術科学大学技術開発教育研究振興会	200,000	物質工学科 高山勝己准教授の教育研究奨励	物質工学科 高山勝己准教授
24	公益財団法人天田財団	1,400,000	機械工学科 安丸尚樹教授の教育研究奨励	機械工学科 安丸尚樹教授
25	福井工業高等専門学校教育後援会	1,500,000	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	福井工業高等専門学校長
26	株式会社 不二越	1,000,000	機械工学科 田中嘉津彦教授の教育研究奨励	機械工学科 田中嘉津彦教授
計	26件	8,343,208		

出前授業・公開講座実施一覧

(件数)

年 度	出前授業	公開講座	合 計
20年度	40	12	52
21年度	35	13	48
22年度	22	20	42
23年度	28	19	47
合 計	125	64	189

※平成23年12月31日現在



出前授業実施一覧

■ 機械工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	9月20日	越前市大虫小学校	親子でおもちゃづくり体験	田中嘉津彦、藤田克志、芳賀正和、村中貴幸、吉田敏實、学生9名	小学校5年生とその保護者 140名
	10月15日	越前市神山公民館	おもちゃ(紙トンボ、バルーンカー)づくりの体験	藤田克志、学生5名	小学校1～3年生ほか、19名
	11月8日	福井市六条小学校	めざせ国技館！	安丸尚樹、学生3名	小学生、保護者、教員 200名
	2月14日	神山小学校	親子でおもちゃづくり体験	藤田克志、芳賀正和、学生9名	小学校1年～6年とその保護者 90名
■ 電気電子工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
20年度 118	6月11日	東陽中学校	ホバーフラフトの製作	川本昂	第2学年理科選択生徒 (18名)
	6月25日	東陽中学校	明るさの値段-電気エネルギーってどういうもの？- (I)	山本幸男、荒川正和	第2学年理科選択生徒 (18名)
	7月2日	東陽中学校	明るさの値段-電気エネルギーってどういうもの？- (II)	山本幸男、荒川正和、河原林友美	第2学年理科選択生徒 (18名)
	9月25日	福井市東安居小学校	科学不思議体験	川本昂、学生1名	小学校4年生72名
	11月12日	東陽中学校	燃料電池の製作	新谷邦弘、斎藤弘一	第2学年理科選択生徒 (18名)
	11月19日	東陽中学校	発電機を作ろう	新谷邦弘	第2学年理科選択生徒 (18名)
	11月26日	東陽中学校	科学不思議体験	川本 昴	第2学年理科選択生徒 (18名)
■ 電子情報工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	8月6日	越前市生涯学習センター	LEGOブロックでロボット作り	西仁司、奥田篤士	越前市内の小学生 (15名)
	8月7日	越前市生涯学習センター	LEGOブロックでロボット作り	西仁司、奥田篤士	越前市内の小学生 (14名)

■ 電子情報工学科						
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)	
	9月24日	鮭江東小学校	南極教室	前川公男	小学校3~6年児童 (236名)	
	10月26日	鮭江市学生活動拠点施設「らてんぼ」	初心者向けゲームプログラミング講座	蘆田昇	中学生 7名	
	1月21日	国高小学校	簡単なアニメーションを作成するプログラミング講座	蘆田昇, 学生3名	理科クラブの4年生~6年生32名	
	1月28日	国高小学校	簡単なアニメーションを作成するプログラミング講座	蘆田昇, 学生3名	理科クラブの4年生~6年生32名	
■ 物質工学科						
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)	
20年度	7月4日	オオタキ神社	和紙の里の歴史について	上島晃智	武生2中 1年生6名、教諭1名	
	7月9日	東陽中学校 理科教室	環境にやさしいものづくり「酸化と還元を利用したもののづくり化学	小泉貞之, 佐々和洋	中学生20名、教諭1名	
	7月9日	越前市味真野小学校 理科教室	液体窒素を用いた低温実験とものづくり科学	小泉貞之, 佐々和洋, 野村栄市	小学生(科学クラブ)20名	
	7月16日	東陽中学校 理科教室	光とエネルギー、回折と分光のものづくり	小泉貞之	中学生20名、教諭1名	
	7月24日	越前市南児童センター	液体窒素を用いた化学実験など	川村敏之, 高山勝己, 加藤敏, 上島晃智, 吉村忠与志, 野村栄市, 片岡裕一	小学生40人	
	7月29日	越前市国高児童センター	液体窒素を用いた化学実験など	川村敏之, 高山勝己, 津田良弘, 上島晃智, 吉村忠与志, 西野潤一, 野村栄市, 片岡裕一	小学生20人	
	7月30日	越前市味真野児童センター	液体窒素を用いた低温実験とものづくり科学	川村敏之, 松井栄樹, 小泉貞之, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	小学生15名、職員2名	
	8月1日	越前市中央図書館学習支援室	極低温の世界探検	吉村忠與志, 上嶋晃智, 野村栄市, 片岡裕一	小学生40名、保護者15名	
	8月9,10日	サンドーム	愉悦誘おもしろフェスタ	物質工学科全教職員, 5年学生30名	小中学生、保護者 2,000名程度	
	8月28日	福井高専	S P P 遺伝子技術に触れ生命の神秘について 考え方よ	川村敏之, 高山勝己, 片岡裕一, 野村栄市	中学生20名、教員2名	
	8月20日	あすなろ保育園	「あつと驚く実験」講義	吉村忠與志	保育士35名	
	11月8日	越前市中央図書館学習支援室	ふれてみよう楽しい化学教室	津田良弘, 小泉貞之	小学生30名、中学生5名、保護者10名	

■ 物質工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
20年度	11月9日	福井市東安居小学校	ふれあいフェスティバル「空気銃とアイスクリーム作製」	吉村忠興志, 小泉真之, 松井栄樹, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	小学生100名、保護者80名、教諭10名
	11月21日	福井高専	福井県消防学校専科教育「燃焼分析実験」	吉村忠興志, 片岡裕一, 野村栄市	福井県消防士24名
	11月22日	福井市酒生小学校	福井サイエンス寺子屋「低温実験」	吉村忠興志, 津田良弘, 片岡裕一, 野村栄市	小学生60名、保護者15名
■ 環境都市工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
20年度	6月18日	東陽中学校	「安全な飲み水とは?」	奥村充司, 辻子裕二	第3学年理科選択生徒
	7月30日	小浜市北川・天徳寺橋、高塚橋	平成20年度北川水生生物等による水質調査	奥村充司, 学生5名	雲浜まちづくり委員会(大人6名、小学生14名)
	9月6日	鯖江市環境教育支援センター	環境マップづくり	辻子裕二, 学生2名	4年~6年の児童20名
	10月22日	東陽中学校	地震が引き起こす液状化現象-エッキーを作ろう!	吉田雅穂, 阿部孝弘	中学校2年生(理科選択生徒) 18名
	10月29日	東陽中学校	川の水質を調べよう!	奥村充司, 田安正茂	中学校2年生(理科選択生徒) 18名
	11月26日	国高小学校	環境計測と環境マップづくり	辻子裕二, 学生2名	小学校4~6年の児童(科学クラブ) 30名+教諭2名
	12月10日	国高小学校	水の旅	奥村充司, 学生5名	小学校4~6年の児童(科学クラブ) 30名+教諭2名
	12月17日	国高小学校	形が変わると強さが変わる	辻野和彦, 学生2名	小学校4~6年の児童(科学クラブ) 30名+教諭2名
				計	40件

■ 機械工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
21年度	7月11日	大虫小学校	親子でおもちゃづくり体験	田中嘉津彦, 藤田克志, 芳賀正和, 村中貴幸, 吉田敏實, 学生11名	小学校5年生とその保護者(120名)
	8月12日	越前市社会福祉センター	バルーンカーとホバーフラフトの作製	藤田克志, 龜山建太郎, 金田直人, ほか学生6名	小学1~3年生(40名)
	10月3日	日野小学校	親子でおもちゃづくり体験	田中嘉津彦, 村中貴幸, 吉田敏實	小学校5年生とその保護者
	10月25日	中河小学校	親子でおもちゃづくり体験	芳賀正和, 学生4名	小学生および保護者(40名)
	3月14日	鯖江市神明健康スポーツセンター	アイデアロボットの実演と操縦体験	安丸尚樹, 藤沢秀雄, 学生6名	小学生, 保護者, 神明公民館関係者, 地区会役員(約100名)
■ 電気電子工学科					
実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)	
21年度	6月17日	東陽中学校	カラフル燃料電池の実験	川本 昴	第2学年理科選択生徒(17名)
	9月5日	越廻中学校	プラズマ発光と他の発光	川本 昴, 学生1名	全学年生徒(33名)
	9月28日	東安居小学校	科学不思議体験	川本昂, 学生1名	小学4年生(69名)
	11月18日	東陽中学校	太陽熱発電について	川本昂	第2学年理科選択生徒(17名)
	1月20日	東陽中学校	白熱電球, 蛍光電球, LED電球の省エネ性の比較実験	川本昂	第2学年理科選択生徒(17名)
	1月27日	東陽中学校	ソーラーパネルの特性評価	川本昂	第2学年理科選択生徒(17名)
	■ 電子情報工学科				
実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)	
8月6日	越前市生涯学習センター	LEGOでロボットを作ろう	西仁司, 奥田篤士	越前市内の小学生(15名)	
8月7日	越前市生涯学習センター	LEGOでロボットを作ろう	西仁司, 奥田篤士	越前市内の小学生(16名)	
8月29日	夢みらい館・さばえ	レゴブロックでロボットを作ろう	西仁司, 奥田篤士	鯖江市内の中小学生(23名)	
10月29日	文殊小学校	南極教室	前川公男	3~6年生児童, 保護者 4年生新型インフルエンザのため閉鎖(100名)	

■ 電子情報工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	11月8日	福井県生活学習館	アイボくん操作体験	西仁司, 学生4名	女性団体会員 (11名)
	11月25日	服間小学校 南極教室	前川公男	4・6年生, 教職員, 保護者(45名)※5年生は新型インフルエンザのため学年閉鎖で不参加	
	2月14日	清水南公民館	LEGOブロックでロボット作り	西仁司, 奥田篤士	小学生, 保護者, 公民館職員 (6名)
	2月23日	武生西幼稚園	ロボットによる出前授業	西仁司, 奥田篤士	幼稚園児, 保護者, 職員 (29名)
■ 物質工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
21年度	7月1日	神山公民館	身の回りのおもしろ科学 (化学)	津田良弘, 小泉貞之, 松井栄樹, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	神山小学校4年生 (27名)
	7月5日	和田小学校	超低温の世界を体験	吉村忠興志, 小泉貞之, 津田良弘, 西野純一, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	小学2年生とその保護者
	7月22日	南中山公民館	超低温の世界を体験	吉村忠興志, 加藤敏, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～3年生 (18名)
	8月4日	今立南部児童館	超低温の世界の体験とアルコールロケット	上島晃智, 西野純一, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～3年生 (35名)
	8月5日	国高公民館	超低温の世界を体験	吉村忠興志, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～6年生 (18名)
	8月12日	越前市社会福祉センター	身の回りのおもしろ科学 (化学)	上島晃智, 小泉貞之, 津田良弘, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～4年生 (45名)
	8月18日	味真野児童センター	身の回りのおもしろ科学 (化学) と超低温の世界を体験	津田良弘, 上島晃智, 加藤敏, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～6年生 (20名)
	8月22日	北日野公民館	身の回りのおもしろ科学 (化学) と超低温の世界を体験	津田良弘, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～2年生と保護者 (20名)
	8月25日	大虫公民館	身の回りのおもしろ科学 (化学) と超低温の世界を体験	加藤敏, 高山勝己, 西野純一, 松井栄樹	小学1～3年生 (54名)
	9月4日	清水中学校 (学園祭)	超低温の世界を体験	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 片岡裕一	学園祭での希望者の中学1～3年生 (60名)
	9月16日	味真野小学校	超低温の世界を体験	小泉貞之, 上島晃智, 川村敏之, 野村栄市	理科クラブ (20名)
	10月28日	東陽中学校	酸化還元反応を用いた身近な化学反応	小泉貞之, 佐々和洋	第2学年理科選択生徒 (17名)
	11月4日	東陽中学校	バイオマスエネルギーとしてのバイオエタノール	吉村忠興志, 片岡裕一, 学生2名	第2学年理科選択生徒 (16名)

■ 物質工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
21年度	3月30日	北新庄公民館	身の回りのおもしろ科学(化学)	小泉貞之, 野村栄市, 片岡裕一	小学1~3年生(7名)
■ 環境都市工学科	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	12月2日	東陽中学校(理科室)	生き物のかたちの不思議から構造を学ぶ	阿部孝弘, 奥村充司	2年生理科選択生徒(14名)
	2月10日	東陽中学校(理科室)	地球を測るぞ	辻子裕二, 阿部孝弘, 学生1名	2年生理科選択生徒(14名)
	計		35件		

■ 一般科目教室					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	9月15日	ハツ杉千年の森	天体の観望と星のお話	岡本拓夫、吉田三郎、学生2名	今立地区小学生 約20名
	10月7日	武生第一中学校	宇宙のはなし	加藤清考	中学3年生 48人 (24人×2回)
■ 機械工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	7月31日	福井高専メディアホール	越前市ロボットコンテスト講習会	亀山建太郎、西仁司(Ei)	越前市内の中学生19人
	10月31日	清明小学校	おもちゃづくり体験	加藤寛敬、田中嘉津彦、村中貴幸、岡田将人、吉田敏實、藤田祐介、本科生6名	小学4年生、保護者180人
	10月31日	中河小学校	親子でおもちゃづくり体験	藤田克志、専攻科生2名、本科生4名	小学1～6年生とその保護者 59人
■ 電気電子工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
22年度	10月23, 24日	福井県児童科学館	青少年のための科学の祭典福井大会2010出展	川本昂	県内小中学生 プースでのものづくり体験者 (70名)
■ 電子情報工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	8月6日	越前市生涯学習センター	LEGOでロボットを作ろう	西仁司、奥田篤士	小学生16名
	10月30日	武生東小学校	ロボット操作体験教室	西仁司	小学生20～25名
	10月30日	越前市武生東児童館	AIBOと遊ぼう	西仁司、学生5名	小学生およびその保護者25名
■ 物質工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	7月21日	王子保児童センター	越前市男女共同参画センター出前講座「わくわくサイエンス」	高山勝己(ほか)	小学1～3年生35人
	7月30日	武生東児童センター	超低温の科学	吉村忠興志、上島晃智、津田良弘、高山勝己、佐々和洋、野村栄市	小学1～6年生50人

■ 物質工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
2 年度	8月4日	南中山児童館	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 野村栄市, 片岡裕一	小学1~3年生25人
	8月11日	北日野児童館	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 西野純一, 佐々和洋, 野村栄市, 片 岡裕一	小学1~3年生30人
	8月17日	越前市生涯学習センター	超低温の科学	上島晃智, 津田良弘, 加藤敏, 野村 栄一, 片岡裕一	小学1~6年生約30人
	8月24日	神山保育園	超低温の科学	吉村忠興志, 小泉貞之, 津田良弘, 常光幸美, 川村敏之, 野村栄市	小学1~3年生約42人
	8月26日	味間野児童センター	超低温の科学	吉村忠興志, 小泉貞之, 西野純一, 野村栄市	小学1~3年生約42人
	8月31日	国高児童センター	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 西野純一, 松井栄樹, 野村栄一, 片 岡裕一	小学1~3年生30人
	9月3日	福井市清水中学校	超低温の科学	津田良弘, 西野純一, 野村栄市, 片 岡裕一	中学1~3年生60人
	9月11日	鳴鹿公民館	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 松井栄樹, 佐々和洋, 野 村栄市, 片岡裕一	小学1~6年生50人
	10月2日	順化小学校	身の回りのおもしろ科学(化学)と超低温の世 界	吉村忠興志, 小泉貞之, 高山勝己, 野村栄市, 片岡裕一	小学1~3年生と保護者 36人
	10月30日	東郷小学校	身の回りのおもしろ科学(化学)と超低温の世 界	吉村忠興志, 上島晃智, 高山勝己, 野村栄市, 片岡裕一	小学5年生と保護者 35人
■ 環境都市工学科	12月6, 7日	社中学校	バイオエタノールの生成と活用実験	高山勝己, 吉村忠興志	中学3年生30名
	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	10月7日	武生第一中学校	環境のはなし	奥村充司	中学3年生 48人 (24人×2回)
計				22 件	

■ 一般科目教室					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
	9月5日	岡本公民館	夏の夜空、星を見よう（星の物理と観望）	岡本 拓夫、吉田 三郎、補助学生1名	小学生47名、保護者、公民館関係（約100名）
		■ 機械工学科			
実施日	出前授業先	概要	担当教職員	担当教職員	対象者(参加者数)
6月18日	大虫小学校（越前市）体育館	親子でおもちゃづくり体験	田中 嘉津彦 助学生9名	他 教職員3名、補助学生5名	大虫小5年生と保護者 130名
6月18日	和田小学校（福井市）体育館	親子おもちゃ工作づくり体験	加藤 寛隆 学生5名	他 教職員4名、補助学生5名	和田小4年生と保護者 41組 82名
10月15日	岡本小学校（越前市）	親子でおもちゃづくり体験	田中 嘉津彦 補助学生6名	他 教職員1名、	小学生1～6年生とその保護者 90名
11月26日	王志保公民館 体育館	親子でおもちゃづくり体験	加藤 寛隆、藤田 克志、亀山 建太郎、補助学生6名	藤田 克志、亀山 建太郎、補助学生6名	小学生1～6年生（50名）保護者（37名） 計87名
		■ 電気電子工学科			
実施日	出前授業先	概要	担当教職員	担当教職員	対象者(参加者数)
23年度	6月20日 鮎江市豊小学校	環境学習「太陽熱利用」	川本 昂	川本 昂	豊小5年生42名
	8月11日 越前市生涯学習センター	環境・エネルギーに関する科学実験と理科工作	川本 昂	川本 昂	小学1～6年生30人くらい
	10月22, 23日 エンゼルランドふくい	太陽電池や燃料電池および超伝導体を用いたおもしろ実験	川本 昂、石栗 填一、ソーラーカー同好会学生（12名）	川本 昂、石栗 填一、ソーラーカー同好会学生（12名）	小中学生と保護者約100名（動員数は約8000名）
	11月5日 神明小学校 触れ合い学級	にここにこ 科学不思議実験	川本 昂	川本 昂	小学4年生とその保護者160名
	11月23日 (財)福井原子力センター 原子力の科学館「あつとほうむ」	スペシャル実験ショーアップ	川本 昂（ほか）	川本 昂（ほか）	幼児、小学生とその保護者約136名
		■ 電子情報工学科			
実施日	出前授業先	概要	担当教職員	担当教職員	対象者(参加者数)
	8月9日 越前市生涯学習センター	LEGOでロボットを作ろう	西 仁司、奥田 篤士	西 仁司、奥田 篤士	越前市内の小学生（16名）
	10月23日 中河小学校（鯖江市）	LEGOでロボットを作ろう	西 仁司、奥田 篤士	西 仁司、奥田 篤士	小学1～6年生30人くらいと保護者30名
	11月5日 神明小学校 触れ合い学級	にここにこ AIBOと遊ぼう	西 仁司 他補助学生5名	西 仁司 他補助学生5名	小学生と保護者80名×2回
	12月18日 三国東区民館	AIBOと遊ぼう	西 仁司、下條 雅史、補助学生2名（5Ei）	西 仁司、下條 雅史、補助学生2名（5Ei）	三国東地区の幼稚園児・小学生児童とその保護者53名

■ 物質工学科					
年度	実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)
23年度	6月21日	岡本幼稚園(越前市) ホール	楽しい化学実験	上島 晃智、佐々 和洋	岡本幼稚園児20名と保護者20名 合計40名
	8月9日	浜四郷公民館	超低温の世界	津田 良弘、西野 栄一、片岡 敏、 野村 栄一、片岡 裕一	小学1~6年生30人くらいと保護者5名
	8月20日	くすのき児童館	超低温の世界	津田 良弘、上島 晃智、加藤 敏、 野村 栄一、片岡 裕一	幼児と保護者及び小学1~6年生30名くらい
	9月3日	和田小学校(福井市) 体育館	超低温の世界	津田 良弘、上島 晃智、平井 恵 子、西野 純一、加藤 敏、野村 栄 一、片岡 裕一	和田小2年生と保護者 80組(160名)
	9月9日	清水中学校	超低温の世界	津田 良弘、上島 晃智、野村 栄 一、片岡 裕一	中学生40名
	9月14日	王志保小学校(越前市) 理科室	超低温の世界	小泉 貞之、松井 栄樹、高山 勝 巳	小学生25名
	10月15日	岡本小学校(越前市)	超低温の世界	加藤 敏、野村 栄一	小学生と保護者80名
	10月23日	中河小学校(鯖江市)	身の回りのおもしろ化学	吉村 忠与志、加藤 敏、佐々 和 洋、野村 栄一、片岡 裕一	小学1~6年生と保護者80名
	11月5日	神明小学校(越前市) 触れ合い学級	超低温の世界	加藤 敏、野村 栄一、片岡 裕一	小学生と保護者40名
	11月26日 [もうむ]	助福井原子力センター 原子力の科学館(あつと む)	カラフルな人工イクラを作ろう カラースライムを作ろう	津田 良弘、加藤 敏、佐々 和洋、 野村 栄一、片岡 裕一	小学生とその保護者 160名
■ 環境都市工学科					
実施日	出前授業先	概要	担当教職員	対象者(参加者数)	
7月15日	安居中学校 2年教室	地球を測る!	辻子 裕二、研究生1名	安居中学校2年生28名	
9月10日	どうじゅく(さばえNPO センター)	知ってるかな?防災のこと	辻子 裕二、研究生1名	どようじゅく塾生21名(小学生4・5・6年 生)	
10月15日	岡本小学校(越前市)	ペスターを作ろう	阿部 孝弘、補助学生3名	児童とその親120名	
11月3日	アオッサ6階工作室	サイコロコロコロ エコロジーをかんがえよ う!	奥村 充司	小学1~6年生20~30名	
		計	28	件	

公開講座実施内訳

年度	実施日	講座名	受講対象者／募集定員	受講者数
	6月28日, 8月2日	「化学」はじめの一歩	中学校3年生以上 20名	3名
	7月26日, 27日	『楽しい電子回路入門』－マイコンでロボットを動かしてみよう！－	中学生 12名	9名
	7月27日	夏休みの自由研究講座「ちからとかたち」	小学校高学年 10名	6名
	7月27日	やってみよう ソーラーカー手作り教室	小学生高学年・中学生 20名	20名
	8月1日, 8日, 22日, 29日 9月5日, 12日	技術士第一次試験を突破しよう！！	技術士第一次試験の受験を考えている人 15名	15名
20年度	8月2日, 3日	小学生のための初めてのプログラミング	小学生高学年 10名	2名
	8月7日	遊びは学び－You・遊・ものづくり教室－	中学生 15名	13名
	8月11日	電子顕微鏡でミクロな世界を見てみよう	中学生 10名	5名
	8月16日	忠先生の化学教室	中学生 10名	6名
	8月17日	電子工作教室「FMラジオを組み立てよう」	小学生, 中学生 10名	10名
	10月4日, 5日	英検準2級合格をめざして	中学生(英検3級取得者が望ましい) 社会人(英語学習を再開した方) 20名	4名
	12月13日, 14日	英文法基礎講座	中学3年生 20名	2名
			12件	

公開講座実施内訳

年度	実施日	講座名	受講対象者／募集定員	受講者数
21年度	7月25日	小さな大工さん講座 「木造住宅模型をつくろう！」	小学校高学年，中学生 8名	6名
	7月26日	やってみよう ソーラーカー手作り教室	小学校高学年，中学生 20名	20名
	7月26日	夏休みの自由研究講座 「ちからとかたち」	小学校高学年 10名	10名
	7月31日	電子顕微鏡でミクロな世界を見てみよう	中学生 12名	12名
	8月1日	おもちゃづくりから学ぶサイエンス	中学生 20名	12名
	8月1日，2日	『楽しい電子回路入門』～マイコンでロボットを動かしてみよう！～	中学生 6名	8名
	8月16日	電子工作教室「FMラジオを組み立てよう」	小学校高学年，中学生 10名	9名
	8月21日	化学を楽しむ講座	高校生以上 20名	
	8月22日	蛍光体の科学—電磁波と材料の不思議な関係—	小学校高学年以上 6名	4名
	8月29日			2名
	9月19日	ふるさと福井のかんきょうを測る	小学校高学年，中学生 20名	16名
	10月3日，4日	英検準2級合格をめざして	中学生以上 20名	5名
	10月10日	初めての簡単プログラミング	小学校4年生～中学校2年生 10名	7名
	12月12日，13日， 19日，20日	英文法基礎講座	中学3年生 20名	11名
			13件	

公開講座実施内訳

年度	実施日	講座名	受講対象者／募集定員	受講者数
	5月16日	防災マップ作成講座①	一般 30名	1名
	5月29日	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座①	中学生以上 12名	1名
	5月30日	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座②	中学生以上 12名	
	6月20日	防災マップ作成講座②	一般 30名	4名
	7月18日	防災マップ作成講座③	一般 30名	
	7月24日	小さな大工さん講座 「木造住宅模型をつくろう！」	小学校4～6年生、中学生 12名	12名
	7月25日	夏休みの自由研究講座 「ちからとかたち」	小学校4～6年生、中学生 12名	10名
	7月30日	電子顕微鏡でミクロな世界を見てみよう	中学生 10名	8名
	7月31日	手作り風車を作つてみよう	中学生 10名	3名
22年度	7月31日 8月 1日	『楽しい電子回路入門』 一マイコンでロボットを動かしてみよう！ー	中学生 6名	6名
	8月 1日	モータ制御を通して学ぶロボットのしくみ	中学生 10名	7名
	8月 1日	やつてみよう ソーラーカー手作り教室	小学校4～6年生、中学生 20名	20名
	8月15日	電子工作教室「FMラジオを組み立てよう」	小学校4～6年生、中学生 10名	10名
	8月21日， 22日	初めての簡単プログラミング	小学校4～6年生、中学生 10名	10名
	9月11日	オリジナル染(しおり)をつくろう 「錦箱の合成とチタンの着色」	小学校5～6年生、中学生 10名	10名
	9月11日， 12日	やさしい微生物実験講座	中学生 5名	2名
	9月25日， 26日 11月6日	英検準2級合格をめざして	中学生以上 20名	5名
	10月2日	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座③	中学生以上 12名	
	10月3日	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座④	中学生以上 12名	3名
	12月11日， 12日， 18日， 19日	英文法基礎講座	中学校3年生 20名	21名
	計		20件	

公開講座実施内訳

年度	実施日	講座名	受講対象者／募集定員	受講者数
2 3 年度	5月14日	防災マップ作成講座① 自律ロボット製作入門	一般 10名	
	6月18日	防災マップ作成講座② 防災マップ作成講座③	小学校5～6年生、中学生 8名	8名
	6月19日	親子理科教室（作ってみよう！やつてみよう！）	一般 10名	4名
	7月3日	電子顕微鏡でミクロな世界を見てみよう	小学校3～6年生 15名	
	7月24日	小さな大工さん講座「建築模型をつくろう！！」	小学校5～6年生、中学生 10名	15名
	7月28日	手作り玉スタークリエイション	中学生 11名	
	7月30日	やつてみよう ソーラーカー手作り教室	小学生 20名	6名
	7月30日	夏休みの自由研究講座 「ちからとかたち」	小学生 20名	20名
	7月31日	紙コプターを作つてみよう	小学生 19名	
	7月31日	電子工作教室「FMラジオを組み立てよう」	小学校4～6年生 12名	12名
	8月13日	オリジナリの乗をつくろう2011	中学生 20名	16名
	9月10日	光るタンパク質の不思議（遺伝子組換え実験にチャレンジしよう）	小学校4～6年生 10名	9名
	9月10日、11日	初めての簡単プログラミング	中学生 5名	1名
	9月24日、25日、11月5日	英検合格をめざして（準2級）	小学校4～6年生 5名	3名
	10月1日、2日、11月5日	英検3級合格をめざして－受験対策講座－	中学生以上 20名	7名
	11月3日	柴式部を読む	中学生以上 15名	2名
	12月17日、18日	英文法基礎講座	中学校3年生 20名	11名
				10名
				19件

公開授業実施一覧

年度	実施教員	授業科目	実施日	立会教員
20年度	村中 貴幸	材料力学II	平成20年6月18日	田中 嘉津彦, 芳賀 正和, 阿部 孝弘, 前島 正彦, 中谷 実伸
	佐藤 匡	制御工学	平成21年1月13日	
	吉田 三郎	英語 I	平成21年1月20日	
	常光 幸美	無機化学II	平成21年2月2日	
21年度	中谷 実伸	基礎解析B	平成21年12月14日	坪川 武弘, 山本 裕之, 荒川 正和, 西 仁司, 長水 壽寛, 宮田 一郎
	森 芳周	倫理社会	平成21年12月14日	小泉 貞之
	小泉 貞之	分析化学 I	平成21年12月14日	江本 晃美
	森 貞	英語 II	平成21年12月14日	原口 治
	米田 知晃	情報処理 I	平成21年12月15日	石栗 慎一, 新谷 邦弘, 西 仁司, 中谷 実伸, 丸山 晃生
	齊藤 徹	プログラミング応用	平成21年12月15日	荒川 正和
	石栗 慎一	コンピュータ科学入門	平成21年12月15日	米田 知晃
	藤田 克志・江本 晃美・(非常勤講師)高麗 孝弘	デザイン工学	平成21年12月15日	阿部 孝弘, 辻野 和彦
	西 仁司	計算機構成	平成21年12月16日	坪川 武弘
	平井 恵子	プログラミング基礎	平成21年12月16日	西野 純一, 津田 良弘
	宮本 友紀	英語 I	平成21年12月16日	柳原 祐治
	荒川 正和・米田 知晃・河原林 友美	電子創造工学	平成21年12月16日	大久保 茂
	加藤 敏	化学工学 I	平成21年12月16日	津田 良弘
	荻野 繁春	歴史	平成21年12月16日	朝倉 相一
	蘆田 昇	オペレーティングシステム	平成21年12月17日	奥田 篤士
	岡本 拓夫	物理(実験)	平成21年12月17日	石栗 慎一
	西野 純一	ものづくり科学	平成21年12月17日	佐々 和洋
	奥村 充司	環境衛生	平成21年12月17日	坪川 武弘
	米田 知晃	ものづくり科学	平成21年12月17日	川本 昂
	阿部 孝弘	ものづくり科学	平成21年12月17日	吉田 雅穂
	芳賀 正和	熱機関	平成21年12月17日	藤田 克志
	朝倉 相一	数理統計学	平成21年12月17日	廣部 英一
	新谷 邦弘	電気回路 I	平成21年12月17日	米田 知晃
	藤田 克志・芳賀 正和	ものづくり科学	平成21年12月17日	岡田 将人
	西 仁司	ものづくり科学	平成21年12月17日	金田 直人
	吉田 雅穂	構造力学 I	平成21年12月18日	村中 貴幸, 奥村 充司, 辻子 裕二, 長水 壽寛, 辻野 和彦

年度	実施教員	授業科目	実施日	立会教員
21年度	坪川 武弘	解析III	平成21年12月18日	柳原 祐治
	藤田 卓郎	コミュニケーションI	平成21年12月18日	宮本 友紀
	長水 壽寛	基礎解析A	平成21年12月18日	亀山 建太郎
	荒川 正和	電気工学I	平成21年12月18日	米田 知晃
	前多 信博	計測工学I	平成21年12月18日	米田 知晃
	青山 義弘	計算機構成論I	平成21年12月18日	西 仁司
	新谷 邦弘	電気機器	平成21年12月18日	河原林 友美
	加藤 省三	コンピュータ科学入門	平成21年12月18日	平井 恵子
	荒川 正和	電気電子工学実験III	平成21年12月18日	佐藤 匡
	奥田 篤士	コンピュータ科学入門	平成21年12月22日	加藤 省三
22年度	亀山 建太郎	自動制御	平成22年1月14日	佐藤 匡, 村中 貴幸, 坪川 武弘, 河原林 友美, 芳賀 正和
	加藤 敏	化学工学II	平成22年1月19日	西野 純一, 小泉 貞之, 芳賀 正和, 丸山 晃生, 津田 良弘
	坪川 武弘	解析III	平成22年6月28日	江本 晃美
	辻野 和彦	測量学	平成22年6月28日	江本 晃美
	西野 純一	物理化学I	平成22年6月28日	加藤 敏
	吉田 雅穂	構造力学II	平成22年6月29日	田安 正茂, 江本 晃美
	中谷 実伸	基礎解析A	平成22年6月29日	森 芳周
	吉村 忠與志	情報化学	平成22年6月29日	佐々 和洋
	横井 三朗	基礎解析A	平成22年6月29日	柳原 祐治, 坪川 武弘
	岡田 将人	機械工作実習	平成22年6月29日	村中 貴幸, 丸山 晃生
	小寺 光雄	英語V	平成22年6月29日	中村 吉秀
	間瀬 実郎	建築計画I	平成22年6月29日	江本 晃美
	小泉 貞之・佐々 和洋	物質工学実験I	平成22年6月29日	西野 純一
	近藤 基和	基礎解析B	平成22年6月29日	廣重 準四郎
	間瀬 実郎・江本 晃美・坪川 茂	環境都市工学設計製図I	平成22年6月30日	辻野 和彦
	西野 純一	無機化学	平成22年6月30日	小泉 貞之
	大久保 茂	電気回路演習	平成22年6月30日	荒川 正和
	加藤 清考	工学基礎物理I (3M)	平成22年6月30日	藤田 克志
	加藤 清考	工学基礎物理I (3B)	平成22年6月30日	池田 昌弘
	辻野 和彦	測量学	平成22年7月1日	阿部 孝弘, 奥村 充司, 坪川 武弘, 岡田 将人, 江本 晃美, 吉田 雅穂
	小泉 貞之	放射線概論	平成22年7月1日	高山 勝己

年度	実施教員	授業科目	実施日	立会教員
22年度	近藤 基和	基礎解析B	平成22年7月1日	朝倉 相一
	吉田 三郎	英語II	平成22年7月1日	柳原 祐治
	村中 貴幸	材料力学II	平成22年7月1日	山本 幸男
	荒川 正和	電気電子工学実験II	平成22年7月1日	佐藤 匡
	西 仁司	数値計算	平成22年7月1日	下條 雅史, 蘆田 昇
	吉田 三郎	英語II	平成22年7月2日	荻野 繁春
	平井 恵子・佐々 和洋	卒業研究	平成22年7月2日	松井 栄樹
	高久 有一	電気磁気学II	平成22年7月2日	西 仁司
	丸山 晃生	情報処理システム論I	平成22年7月2日	村中 貴幸, 大久保 茂
	石栗 慎一	電気機器	平成22年7月2日	荒川 正和
	前田 安信	国語表現	平成22年7月2日	山本 裕之
	川本昂・村中貴幸・青山義弘・小泉貞之・間瀬実郎	創造デザイン演習	平成22年7月2日	米田 知晃
	藤田 克志	流れ学II	平成22年7月2日	加藤 清考
	池田 昌弘	工学基礎物理I	平成22年7月2日	加藤 清考
	辻野 和彦	測量学	平成22年7月5日	阿部 孝弘
	河原林 友美	電子回路I	平成22年7月5日	米田 知晃
	前多 信博	計測工学I	平成22年7月6日	河原林 友美
23年度	奥田 篤士	コンピュータ科学入門	平成22年7月6日	加藤 省三
	村中 貴幸	知能機械演習	平成22年7月12日	加藤 寛敬
	大久保 茂	電気回路IV	平成22年7月12日	川本 昂
	田安 正茂・江本 晃美	環境都市工学実験実習 I	平成22年7月16日	間瀬 実郎
	松尾 光恭	機械工作実習	平成23年6月15日	加藤 寛敬
	米田 知晃	電気実験	平成23年6月24日	金田 直人
	平井 恵子	コンピュータ科学入門	平成23年6月27日	村田 知也
	河原林 友美	電子回路I	平成23年6月27日	丸山 晃生, 前多 信博, 亀山 建太郎
	山田 孝徳	保健体育	平成23年6月27日	島田 茂
	森下 篤郎	建設法規	平成23年6月28日	江本 晃美

年度	実施教員	授業科目	実施日	立会教員
23年度	米田 知晃	電気電子工学実験IV	平成23年6月28日	大久保 茂
	柳原 祐治	基礎解析B	平成23年6月28日	池田 昌弘
	前川 公男	電子回路	平成23年6月28日	朝倉 相一
	吉田 三郎	英語 I	平成23年6月28日	廣重 準四郎
	小泉貞之, 片岡裕一, 野村栄一	ものづくり科学	平成23年6月29日	西野 純一
	加藤 清考	工学基礎物理 I	平成23年6月29日	長水 壽寛
	金田 直人	機械設計法	平成23年6月30日	辻野 和彦, 山本 幸男, 安丸 尚樹, 千徳 英介, 村中 貴幸, 田中 嘉津彦
	吉村 忠与志、西野 純一	物質工学実験III	平成23年6月30日	津田 良弘
	野村 保之	電子工学基礎	平成23年6月30日	西 仁司
	藤田 克志	流れ学II	平成23年6月30日	河原林 友美
	河原林 友美	電子回路 II	平成23年6月30日	川本 昂, 五味 伸之
	近藤 基和	基礎解析A	平成23年6月30日	柳原 祐治
	小寺 光雄	英語IV	平成23年6月30日	吉田 三郎
	吉田 三郎	英語 I	平成23年6月30日	森 芳周
	辻野 和彦・江本 晃美	環境都市工学設計製図 II	平成23年7月1日	阿部 孝弘
	川本 昂	電力システム I	平成23年7月1日	佐藤 国
	常光 幸美	電気化学	平成23年7月1日	高山 勝己
	津田 良弘	卒業研究	平成23年7月1日	松井 栄樹
	蘆田 昇	オペレーティングシステム	平成23年7月1日	下條 雅史
	野村 保之	電気回路	平成23年7月1日	蘆田 昇
	川本 昂	電力システム I	平成23年7月1日	佐藤 国
	島田 茂	保健体育	平成23年7月1日	東 章弘
	辻子 祐二	地盤工学II	平成23年7月4日	江本 晃美
	斎藤 徹	情報構造論	平成24年1月19日	蘆田 昇, 池田 昌弘, 高久 有一

教員の派遣一覧 — 平成16年度以降 —

■海外先進教育実践支援プログラム

年度	氏名	学科等	渡航期間	渡航先国名	研究題目
平成16 (2004)	常光 幸美	物質工学科	H17.3. 30 ～H18. 3. 29	連合王国	めつきプロセスによる金属ナノ構造材料創製
	吉田 雅穂	環境都市工学科	H17.3. 25 ～H18. 3. 24	アメリカ合衆国	安全なものづくりのための力学教育法の構築

■国際研究集会派遣研究員

年度	氏名	学科等	渡航期間	渡航先国名	研究集会名
平成17 (2005)	吉村 忠興志	物質工学科	H17.12. 15 ～H17. 12. 20	アメリカ合衆国	2005環太平洋国際化学会議

■独立行政法人国立高等専門学校機構内地研究員

年度	氏名	学科等	渡航期間	派遣先大学名	研究題目
平成18 (2006)	岡田 将人	機械工学科	H18.5. 1 ～H19. 2. 28	金沢大学大学院	CBN(立方晶窒化ホウ素)工具を用いたハードミリングに関する研究
	田安 正茂	環境都市工学科	H18.5. 1 ～H19. 2. 28	長岡技術科学大学 大学院	人工構造物に作用する流体力の数値計算法の開発およびその現地検証
平成22 (2010)	金田 直人	機械工学科	H22. 5. 1 ～H23. 2. 28	金沢大学大学院	合纖仮燃加工における撃トルク発生のメカニズムに関する研究

■独立行政法人国立高等専門学校機構在外研究員

年度	氏名	学科等	渡航期間	渡航先国名	取組名称
平成19 (2007)	丸山 晃生	電気電子工学科	H20.3. 30 ～H21. 3. 1	オーストラリア国立大学 (ANU)	非古典論理に対する自動推論システムの構築とその高専教育への展開

※平成23年12月31日現在

自己点検・評価委員会委員名簿

委 員 長	池 田 大 祐	校 長
委 員	上 島 晃 智	副校長（教務主事）
委 員	藤 田 克 志	副校長（学生主事）
委 員	坪 川 武 弘	副校長（寮務主事）
委 員	田 中 嘉津彥	副校長（企画室長）
委 員	阿 部 孝 弘	校長補佐（専攻科長）・JABEE 委員長
委 員	加 藤 寛 敬	機械工学科長
委 員	川 本 昂	電気電子工学科長
委 員	蘆 田 昇	電子情報工学科長・総合情報処理センター長
委 員	津 田 良 弘	物質工学科長・創造教育開発センター長
委 員	廣 部 英 一	環境都市工学科長
委 員	山 本 裕 之	一般科目教室（自然科学系）主任
委 員	廣 重 準四郎	一般科目教室（人文社会科学系）主任
委 員	小 寺 光 雄	図書館長
委 員	坪 川 武 弘	総合教育開発センター長
委 員	山 田 幹 雄	地域連携テクノセンター長
委 員	前 川 公 男	教育研究支援センター長
委 員	根 本 直 之	事務部長

自己点検・評価報告書

平成24年2月発行

編 集 福井工業高等専門学校自己点検・評価委員会

発行者 独立行政法人 国立高等専門学校機構
福井工業高等専門学校
〒916-8507 福井県鯖江市下司町
TEL 0778-62-1111 (代)
FAX 0778-62-2597 (総務課)
URL <http://www.fukui-nct.ac.jp>

FUKUJUNATIONALCOLLEGEOFTECHNOLOGY

